The Current
Literature
Library

31-555-(12)
*1200601255751*

始

# 陸奥直次郎

新興文藝叢書 12

長與善郎

東京
春陽堂

内容

陸奥直次郎……一
ダビデとバテシバ……一八九

31
555
(12)

I種
W

*1200601255751*

陸奥直次郎

# 上篇

## 一

法學博士陸奥直次郎は、同じく法學博士で大審院長であつた男爵陸奥直之の長男であつた。彼の出産は此家に何代となく男の子が生れた事がなかつた爲めに――彼の父も、祖父も養子であつた。――非常な歡びを以て迎えられた。そして彼を産むだ時母親は一同からその「お手柄」を賞讃されて産褥の上で微笑み、父の男爵も――其頃は只格のいゝ判事であつたが、法廷で非常な手柄をした時のやうに興奮して喜んだものであつた。

直次郎はかう云ふ好運の中に産れた子の常として體が虛弱であつた。彼は子供の時から顏色が惡く、體格も何方かと云ふと小柄の方であつた。で、よく病氣を



して親を心配させた。そしてそれが癒る度毎に親にその存在の有り難みを思ひ知らせる事に依つて一層その寵愛を恣にした。從つて彼は早くから自分の存在が周圍の人々にとつて如何に重んぜられ、尊ばれてゐるものであるかを知つてゐた。

母親が一度怖る〳〵その妹に彼の星を易者の處に行つて訊かせた。それを賴んだ後で彼女は馬鹿な事を賴んで了つたと思つて恐怖の爲めに後悔した。そしてどんな不吉な事を云はれやうと只嘲笑つて聞き流すことにしやうと決心した。易者は彼の星を占つて「立身はする。併し一生色の迷ひに煩はされる。そして終りを完ふしない。」と云つた。叔母は弱つた。そして母親の處へ行つて嘘を吐いた。「始めはいろ〳〵な困難がある。併し段々星が榮えて來て五十を越すと非常に立身するさうだ」と。

母親は笑つて喜んだ。そしてその事を夫に話した。夫は彼女の迷信を「馬鹿」と云つて叱つたが、「しかし彼女がお前に安神させやうとして嘘を云つたのかも知れないぞ。」かう云つて脅かし乍ら笑つた。そして、「馬鹿らしい事だがまあ不吉な事

を聞くよりはいゝ」と思つた。

母親は又心配し出した。そして益々直次郎を甘やかした。直次郎はかう云ふ好運な、我儘放題に育つた、虚弱な寵兒が、よくさうであるやうに、到つて臆病者であるが、見榮坊で、強がりで、時には殘酷でさえあつた。彼の長屋にゐた二三の男の子は皆彼の奴隷のやうに彼の御機嫌を伺はなければならなかつた。彼が食べろと云へば、彼が啜つた後の蜜柑の粕までも食はなければならなかつた。尤も彼がかうした暴君になる時には彼の内に少しづゝ眼を覺ましつゝあつた慈悲心が痛んだけれど、彼は慈悲心に負ける事を意氣地のない事として恥ぢた。誰も彼を叱る者がなく、唯彼をおだてゝ許りゐた。そして彼が蜜柑の話を得意で彼の母親に話すと、母親は「まあ、たまらないね。可哀相に。」と云つて笑ふのみであつた。數年の後彼に二人の弟が續いて生れた。で、無神經な人々は「もういよ〳〵御安神ですな。」なぞと云つて、却つて男爵夫妻の機嫌を取りそこなつたりしたものであつた。



## 二

直次郎は六つ、七つの頃から既に「どの女は縹緻がいゝ」とか、「美人」とはどんな女の事を云ふのか、「あの娘は醜い」とか云ふ眼識が著しく發達してゐた。學校でも彼は「若樣」と云はれて餓鬼大將になつてゐたが、其處で出來た朋輩――それは强ち「惡友」と云ふわけでもなかつたが、――に依つていろ〳〵の賤しい事を覺えた。

彼は十二の時に〇〇を覺えた。勿論此事は早くから彼の色慾の發達を促したがそれから彼は一層顏色が惡くなつた。十六七になつた時に彼は女中達が〇〇〇に入つてゐる姿を〇〇手段に苦心した。彼はわざ〳〵足袋跣足になつて、こつそり裏庭から湯殿の方に廻はつたりした。或る時には又椽の下を匐つて召婢の便所の方に行く事を企てたりしたが、座敷の椽の下に入らうとした時母親に見つかつた。彼は「ベースボール」の球が此下に入つたのだと云つて胡魔化した。併し自分で

もそれが餘りに辱し過ぎる事であり、自分以外の誰も此樣な見下げ果てた眞似は「しないに定まつてゐる」と云ふ事を十分知つてゐた。如何なる人にも白狀し兼ねる此淺間しい目的の爲めに椽の下を匐つたりする自分の姿を想像して自分の鼻先きを血の出る程抓つた。そしてそれなり其惡戯は斷念した。

彼が入學試驗に落第した事と、彼をその惡友から引き離す必要とから彼の父は彼を獨逸に留學させる事にした。それは明治二十年頃の事であつた。勿論此事は非常な冒險であつた。それで此問題の爲めに父と母とは三月も爭つたのであつた。

「彼奴を本當に善くしやうと思ふなら今思ひ切つた事をしなくちやいけない。つまり彼奴を寂しさと、不自由とで苦しめてやる事だ。身の程を知らない我儘放題と、贅澤な、自惰落な習慣とが若い彼奴を腐らせやうとしてゐる。其腐敗から彼奴を救つてやる爲めに俺は思ひ切り鹽辛い世間の荒海の中に彼奴を一人放り込んでやらうと云ふのだ。そして自分の事を一切自分でさせて見るのだ。彼奴はその孤獨と不自由の中で始めて自分がどんな者かを知るだらう。それが何よりの教育



だ。」男爵はかう云つた。彼は言葉のハヅミから自分で自分の感情や決心の意味を少し誇張してゐたので、興奮してゐた。それから彼は又毎もの口癖で附け足した。

「俺を見ろ。俺が彼奴の齡頃に大阪の塾で澤庵一片を菜にしてどんな苦學をして來たかを。苦しまずには修業は出來ない。獨學だ。經驗だ。それに度々云ふやうに日本で最高の學問を修めると云ふ事は未だ出來ない。なあに、息子を洋行させる位の事はもう十年も經てば長崎にやる位の事になつて了ふのだ。又俺達兩親の爲めにも之は善い事だ。」

「では何年位？」と夫人が沈んだ調子で訊いた。此の訊き方は夫の内に彼の妻に對する甘い情感を起こさせた。

「彼奴がドクトルの學位を得る迄だ。まあ七八年はかゝるだらうな。」彼は細君の美しい眼を見て樂しみながら優しく答へた。

夫人は溜息を吐いた。

「あれの體さへ心配がありませんでしたらね。」

「お前はその心配を誇張して彼奴を腐らかして了ふんだ。あれの今の體格なら徴兵も免れないよ。」夫は少し氣嫌を惡くして云つた。「彼奴の腕を見ろ。俺のよりはずつと太い。」

「西洋へ行つて、まあ、體の方は幸に無事だつたとしても何かしくじらなければ宜しいが。貴方はあれを洋行させれば屹度妾達の望み通りな事をして來るものと思つてゐらつしやるのね。」

「彼奴は今でもお前よりは利口だよ。自分の一身にとつてどうすれば利益かちやんと心得てゐる。それに俺は彼奴の頭腦を信じてゐる。」

此最後の一言は彼には自分の傲りであつた。

「妾の云ふのは女の事ですよ。」と夫人は云つた。「貴方、あれが黄色い髪の、青い眼の女をお土産に連れて歸つて來て、「さあ、貴方々のお望み通りドクトルの稱號を貰つて來ましたから其代りに此女を女房にして下さい」とでも云ひ出したらどうなさるお心算？妾は今からそれが苦になりますの。少し位遊んでくれたつてまあ我慢しますが、毛色の異つた女房ばかりはね。」



「ふむ。そんな事が。女のしさうな取り越し苦勞だ。」夫は輕蔑した口調でかう云つた。彼は此事は全く考えてゐなかつたので、少し面喰つたのである。

「だから父親と云ふものは頑固な驢馬に譬へられるんですわ。どうしてそんな事が斷じてないと云へませう。あれが泊る下宿に丁度年頃の娘でもゐたとして、長い年月の間にどうしてそんな間違ひが起らないと云へませう。そして子供でも出來て了つて、向ふの親につけ込まれでもしたら。あれはそれを振り離して來る勇氣はありませんよ。貴方は一人で自分の子の事を何もかも見拔いてゐる心算でゐらつしやるけれど、子供の性質は妾の方がずつとよく知つてゐますよ。あれは其方には隨分危ない子なのですからね。」

「だから俺は加藤に彼奴の監督を賴まうと云ふのぢやないか。どうせあれは伯林の加藤の處に最初訪ねて行くのだから。手紙で詳しく賴んでやるよ。つまり加藤が時々不意にあれの下宿を訊ねてそれとなく萬端の樣子を見る。そして必要だつ

たらどん〳〵居場所を變へさせて了ふ。」

「まあ。馬鹿らしい。そんな大ザッパな事をしたつて何になりませう。貴方のやうな頭で裁判される者はたまらないわね。」夫人は昂ぶつた感情の餘りに此處迄云つて了つた。

「何だ!? そんならお前は彼奴が日本にゐれば必ず安全だと云ふのか!?」男爵は憤つて云つた。「そんな馬鹿な事が萬一あつたとしたら金をやつて斷ち切らせて了ふ丈けの事だ。馬鹿な! 子供ぢやあるまいし!」

此會話の後夫婦は二日の間殆んど口も利かなかつた程の喧嘩をしてゐた。勿論細君の方が怒つてゐたのではない。彼女の「貴方のやうな頭で……」と云ふ熱した不注意な一言が男爵をひどく怒らせたのである。彼は事によつたら離緣もし兼ねない位に怒つてゐた。

併し一ヶ月の後に直次郎が日本を立つ日は定まつた。その前夜に送別の宴會が開かれた。彼は其席上で「國家と兩親と自分との顔を傷けるやうな事は斷然しな



い心算だ。その反對に一旦出かけた以上はその名譽を益すやうな仕事を何か成さない中は歸つて來ない心算だ。どうか自分は出來るだけ自分の身を大事にするから自分の事は安心してゐてほしい。自分は兩親や、一同の人々が幸福で、平和で、健在である事を心から望む。」と云ふ意味の事を喋舌つた。かう云つた時彼はいろ〳〵の感激の爲めに燃える眼に涙さへ溜めてゐた。そしてその貧血性の蒼白い顔が苦々しい興奮の爲めにぽうつと赭らむだ時（多血性の人なら眞赤になる處なのだが）それは人々に忘れ難い印象を殘した程愛らしくて美しいものであつた。勿論彼の母はそれを見て泣いた。叔母も貰ひ泣きをしてゐた。そして此言葉はすつかり彼の父を滿足と誇りとで充たした。其處に集つた皆の上に彼の出發に依つて希望が輝くやうにさへ見えた。

「さうだ。あれは俺の顔を汚ごすやうな事をする馬鹿ではない。俺はもつとあれを信じてゐていゝのだ。彼は思つたより猶ほ利口で齡のわりにしつかりしてゐる。」男爵はかう思つた。彼には妻の云つた事が氣になつてゐた。何故なら當時の

日本の社會の狀態として外國人を妻にすると云ふ事は全く不評判の、從つて不利益の種子であつたからである。

## 三・

直次郎は十九であつた。誰にでも何かしら人生についての象徴的な感銘を與へずにはゐない航海と云ふものは殊に青年が始めてそれをする時には露骨にその感じをうけるものである。白羽のやうな波を蹴つて進む自分の船と、洋々とした大海との關係は若い小さい自己と、あらゆる秘密な不思議（ウリンダア）を含む人生との關係を想はせずには濟まない。其沈默してゐる巨大な魔物は怖ろしく無氣味ではあるが、又何となく若々しい血を浮立たせるやうな美しいものに彼には思はれる。此秘密の扉をあばいて其處に人知れず永遠に繫がれてゐる美しき者のいきしめを自分の手でほどき、我胸に抱き度いと云ふ冒險慾のおのゝきから青年はローマンチックになる。その時に彼は戰慄する勇敢な、しかも臆病な血を沸き立たせ、獨立の欲



望と熱情的な力とに充ちて、燃えるやうな夕陽が海の果てに沈むのが眺められる甲板を一人で歩き廻る。そして一人で歩き廻はりながら何時の間にか自分のわきに誰かしら運命の伴侶が自分と手を組んで共に歩む事を空想してゐる。併しやがて一人の沈默した夕食と、孤獨な夜とが彼を幼年時代の家庭と兩親の膝元に送り返へす。そして一切の美しい過去が彼をセンチメンタルにする。彼は自分が如何に父母に對して熱愛を持つてゐるものであるか、否、自分の家其物に對してすらもどのやうな深い愛を持つてゐるかを感じる。送別會の席で自分が顏をほてらせながら挨拶をした事や、其晩に母親が彼の寢床に來て彼を抱きしめて共に泣いた事や、翌朝彼を玄關に見送つた時の燃えるやうな彼女の顏や、彼を船に迄見送りに來て自分の父として彼が未だ嘗て見た事もなく、想像した事すらもない程の注意と懇切とを以ていろ〳〵の事を彼に注意し、少くも一週間毎には必ず手紙を寄來す事、航海の中でも港に着く度毎に必ず便りをするやうに云ひ含めて彼の手を握つた時の手の溫さや、うるんだ眼を思ふ。すると又此年齡で此のやうな冒險と、

長い別離をさせられる我身が可哀相にもなつて彼は泣いて了ふのであつた。

「なあに、西洋へ行けば面白いものや、美しいもの、驚くべきものがいくらもある。」と彼は又父の言葉を想ひ出して自分に云つた。船は一人手に自分を其處へ連れてつて呉れる。しつかりしてゐればいいのだ。再びいろ〳〵の夢想が彼の頭に浮んだ。彼は自分の幸運を思ひ、親の愛を思つた。多くの青年が見度くも許されない「不思議(ウワンダア)」を自分は見る事が出來る。で、彼は此幸運に報いる丈けの立派な仕事をしやう。うんと勉強をしやう。そして父母を驚かしてやらうと思つた。

『しかし此のやうに無邪氣で、純潔な青年であつた彼の心に此運命から與へられた自由を他のもくろみの爲めに喜ぶやうな心が更に無かつたと云へば嘘である。彼は未だ女を知らない青年の單純なムキさと、純潔な希望を持つてゐる傍ら、自分の未だ知らない、味つた事のないいろ〳〵の「生の秘密——快樂」を憧れてゐた。女を知り度がつてゐた。兩親の許では出來ない惡戯がして見度かつた。その空想は怖ろしくもあり、羞かしくもあつたが、怖ろしく、羞しいものであつたが



故に又彼を魅するのであつた。彼には其空想が不道德にも思はれたが、それは只概念であつたから實際は彼の心にひびかなかつた。彼は父母の顏を想ふ時、殊に母の顏を想ひ出す時純潔な童貞の心になり、熱心な責任を感じ、眞摯な要求に充たされた。母の顏は彼には道德的、少くも「謹しむだ生活」と、勤勉と、立身した未來と、社會的光榮との象徵であつた。そしてさう思ふ事は彼には義務でも何でもなく、只自分の簡單な本能的慾望から自然に出來るものであつた。併しその母の顏は何時の間にか見知らぬ女の顏に變つて行くのであつた。彼の前に、彼の爲めに、「あらゆる幸福と歡び」——勿論それは未だ子供である彼自らの言葉に過ぎないが——を齎らすであらう處の香ひの芳い金髮の女が立つてゐた。「其女は自分を醉はすであらう。あゝ俺は解つて見度い。何にでも。幸福であらうと、快樂であらうと。」が、要するにそれは單なる一時的の華かな快樂、彼の肉慾の好奇心を滿足せしめて呉れる物であれば足りるものらしかつた。「もし出來る事なら遊んでやらう。大いに遊んでやらう。向ふでは誰も自分を見てゐる者はない。」併しそ

の幻影は又他の形をとつて現はれた。それは彼が泊つてゐる素人家の娘だ。その娘の兩親は親切で、善良である。そしてその娘は彼が毎朝大學に通ふ時窓から彼に挨拶の眼を投げかけ、彼の處に郵便を持つて來るのだ。それからもし彼が病氣をした時には……。夜の食事の時には、その娘が自分の隣りに來て坐る。此二つの幻影の間には全く違つた別々の感じがあつた。そして不思議な事に、彼が前の幻影を望む時それは彼が社會的榮達を慾する本能と撞着しなかつた。「何、要領よくやりさへすれや何をしたつて構ふ事はない。人間は圖々しくなくちや生きて行く事は出來ないのだ。」と嘗て軍人である彼の伯父が彼の前で云つた言葉の意味に於てそれは撞着しないのだ。しかし他の素人家の娘と、その家庭生活の幻影とは彼の童貞や、純潔な生活や、母親の愛等と調和するやうに思はれた。そしてその時には彼は美しい家庭的幸福を考えた。——そしてもし自分がその娘を好き、その娘も自分を好いて、自分がその娘を連れて日本に歸るやうな事になつたら……父母は何と云ふだらう。それは有り得る事に思はれた。そして彼に心配が來た。し



かし「あゝ、馬鹿！」

仕舞ひに彼はかう云つて鏡に自分の顏を映して——彼は自分の顏に自信を持つてゐた。「俺なら西洋人だつて馬鹿にはしないだらう。背は低いが、體は小さいが、日本人にもこんな氣持のいい、可愛い、利口な青年がゐるかと思ふだらう。俺はきつともてる。」彼は内緒でかう思つてゐた。——一人でむづむづし乍ら微笑むだ。「何しろ早く着かなくてはいけない。早く着けばいゝ。」彼は元氣になつて切りにかう思つた。しかし又た自分が今からもうこんな事を考えてゐる事を知つたら兩親は嘸ぞ驚くだらうと思ふとそれを嘲笑ふ心にはなれずに却つて濟まないやうな、空怖ろしいやうな氣にもなつた。が、結局次第に自家の事は始めの程には思ひ出さなくなつた。

## 四

獨逸に着いて後の當初の彼は船中での大膽な空想にも似合はず、子供らしい、

彼を一見する誰からも同情を牽くやうな、勤勉で、素直で、溫和しい、羞にかみやの青年であつた。烈しいホーム・シックと、遠く隔れば隔るにつれて益々强くなる許りの兩親に對する愛と、寂しさと、言葉の不自由から一層强く來る孤獨とが、彼の氣分やら、生活やらをそんな風にさせたのであつた。彼は萬事の餘りの變化の爲めに自分自身までが無くなつたやうな內面の空虛と心細さとを感じた。彼の內のある本能なぞは何處かの隅に縮み込んで了つたやうに見えた。そして彼はそれ等の一切の混沌から脫して、はつきりした自意識を取り戻す爲めの唯一の手段として每日のやうに兩親へ手紙を書いた。そして自分の生活や、氣持ちを何もかも說明して書いてゐると、自分自身や、一切の狀態がどんな風になつてゐるのかゞはつきり意識されて來るのがいくらか自分を氣丈夫にするのであつた。彼は又日記をつけた。(それも父の注意に從つたのである) 彼には父の注意や言葉が如何に本當で、行き屆いてゐて、實際にふれてゐるものであるかゞ始めて分つたやうな氣がした。かうして一人になつて見ると父程貴い、賴みになる標準はな



かつた。で、彼は額緣を買つて來て父母の寫眞を入れ、それを机の上に飾つた。しかし或る日女中が彼の室を片付けに來た時それが彼の兩親の寫眞かと彼に訊いた。彼はその女中の微笑むだ眼にある輕蔑——殊に彼の丸髷を結つた母親に對する——を認めた氣がした。彼は赤くなつた。併し女中が行つて了つた後で何故撲つてやらなかつたのか自分で自分を齒痒ゆく思つた程腹が立つた。そしてそれ以來彼はその寫眞を机の抽斗に入れて了つた。

併し、彼が思つてゐた通り、彼は直ぐ誰からも可愛がられるやうになつた。人人は「可愛らしい日本人」と彼を呼んだ。そして勿論彼も其事を承知してゐた。で、此事が段々彼を氣丈夫にし、彼をそのセンチメンタリズムから次第に社會的生活の樂しみの方に解放した。尤も彼が學校に入つた當坐は孤獨な心細さが再び彼の心を占領したけれど、それも二三箇月の間の事で、言葉の不自由が次第に少くなり、彼を嬲り者にしない友達が一人二人と出來るにつれてその生活に興味を覺へ始めた。

が、要するに二三年の間は彼は溫和しい、勤直な學生であつた。學問も相當に出來、親讓りの語學の才能の著しい發達の爲めに教師からも賞められ、愛された。そして自分で自分をさう云ふ忠實な學生らしい一種の型に嵌めて了ふと、その型が身について了つて、それを破らうとか、變へやうとか云ふやうな氣は更らに起らなくなつた。却つてその型の内にゐると云ふ意識が彼を安神させ、滿足させた。何故なら此型の内にちやんとしてゐれば自分は人々から愛され、自分も落ちついてゐられるが、此型から外へ飛び出たら自分は早速孤獨になり、そしてその孤獨は堪えられないものであると思つてゐたからである。何より生活にとつて大切な事、幸福な事は人々の愛の中に安住する事である。

併し彼は相變らず時々手淫をした。そしてその時には彼の前にいろ〳〵の女が――町で行き逢つた女や、彼に兩親の寫眞を訊ねた女中や、此家に時々來る何處かの娘やが現はれた。

或る日彼は散歩の歸りに態々へンな裏辻のやうな處を選つて歩いた。彼には分



らなかつたが、怪しい家や、女がゐた。その女は他の女とは違つてこつてりした厚化粧をしてゐた。飲んだくれの男がうろついてゐた。其等の男の云つてゐる言葉は分らなかつたが、彼の血は躍つた。併しそれ以上どうする事も出來ないで、彼は家に歸つて來ていろ〳〵と考えた。「何でも金を遣へばいゝ」と思つた。しかしそれ程豐かでもない彼の兩親の手許からそれが屆いたものである事を考えると彼は又センチメンタルになつて、そんな不正な道樂に金を遣ふ事を濟まなくも思つた。

彼が女を知つたのはそれから四年の後の事であつた。其時彼はミュンヘンにゐた。獨逸の生活には慣れきつてゐた。年も取つてゐた。そして矢張り其處の大學に通つてゐた。多くの酒飲みの友達が彼に出來てゐた。いろ〳〵の彼の内に隱れてゐた本能が再び解放されて現はれた。彼はクラブの會員になつてメンズールもやり、獵もした。そしてその生活は荒んでゐた。

或る酒飲みの友人が彼に「美しい娘のゐる素人家」を紹介した。そして彼は直

ぐその家に住み込む事になつた。

彼がその室に入つて最初その娘を見た時――それはA――と云ふ栗色な髪の毛の、赭ら顔の、如何にも強壯らしい逞ましい體をした十九の娘であつた。そして左の頰にある小さい黒子が彼女に健康な感じを與へてゐた。――一見して顔を赭くした程自分がその娘を必ず戀着する事を豫覺した。そして一種の物狂ほしい嬉びが彼を興奮させた。

「あゝ、僕を此家に導いた運に對しては僕は生涯自分の體を奴隷に賣つても惜しくはない。又その運の手先きに使はれて呉れた君に對しては僕の生涯を捧げてもいゝ。」と彼はその紹介した友に云つた。其家に來た始めの日から彼はその娘の長い腕を、敏捷に動く美しい力強い脚を、健康な厚い胸を、水々しい肩を、したゝるやうな匂ひを一刻も忘れる事が出來なかつた。

「貴嬢方は私を輕蔑なさるでせう。私が日本人だから。東洋の小猿だから。皮膚の色が黄色くつて風采が貧弱だから？」



或る朝彼は自分の處に茶を持つて來た彼女にかう訊いた。

「そんなことはありませんわ。貴方は可愛らしいわ。妾達は貴方を好いてゐわ、本當に。」

「まさか私に向つて『貴方が云ふ通りだ』とも云へない譯でしたね。人間は自分が馬鹿に出來るものを愛するもんですよ。」

「日本人は利口で、敏捷こくて、慓悍だから妾達の氣に入るのよ。」

「もう十年も經つたら貴嬢方は此『醜い東洋の山猿』をもつと輕蔑して、憎むやうになるでせう。今は未だ其處迄も行かないので、わりに可愛がられてゐると云ふ丈のことです。」

「だつて野蠻なものは勝ちますわ。」娘は笑ひながら云つた。

「しかし私達は貴嬢の國の科學や、藝術や、宗教を敬愛するために遙々此方に來るのです。未だ眼覺めない者は覺めた者に學ばなければなりませんからね。」

「えゝ、獨逸は日本人を歡迎しますわ。日本は東洋の獨逸になるでせう。それを

理想としてゐるのでせう。さう云ふ話ですわ。」

「えゝ、日本にもルーテルや、デューラーや、ゲーテや、ベートォヱンや、シルレルや、カントや、ショーペンハウエルや、ワグナーや、ヘルンホルツが出なければなりません。もう三十年も經つたら。」

「まあ、貴方はそんな人達の名をよく知つてゐらつしやるのね。」

「知つてゐますとも。よく理解さへしてゐますよ。貴嬢は信じないでせうが。火は火を理解しますからね。小さくつても。」

「貴方は「ヘルマン・ウンド・ドロテア」をお讀みになつたことがあつて？「ヱルテル」をお讀みになつたことがあつて？」

「えゝ、勿論兩方共。實に美しいものですね。」

「貴方は異國人のペダンチックな知識欲の爲めにお讀みになるの？それとも本當に好きでお讀みになるの？」

「ペダンチックである程私は馬鹿ではありませんよ。知識欲は無論ありますが、



私にとつて詩は空氣も同樣です。私にはそれを呼吸せずに生きて行く事が出來ない程詩は有り難くて、必要なものなんです！一體吾々は皆詩人でなくてはならないやうに造られてゐるんですからね。自然が人間に與へた此人生の美と、こんな幸福を讃美出來る爲めにね！」

「まあ、貴方はまるで文學者のやうだわ。だつて貴方は法律家になるのぢやなくつて？」

「それがどうして兩立しないのです？何故法律家は幸福と云ふ人類共有の財産を頒けて貰へない程不幸でなくちやならないんです？」彼は微笑み乍ら云つた。「人間の趣味は隨分廣いものです。私は顯微鏡に大なる尊敬を拂つてゐますが、同時に美術館を觀る事は私の最大な幸福の一つです。此世の秩序を計る法律の書物を檢べながら詩を作る事も私には出來るんです。ね、さうぢやありませんか。尤も日本人が皆私のやうに自由で多方面なのぢやありません。私の境遇と、自然と

が私をさうしたんです。」

「日本は美しい國なんですつてね。妾は是非一度行つて見度いわ。貴方、妾を連れてつてドさらない？」

「え？私が死を賭してそれを願つた處でそんな事が出來るとは思はれませんね。貴嬢の兩親が可愛い貴嬢を遠い野蠻國にやる氣遣ひはありませんからね。況して私のやうな者と一緒に！」

娘は拗ねた。そして「だつて妾の阿父さんは本當の阿父さんぢやないのよ。」と云つた。彼は繪はがきやいろ〳〵の日本の風景の寫眞なぞを抽斗から出して見せた。兩親の寫眞も。娘は非常な興味を以てそれを見た。そして彼の母を美人だと云つてほめたが、やがてそれを自分の親達に見せる爲めに彼が止めたにも拘はずそれを持つて飛んで行つた。此時以來二人の間に見えない鎖が次第に固く結ばれて行くのであつた。そして口で會話をする代りに眼で話をする事がだん〴〵多くなつた。彼女は勝ち氣で、元氣で、中々理窟ほい質(たち)であつたけれど、直次郎の前へ出ると全く別人のやうに變つて了ふのであつた。そして彼もさうであつた。そして二人



には其「變り方」を互に意識することが又此上なく嬉しかつた。

## 五

或る五月の夕暮彼が友達と一緒に野外の遊びから歸つて來ると——彼は其遊山で友達から「彼女」のことを散々揶揄はれた——彼の室に灯りが點いてゐるのが外から見えた。彼は醉つてゐたが、胸が轟くやうに躍るのを感じた。何故なら其の日は事に依ると娘の兩親が他所に呼ばれるかも知れないので、もし夕方彼が歸つて來た時家にゐて彼を待つてゐるものがA——一人だつたら彼女は彼の室で灯りを點けて彼を待つてゐると云ふ約束が朝の中に彼等の間に整つてゐたからである。彼が口笛を吹くと娘は窓をあけて首を出した。頭には薔薇の花を挿して、そしてにつこり微笑んでゐた。

「おゝ、あの瞬間の爲めには俺は全世界の不幸を脊負はされても甘んじて幸福を叫ぶだらう！」と彼が後で云つた程彼は其時歡びの爲めに五體が破れ裂けないの

を不思議に思ひ乍ら夢中で二階へかけ上つた。彼の前にあらゆる物が燃えた。人生が燃えた。全生命が燃えた。幸福が燃えた。燃えながら醉つてゐた。涙を流して醉つてゐた。

一ヶ月の後彼等はもう「お前」と云ふ「擽つたい言葉」を互に人知れずつかふことに甘い樂しみを感じてゐた。無論夫婦約束は彼等の間に既にかたく結ばれてゐたのである。

或る日彼等は彼女の叔母の前でこんな話をした。

「失禮ですが、貴孃のお母さんは矢張りババリアのお產れでゐらつしやるのですか。」

「いゝえ、阿母さんは瑞西人よ。」

「さうでせう。どうりで貴孃方はそんなに開けてゐるんですね。自由なんですね。殆んどすべての國民が共通に持つてゐる排他的な狹い感情から。」

「妾達にはそんな感情は理解さへ出來ませんわ。いえ、それは嘘ですわ。人間の



本當の感情にそんな性質はありませんわ！却つて本來の情から云へば他の國民に本能的な興味や愛を持つ筈だと妾思ひますわ。ねえ、叔母さん。」

「えゝ、妾達は只外國の方と餘り度々會ふ機會を持たな過ぎる丈けの事ですよ。」と叔母が云つた。「殊に東洋の方とはね。其機會さへ多かつたら妾達はもつと世界人になれるでせうにね。それが妾達の不幸なんですよ。」

「本當に。私達の中に根深く植ゑつけられてゐる國家的觀念が人間の自然の感情を歪にして了つた事は事實ですね。しかし外國人にも依りけりでせう。それは未だ理窟ですよ。もし貴孃の阿母さんが日本人だつたら貴孃の阿父さんは阿母さんをお貰ひにはならなかつたでせう。屹度結婚するのを恥じられたでせう。或はその反對に貴孃の阿父さんがもし日本人でしたらね。」

此時叔母が何かの用で立つて行つた。

「だつてこれは民族の問題ぢやないわ。個人同士の間の微妙な感情、愛の問題ですわ。その他に何があり得ませう。」

「處がお前達は日本人や支那人や印度人にそんな愛を持つ事は決して出來ないんだよ。一時の面白い遊び對手として一寸氣に入る事は出來てもな。」

無論二人は急にこんな言葉遣ひに變つた自分達を意識した。そしてその意識が彼等を嬉し氣に微笑ませた。

「まあ、又妾を拗ねさせて喜ばうと思つて！根性曲りの島國人さん。えゝ、本當にさうかも知れないわ。貴方が云ふ通りかも知れないわ。だつて日本人は嘘吐きで、誠がないつて云ふ話だわ。上べ許り體裁のいゝ事を云つて人を瞞してお き乍ら直ぐ狐のやうに逃げて了ふんだつて！」

かう云つてA――は微笑み乍ら彼の眼を凝乎と視入つた。

「ふむ。何處の國にだつて下等な奴はゐるよ。お前、阿父さんに打ち開けたかい。でなければ阿母さんに。」彼は娘の手を執つて、その美しい物をどうして樂しむだらよいかと惑ふやうな醉心地でかう訊いた。

「未だよ。打ちあけなくつたつてもう分つてるわ。」



「分つてゐる。しかしそれを喜んではゐないね。何か策略があるんぢやないのかね。」

「策略つてなあに？」

しかし此時叔母が戻つて來たので彼は室に退いた。彼は机の前に坐ると眉の間に皺をよせて溜息を吐いた。何の爲めに彼はそんなに面白くない樣子をしたのだ？彼には娘の云つた「日本人は嘘吐きで、誠がない。云々」の言葉がヘンに胸を打つたからである。何故打たれたのか？彼は多くの無賴漢のやうに娘を裏切らうとしてゐるのか？彼の娘に對する戀愛は質せ物であつたのか？

さうではない――と彼は信じてゐる。彼は戀愛の人としては少し輕薄に喋舌り過ぎる樣にも見えるけれど、彼の情熱が燃やされてゐた事は本當であつた。そして彼がA――と夫婦約束をした時に、それの可能に對する疑念はあつたけれど、誠實であつた事も嘘ではなかつた。そして確かに彼はそれを本氣で望んでもゐたのだ。

けれども彼が女を知つたのは彼女が最初ではなかつた。彼は既に此家に來る前に友達に誘はれてビール會の歸り路に遊んだ事がある。從つて彼は嚴密な意味に於て既に異性に對する童貞の畏怖心を汚ごされてゐた。彼はかう考えた事もある。西洋人を妻に持つてゐると云ふ事は日本に歸つてからの出世にとつて利益ではない。そしてその爲めに少くも彼の父はどの位可厭がる事か、怒る事か、そして彼の母が悲しむ事も明かである。又此事で父母との爭ひが世間の評判になる事も面白い事ではない。だがそんな事は凡て我慢出來る。「彼女」の爲めには。そして其「彼女の爲めに我慢する」と云ふ感じは何となくむづ痒ゆいやうな快いものでもあつた。しかし現在の彼は獨逸に來た當初の彼ではない。彼には又日本が一種美しい處に思はれてゐる。從つて日本の女も。日本の美人を妻にする事——それも惡くはないなと彼は現によく思ふ事があるのだ。そして彼が「彼女」を抱く時、接吻する時、彼の心にはその對象として島田を結つた日本の娘が屢々現はれるのであつた。日本に歸つて、俺はドクトルになつて歸るのだから、親父は男爵



になつてゐるし、俺れにはいくらも候補者が來るに定まつてゐる。そして其中で飛び切りにいゝ奴があつたら、それを妻にしてゐればまあ一番凡ての爲めに無難ではある。評判を惡くする事もない。——と考えると、自分の長い未來に自分の運命に——今は世界中の何處かに隱れてゐるが、やがて姿を現はすであらう處の女は獨逸の貧しい町家の娘である「彼女」よりももつと美しくて、上品で、裕福であるやうにも思はれた。必ず其女は素破らしく美しい。俺が今此處で早まつた事をすれば後で後悔する時が來るであらう。それに實生活の上に於て、人種と習慣の異つた妻は隨分厄介なものに違ひない。そしてその妻も亦孤獨で、詰らないであらう。

A——は好い。味へば味ふ程何んと云つても捨て難く好いものは彼女だ。しかし彼女を俺の妻とする、しないは別として、何故ほゝの「醉つぱらつてゐる機會」が吾々の青春につけ込んで拵らへた緣を必ず一生涯の道伴れとなし、運命の配遇者としなければならないわけがあるのだ？あれを俺が未だ一二年此方にゐる間の

樂しい生活の糧として、互に吸へる丈け其味を吸つて、――俺があれを樂しむやうにあれも亦俺を樂しむのだから、その自由な責任を分擔し合つたらその表面上の關係を一時的なものと爲す事を必ずしも罪惡と認むべきだらうか。もし俺が愛の爲めでなく、道德的な滿足を自分に獲度い爲めに、ヒロイックな興味からあれと結婚する位なら……それは馬鹿氣てゐる。併しさし當り當然起つて來る筈の「もし互の意志で」と云ふ條件を胡魔化す事が出來なかつたので、彼はそれを打つちやつて先きへ走つた。「都合のいゝ事に彼女の兩親は俺を可愛がつてはゐるが娘を俺に呉れやうと迄は思つてゐないらしい。何故かと云ふと彼女の父は彼女の本當の父ではないのだから。――彼は此事を最初娘から聞いた時何の爲めに一種の喜び？が自分の胸の中に閃めいたのかその譯が分らなかつた事を記憶してゐる。――それなら何故彼等は自分達二人の接觸に對してかくも寛大であるのか。それは云ふ迄もなく俺から金を期待してゐるからである。そして俺から二三千の金を搾つた後で娘を何處か手近かない〻場所に片付けて了ふ心算だらう。可愛い娘を又



見る事の出來ない遠方へやつて了ふ寂しさには忍びないやうな事を云つて。あの縹緻ならいくらも貰ひ手はあらうから……彼等はかう思つてゐるに違ひない。其事は彼女には可哀相だが、俺には都合が惡いわけでもない。俺の方の兩親の望みとも一致する譯だ。そしてもう少し此快樂を續けた後で――その快味はだん〳〵薄らいで行くだらうから――そしたらきつぱり……。併し流石に「別れる」とは思ひ切れずに、起ち上つて室の中を歩き出した。

「併し困つた事には彼女はもう姙娠して了つてゐる。彼女は俺が本當に自分を妻にするであらうと云ふ事を信じて、自分の一切の運命を俺の腕に凭せかけてゐる。何と云ふいじらしい事だ。併し此事は只では濟まされない。彼女の懐姙がもつと眼立つて來たら此事は問題になる。そして俺の兩親にもどうしても打開けずには濟まされない事が起るだらう。俺にはそれ丈けの金を貸して呉れる友達がゐない。」

――しかし此等の事の凡ては彼の心の一部で考えられた事と云ふに過ぎない。そんな事迄も彼は考えてゐたと云ふに過ぎない。そのくせ彼は彼女を愛してはゐ

るのだ。そしてこんな事迄も自分がどうしても考えて了ふ事の爲めに彼は自分に對して或る苦痛を感じる丈けの良心？　は未だ少しは持つてゐた。で、始めには激烈に戀を感じた事は事實なのだが、其激情は火花のやうに壽命が短く、殊に肉體的な慾求を充たして了つた後ではトンと下火になつて了つたり、氣持ちの性質が全で變つて了つたりするものである爲めにその頼りない移り氣な自己に對する意識が自分を責め、最初の熱情迄も實は疑はしいもの、自己欺瞞であつたと思ひ込んで了ふ男の常として、彼には自分の戀が僞物であり、只浪漫的（ロマンチック）な興味と、動物的なエゴイズムと、詰らない自由を與へられて孤獨に生活してゐる放蕩な男の單なる享樂慾の滿足であり、手すさびであり、自己欺瞞であるやうにも思はれた。そして自分が罪ないろいろの事を考える事の爲めに猶更自分は彼女と結婚して自分の責任を立派に生かすべきである。なにもそれが「罰」であるとか、「道德的な興味」であるとか云ふ程自分は彼女を嫌つてゐるわけではない。併し彼には自分の眞情がよく解らなくなつたので、更に「正確な判斷を獲る爲めに其晩A――が彼



の室に入つて來た瞬間の印象によつてそれを定めやうと考えた。

「否、そんな事は今更問題ぢやない。俺は何（ど）の道彼女と結婚する丈けの事だ。」彼は突然机に向つてペンをとつた。そして久しぶりに兩親に長い手紙を書いた。その中に彼は一切の事を詳しく正直に書いて、彼女を自分の妻にする事を許してくれと云ふ事、彼女は既に姙娠して了つてゐると云ふ事、それから彼女の性質や、教育や、健康や、容貌を、惚ろけてゐるとは思はれないやうに注意し乍ら充分に賞めて書いた。そして自分は罪を作らず、他人の運命に對する自分の責任を立派に負ふのみならず、それを生かす爲に彼女と結婚すべき義務、否、必要がある事を附け加へた。

彼は此手紙を書き乍ら矢張り自分の決心と、勇氣とに對するヒロイックな興奮を感ぜずにはゐられなかつた。そして恰かも自分が何か道德的な善い事を爲しつゝあるやうに自己賞讃の意識が彼を滿足させ、胸を勇ました。そして不思議な事に彼は此手紙を書くと同時に彼女を自分が眞に愛してゐる事を自分自身に確めた

のであつた。そしてさう確めて見ると彼女を娶る事を迷つた事が不審にさへ思はれるのであつた。彼は明るい、朝日を仰ぐやうな氣持で室の中を歩き乍ら一人で微笑み、日本に歸る途中に彼女を連れて甲板を歩く事から、新しい家庭を持つ事から、どんな子供が生れるかと云ふ事迄を想像してにこ〳〵笑つた。

「あゝ、要するに俺は矢つ張り善い奴なんだな。」彼は鏡の前に立ち止まつて自分の明るい顏に向つてかう獨り言つた時彼女が現はれた。「うむ、矢つ張り此奴はいゝ。可愛い。どうして俺は此奴に對する愛を疑つたのだ？何處にそんな餘地がある？」で、彼はいきなり彼女を抱いて接吻した後で、その手紙を讀ませた。

「もう子供が動いてゐるのよ。これ、こんなに。一寸觸はつて御覽なさいな。」と彼女は彼に靠れかゝりながら彼の腕を取つてそれを自分の下腹の上に持つて行つた。そして熱い息を彼の頰に浴せながら

「ホラ、動くでしよ？」と云つた。彼はおのゝいて手を引つ込ませた。そして頭を搖すぶつて、彼女の薄い、薔薇色の唇に自分の口を當てた。



「ねえ、妾を捨てないで頂戴。どうも妾貴方に遁げられ相な氣がしてならないの。貴方の愛を信じてゐ乍らどうしてもそんな氣がするの。でなくつても貴方の兩親が迚も許しつこない氣がするの。」

彼は縱令どんな返事が兩親から來やうとも自分の決心は變らない事を誓ひ、そしてかう附け足した。

「大丈夫だ。俺はお前を哀れなグレエトヘンにはしないよ。俺の内に居る神を信じてくれ。なに、俺の親だつてそんなに譯の分らない人間でもないんだから。まあせいぐ體を大事にするがいゝ。」

二人は沈默した。そして涙ぐんだ。

## 六

父からの返事が來る迄には殆んど四ヶ月かゝつた。それにはかう書いてあつた。

「――お前の手紙をよんだ。お前が思つたやうには俺達は驚かなかつた。勿論雪

子（彼の母）は非常に悲しむでゐるけれど、俺達はお前の性質を餘りによく知つてゐたから。お前を啓發する爲めに留學させた俺達の決心には始めからそれ丈けの冒險は覺悟されなければならなかつたのだ。

お前の爲した事については俺は今裁く事はしまい。お前は自分で何もかも知つてゐた筈と思ふから。もしお前に良心と、勇氣と、自分の運命を熟慮する力とがあるのなら俺達はそれにお前の一身の責任を任せるより外はない。

だがお前は俺が今更お前の要求を却け得ない事に甘へる程馬鹿ではあるまい。お前は一切の事の原因が何から來てゐるか充分に反省した事と思ふ。だがお前をルーズな、誘惑に弱い人間に育てた事に對しては俺達に責任があるのだから、俺もお前の爲した行蹟に責任を頒つことを自分の運命と諦めてはゐる。とに角女と子供はつれて歸るがよい。（此處で彼の父は「其代りお前は之から一切俺達の補助から獨立して自活しなければならぬ。云々」と書きかけたが、それは實行し得ない事であり、又息子から馬鹿にされ相な氣もしたので消して了つた。）



お前は自分が取り返へしのつかない事をして了つた今となつて其責任を「男らしく」背負ふ事を誇りにしてゐるらしいが、その誇りは恥ぢるがいゝ。もし其女がもう少し醜くて、お前の氣に入り方が足りなかつたら——お前はそんな女ともいくらも關係出來たのだ——お前が果してその責任を同じやうに背負ふがどうかは疑はしいからだ。最も謹しむべきものは色慾だ。最も謹しみ難いものは色慾だからだ。ルーズであると云ふ事は何よりいけない事だが、お前が今ルーズであると云ふ事は一方から云へば尤もな事でもある。青年は皆ルーズなものだ。何故なら實は若い者には未だ事の善し惡しが本當に解る筈はないからだ。人間は大きな過ちをいくらも犯した後でなければ小さな眞理をも理解する事が出來ない程哀れなものだ。併し今度の事からお前の眼が少しでも開かれたらそれはまあ運のいゝ事と云つてよいかも知れぬ。社會や他人に對して法律家にならうと云ふ者は先づ自分に對してはつきりした法律を持つてゐなければならぬ。せい〳〵今後の生活をつゝしむがよい。

お前の手紙をうけとつてから一週間になる。うけとつた時と今とは俺達の心も大分變つた。それ程俺達は夜も眠れない程此事について考へたのだ。(彼は又此處で「妾の思つた通り」と雪子は云つた。と云ふ文句を消した。)が、何よりも仕事に身を入れろ。習慣と云ふものは人が思ふ程に御し難いものでは決してない。心掛け一つだ。身を大事にして友達を選び、危險のある處に足を踏み込むな。(此處でも父は「入用なら金を送る」と書いたのを消して了つた。)萬事の事は加藤ともよく相談し、又向ふの親達とも充分に打ち明けた相談をして、完全に處置をつけるがよい。云々」

實の處彼の父は此許可を彼に與へるにしてももう少し彼の「過ち」を非難して、此止むを得ない承諾が彼等兩親には不服なものである事を書き度かつたのであるが、その口實が見出せなかつたのである。が、彼は餘り「消し」が多くなつた爲めに其心を息子に見拔かれないやうに二三度淸書をした。勿論この手紙は事に依ると廢嫡すると云ふやうな返事でも來るかと思つてゐた直次郎には喜び以上の驚きであつた。三遍目に讀むだ時には處々冷笑が彼の口許に浮むだけれど、その冷笑は寧しろ嬉し相であつた。しかし娘の喜び方は一層强かつた。彼の女の兩親も彼に娘を娶はせる事に別に不服はなかつた。娘がやがて裕福な男爵夫人になると云ふ事も彼等の氣に入つたのである。そしてそれ以來彼等の彼に對する愛想は一層濃くなつた。

一切の不安定の裡にゐた運命が今や眼鼻かついで、ある落ち付きが出來、彼と娘との未來には祝福された光明の前途が兩手を擴げて微笑むでゐるやうに見えた。そして春の朝なぞ彼がA――の手を執つて、直ぐ息切れのする彼女の體を氣遣ひながら狹い裏の林檎園を靜かに歩く時、彼は心から幸福過ぎる、勿體ない、と云ふやうな氣がした。

「あゝ何時になつたら妾達はかうして日本の貴方の庭を歩けるやうになるのでせう。」と彼女が云つた。

「もう直きだよ。歸つたら早速東京の郊外に新居を構えるんだね。百五十坪位の。

東京の春は美しいよ。」と彼が云つた。そしてこれが自分の妻——今既に事實に於ては妻であり、自分の子を姙んでゐる事に幸福を感じてゐるのだと思ふとその意識から特別なむづ痒ゆいやうな悦びと愛とが起つて來るのであつた。それは「新緑が胸の中に萠え出るやうな感じ」であつた。

處が思ひがけない不幸な運が彼等の上に來た。四月の半ばに彼女は產をした。可愛い男の子が生れた。しかし後產が惡かつた。そして彼女は產褥熱にかゝつた。

「妾がもし助からなかつたら……。貴方は日本に歸つて好い奥さんをお貰ひになるのでせう？もうそのおつもりなのでせう？あゝ妾は不幸です。不幸です。しかし妾が死んでも此の子は大事にして育てて下さいね」彼女は眼に涙を溜めて云つた。生憎く丁度其の時彼に大學卒業の試驗が近づいてゐた。もし彼が落第して彼女が恢復すれば彼等はもう一年歸朝を延ばさなければならないのであつた。で、彼女は「貴方、往つて御勉強をなさい。妾今大さう氣分がいゝんですの　本當に濟みませんわね。」と詫びるやうな眼付きをして云ふのであつたが、その直ぐ後に



は又「貴方、妾は助かるでせうか。妾を生かして下さい。妾を愛するならどうか生かして下さい。妾は死に度くありません！」なぞと云つて彼の手にとりすがり乍らすゝり泣くのであつた。

彼は自分の髮の毛をむしつた。彼女の言葉が彼の胸をえぐつたのである。實際の處彼はA——が產褥熱にかゝつたと云ふ事が分つた瞬間、日本に歸つて日本の美しい令孃を妻にすると云ふ事をつい考えずにはゐられなかつたからである。そして當然その「薄情」と云ふ意識が彼をひどく苦しめた。「俺はそんなに薄情なのか。否、薄情と云ふよりも多情なのだ。もし俺が多情でなかつたなら俺はこんなに薄情には見えないだらう。それなら俺は一體どうなる事を望んでゐるのだ。否、俺は彼女の死を望んでゐるのでは毛頭ない。これは唯人間の惡魔に作られた先天的心理作用だ。」と彼は思つた。「それどころか俺はあれに死なれて一人で生きて行く事は迚も堪えられないだらう。」

彼は苦しむだ。そして其苦しみの最大原因は彼女の肉體的な苦痛にも增して恐

ろしい精神上の苦痛、悲しみや恐怖に對する同情、愛する者との永久の別離、彼女を失ふことの惜しさであつた。彼女を失ふ事のたまらなさを考えると――彼にはそれは信じられなかつたが、――彼は自分が如何に彼女を愛してゐるか、彼女の存在が自分にとつて如何に本當に必要なものであるかと云ふ事を身にしみて覺らずにはゐられなかつた。あらゆる出來てゐた幸福のイリュウジョン――歸りの船の甲板を夕食の後で彼女と腕を組み乍ら散歩する時の事や、一日一日船が日本に近づいて始めて富士山が遠く見えた時にそれを彼女に指し示す時の事や、新しい日本の家庭、彼女が乳母車に子供をのせて、役所から歸る彼を近所迄出迎えに來る處――それ等の幸福の一切が彼女の死によつて無殘に失はれなければならない事を彼女自身も考えて、その堪え難い未練に苦しむでゐる彼女の胸中を察するが故に彼は一層たまらないのであつた。そして其恐ろしい妄想が餘りに彼を壓迫して來ると彼は頭をふつて「否、そんな事はない。彼女は助かるだらう。きつと助かる。」と口の中で云つた。實際彼はそんな氣がしたのである。



「お前が死ねば俺は絶望だ。俺はもう生きてゐてもつまらない。」と彼は云つた。「しかしそんな事はないよ。伯林からいゝ醫者を呼んだ。其人が屹度お前を助けるよ。直ぐにと云ふ譯には行くまいがな。もう少しの辛棒だ。そしてお前が全快したら早速出かけやう。」彼は彼女の額に接吻して云つた。始めにはいまゝしい事に自分の言葉の中に何處か少しそらゝゝしい處があるやうな氣がしてならなかつたが、續けて喋舌つてゐる中にだんゝゝ本當の熱情が燃えて來て仕舞ひには言葉がよく云へなくなつた程彼は涙のこみ上げて來るのに妨げられた。

「まあ、貴方は泣いてゐらつしやるの？妾はどうしても助からないの？死なければならないの？」と彼女は云つた。「いやです。それは餘り殘酷です。殘酷です！」そして彼女も泣き出すのであつた。

本當に彼は苦しみ抜いた。そして三晩夜明かしをして、只其女を本當に愛する良人丈けが爲し得る熱心さを以て彼女の看護をした。そして彼女は一々それに感謝してゐた。

「でも妾は仕幸せだつたわね。」と彼女は幽かに云つた。が、伯林から來た醫者は彼女を見離した。彼は絶望しなければならなかつた。それは有り得べからざる事に思はれたけれど、事實彼女の全く變つた顔つきや、熱や、脈搏の樣子を見るとそれを可能だと思はずにはゐられなかつた。

「之許りは宥して呉れ。本當に之許りは。――」彼はかう獨り言つた。そして次の室へ逃げて來ては見舞に來た友達を摑まへて「あゝ、殘酷だ。餘りだ。あれはあんなに死ぬのを厭がつてゐるんだ。怖れてゐるんだ。あんなに生き度がつてゐるんだ。それなのに、あゝ……何と云ふ殘酷だ。あの苦しみの汗を見てやつて呉れ給へ。」かう云つて泣きくずれた。併し彼女はもう口を利かなかつた。そして苦痛の爲めに握つてゐる彼の手を離しては又握り、離しては又握り、そして仕舞に彼を眼で呼んだので、彼がそれと察して「子供の事は安神して呉れ」と漸く唯一言云つたのを聞くと、急に無限な悲痛を眉の間に現はして幽かに泣いた。が、やがてその涙の溜つた眼を大きく開くとそのまゝ瞳孔は開いて、體をねぢ起すやうにして唸つたきり、だん〳〵眼を細くして、そして死んだ。



## 七

葬式はすんだ。

四月の末、彼は首尾よく大學を卒業した。成績は中以上であつた。そしてドクトル・フィロソフィーの學位を獲た。そして彼が八年振りで日本に歸つた時は七月の始めであつた。

子供は彼女の母親が育て度いと云ふのと、未だ長い道中に堪えられないと云ふ二つの理由で、彼には云ふ迄もなく辛らかつたけれど、獨逸に殘されることになつた。そして其子が成長した曉、其子の意志次第で日本に來る迄養育費として毎月百圓宛を彼から送る事になつた。彼は其二十年後を夢みて別れたが、その別れは永久なものとなつたのであつた。

「ミュンヘンの家を去る時、瑞西を通つた時僕は本當に湖水に身を投げやうかと

思つたよ。幸に君と云ふ道伴れが出來たので助かつたが、本當にもしあの頃君があゝして僕のわきに附ききりにしてゐて呉れなかつたら、僕は實際何をしたかも知れなかつたよ。さうは云つてもまさか身投げ迄はしなかつたらうがね。」

と、彼が後に丁度英國からの歸路を彼と共にした友人に涙ぐみ乍ら云つたのは別に誇張ではなかつた。「久しぶりに自家に歸つてめつきり年の行つた兩親の顏を見た時も僕は嬉しくなかつた。却つてヘンな腹立しいやうな反感さへ起つてゐた。あれが死んだので、僕が一人で歸つて來た事を親達が「まあよかつた。」と云つて內心喜んでゐるのがその顏に見えるやうだつたからね。」と彼は又云つてゐた。

「貴方、あれはもう嫁をとらないでせうかね。」と男爵夫人が夫に云つた。

「そんな事はない。來年にでもなつて、いゝのが見つかれや屹度持つよ。」

「だけど何と云ふ詰らない事でせう。生き別れの心算でゐた息子に折角八年ぶりで逢ふ事が出來たと思へばその笑ひ顏一つ見ることも出來ないなんて。」



「俺達に對しては殊に笑ひ顏を見せ度くないのだよ。少くも當分はな。あれは俺達があの女の死を喜んでゐるものと邪推してゐるのだからな。尤もその邪推は多少當つてゐないわけでもないが。併しあれはお前を愛してゐるからお前に對して優しい笑顏を見せ得ない事には自分でも苦に病んでゐるのだよ。——だが先刻も俺があれの室に入つて行くと彼奴は其時は友達と本當に腹から笑つてゐたよ。なあに、あれだつて笑ふ事は出來るんだ。」

「でもあのお友達が歸つて了つてから後で妾がそうつとあれの室を覗いて見たらあれは一人で机に突つ伏してゐましたわ。貴方はあれの眼の變り方にお氣がおつきになつて？あれがどの位寂しがつてゐるかつて事はあれの眼を見れば一番よく分りますわ。あれはあんな淋しい眼を持つた子ではなかつたのですのにね。本當にあれの眼を見るとどうして慰めてやつたらいゝか分らないので妾の方で顏を背向け度くなつて了ひますわ。だつて何だか妾迄悲しくなつて了ふのですもの。」

かと云つて今うつかりした事を云へば只あれの氣嫌を損ねる丈けの事だつて事は

分りきつてゐるのですものね。昨夜も妾はあれの寢床にそうつと行つて見たのですよ。だつてあれの顏色の惡い事と云つたら全で死人の樣なのですもの。妾はビク〳〵し乍らあれの口許に手を當てゝあれが呼吸をしてゐるかどうか見た位です。するとあれは譫言を云ふのです。何だか始めのは獨逸語なので分りませんでしたけれど、次ぎには日本語で「よし〳〵子供はよく寢てゐるよ。可愛い子だよ。」なぞと云ふのです。そして微笑みがあれの口許に漾ひました。それから又すや〳〵眠つたと思ふと急に又シク〳〵泣いてゐるのです。妾はあれが可哀相で、不憐で……あれは一人でどんなに孤し兒の事を考へてゐるのでせう。」

夫人はかう云ひながらすゝり泣き始めた。

「運命と云ふものは全く分らぬものだ。が、まあ放つておくより仕方がないな。それがあれの爲めには善いんだよ。吾々の力では慰める事もどうすることも出來ない處かつまり運命の有り難い處なんだからなあ。現にあれはもう前とは餘つ程善い人間になつて居るぢやないか。」と男爵が云ひた。「併し俺はあれの食事をいつも注意して見て居るが、歸つて來た頃からするともうずつと進んで來たよ。今夜も見てゐるとあの大きな茶碗にたつぷり三杯かへてゐたよ。」

「えゝ、おかずもわりによく食べてゐましたわ。ですけどあれは本當にまあ何時迄可愛い處のある子なんでせうね。どうかした時の子供のやうな眼付きと云つたら今でも出來たらキツスしてやり度いやうですよ。」

「本當にな。そしてあれも自分でそれを知つてゐるんだよ。はゝ、だが何しろ早く役所が定まつて呉れんと困るな。」

二人は或る晩遲くこんな話をした。

## 八

日月は經つた。そして秋になつた。直次郎の心持は混沌としてゐたが、それは大體に於て二つの心持ちに分け得るものであつた。即ち過去に執してゐる現在を靜かに保守し乍らそれを據り處として生きて行き度い心と、もう少し簡單な意味

で未來に對する現在を娛しむで行かうと云ふ心持ちとである。今から思へば數年前の自分、及び自分のした事は何もかも凡て馬鹿の至りで、子供じみて、虫酸目であつたと思はれる事許りで、それにも拘はらず身分不相應な幸福を恣まにしてゐたものである。で、彼にはその頃の樂しい生活が夢に見る天國のやうに思はれて、その天國を想ふ事が自分の現在の生活であり、淨化であり、向上であるやうな氣がした。此光明な追憶の内に「彼女」の幻影と共に生きてゐれば自分の生活は確かで、間違ひがなく、心は月光に照らされて安靜である。そしてその安靜は「之からは一心に仕事に身を委ねやう」と云ふ要求と調和するものであつた。かくて彼の机の上には元と兩親の寫眞を入れてあつた小さな額縁に入れられて彼女の寫眞が飾られた。彼は又朝早く庭に出ては取つて來た新しい草花をガラスの花瓶にさして其寫眞を飾るのであつた。

併し日の暮れや、深夜一人で寢床に入らうとする時なぞには何とも云へない怖ろしい寂しさと悲しみが腹の底からこみ上げて來て、何故とも知れぬ涙が止め度



なく彼の心中を流れた。人と會つてゐても、笑つてゐる時も「彼女」は常に——その影が薄くなる時と濃くなる時とはあつても——彼の意識の底を離れなかつた。そして彼が一人になると薔薇の花を髪に挿してにつこり笑つてゐる彼女、姙娠と、產苦の爲めに窶れて蒼褪めて赤子を抱いてゐる彼女、美しい、小さな彼女の死顏が眼の前に現はれた。

「さあ早くそんな虛僞(うそ)な生活をしないで貴方のし度いやうになさいよ。貴方がそんな義理づくな生活をしてゐてくれたつて妾は些つとも嬉しくはありません。妾は貴方の外側にごまかされはしませんから。でも貴方が何を爲さらうと妾は貴方を恨みはしません。どうせ妾は不幸な、不幸な、女なんですもの。」と彼女は云つた。

するとし「妾は不幸です。不幸です。」とうめいた彼女、「妾を生かして頂戴。妾を愛するならどうぞ生かして下さい。妾は今死に度くありません。」と云つた彼女、「此子は大事に可愛がつて育てゝ下さい、」と請むだ彼女が現はれた。そして再び彼に自分が實は彼女の死を内々願つてゐた、彼女を產によつて死せしめた者は自

分であるやうな氣が強くして來るのであつた。そしてエゴイストの自分は當然自分が生涯の運命にかけて養育すべき筈のあの不憫な子を彼女の言葉にも拘はらず「子供の事は安心しろ」と云つておき乍ら、只毎月百圓と云ふ仕送りの條件で彼女の母親に預けて來たのである。

「許してくれ。だが俺があの頃あの俺の運命にとつてはさう小さな事ぢやない卒業試驗と仕事を全で放つたらかして、お前をどうかして生かさうと吾れ乍ら自分にこんなエネルギーがあつたのかと驚いた程及ぶ限り手を盡した熱心と誠實とはお前だつて認めてゐてくれたぢやないか。なに、俺の生活が虛僞だつて？そんな事はない。第一お前の魂にそんなに生き〳〵した存在を與へ、神聖を與へ、權威を與へたものは誰だ。俺の内の深い意志ではないか。お前を裏切るのが俺にとつて「自由」であり、樂しみになるなら凡そ簡單だ。俺はいくらもお前を見ぬ振りして疾くに遊んでゐたらうぢやないか。凡てこれは俺が自分の勝手でしてゐることなんだ。」



「それなら貴方は妾に對して何時迄も貞潔を守つてゐられると思ふの？一體貴方には貞節と云ふ事が行はれると思つて？貴方は一昨日の晩一人で寢床の中で何をしてゐたの？そしてその時貴方はどんな事を、誰の事を、考えてゐたの？」

「面目ない。俺はお前がよく知つてゐる通り賤しい、穢れた人間だ。だが、親父はそれを簡單に俺のルーズな性質にのみ歸せてゐるけれど、俺がもしこんなに弱くなかつたら俺はこれ程に賤しくもなければ、不潔な人間でもないのだ。俺に堪えかねるのは貞節な生活ではない。云はゞ嚴肅と云ふ事なんだ。嚴肅に人生を眺めると俺は何だか物悲しくなつて全で此世に苦しみに、泣きに生れて來たやうな氣がするんだ。俺は自分の過ちの大きな原因の一つが俺が其嚴肅な悲しみや、寂しさに堪え得るにしては弱過ぎると云ふ處にある事をよく知つてゐるんだ。併し俺は自分で人生をそんな風に見ると云ふ事は凡そ俺の性分には合はないと云ふ事にしてゐる。實際俺は笑い度い。快活に樂しく生き度い。しかし深い幸福を知らない俺が此寂しさから逃げやうとすると俺は多くの人のやうについ賤しい快樂を

追つて自分を不潔にして了ふのだ。俺はそれを辱じてゐる。が、しかしそれ故に俺は又一層お前を神聖化し度いのだ。俺を守つて呉れ。俺はもうあの頃の俺とは違ふが、それでもお前と云ふものがゐてくれなかつたら俺には貞節と云ふ事は非常に六ケしい事なんだ。殆んど不可能な事なんだ。」

「一體何時結婚するつもりなの？」

「何時、誰とだ。俺はそんな事――全で分つてやしない。」

「嘘ばかり。貴方は妾が死ぬと同時に既う日本に歸つたら結婚するやうになることを知つてゐらしつたんぢやありませんか。否、妾がそれを恨むものと思つちや間違ひですよ。妾は却つてそれを貴方の爲めに望んでゐるのですわ。一日も早い事を。」

「本當かねッ。正直云ふと俺も結局はさうなるだらうとは思つてゐるよ。たとへ自分では餘りそれを望まなかつたとしてもだ。お前がそれを許して呉れるなら。でないとおさまりがつかない氣がするのだ。まあどうせ近いうちにではないがな。」



「えゝ、年が變つたら直ぐにもと思つてゐるのでせう。今年では餘り早過ぎるから。それがよござんすわ。本當に。何故かつてさうなれや貴方は妾の代りにその奥さんによつてもう少し貞潔を保たれるでせうからね。妾は貴方に同情してゐるのよ。實際何時も〳〵こんな死骸と許り此室で差し向ひになつてゐちや誰だつて窮屈で、寂しくつて、不愉快で堪りませんものね。人間は自分を高めたり、淨くするもの許りで生きてゐられる程強い動物ぢやありません。何か自分の現在を娛しませて呉れるものなしにはね。又そんなにきれいではあり得ない者です。まつたく何か偉大な、氣高い目的を持つてゐない人にとつて唯底知れない寂しさや、味氣ない過去や、怖はい眼つきをした亡靈と面と向つて何時迄も生きてゐると云ふ事は迚も堪えられない、無意味な事に定まつてゐますわ。「何の爲めにこんな窮屈な思ひをして、くよ〳〵と柄にもない陰氣臭い、謹んだ生活をしてゐる必要があるのだ？此束縛が何の役に立つのだ？馬鹿々々しい事ぢやないか。」と云ふ疑問が當然起つて來るでせう。現に貴方に起つてゐるやうに。娛しみがほしいでしよ？

無理はありませんわ。貴方は未だ若いんですものね。」

「うむ、そうだ。俺は娯しみがほしい。實際此生活は少し淋し過ぎるよ。しかしだ。もう少し俺を理解して呉れなくちや困るね。實際の話、俺はこんなに弱いくせに又此寂しい孤獨な生活が一方好きでもあるんだよ。俺は決して不眞面目を愛する人間ぢやないのだからね。俺はたまらなくなると階下へ行つて「酒はないか」ときく。阿母さんは俺の爲めにビールや、葡萄酒や、ウィスキーを缺かさず用意しておく必要が出來たんだ。だが俺は此頃直ぐ人に倦むのだ。そして俺が自分で求めて其處へと逃げて行つた賑やかな席から此處へ逃げて來たくなるんだ。たまらなく逃げ出し度くなるんだ。一人になつて、靜かに「お前」と差し向ひになる爲めにだ。そして一人で此の寂しさに涙ぐむ爲めにだ。俺はな、子供を抱えてお前が何時も其椅子に腰かけてゐる此の書齋が實に好きなんだよ。懷しくて、戀しいんだよ。此處にはお前のあの健康な香ひと、櫻色と、みづ〳〵しい聲とが實際漂つてゐるやうな氣がする。此處にかうして一人でゐると俺は苦しい事もあ



るが、いかにも自分の魂を取り戻したやうに落ちつくんだよ。此沈默、此一絲亂れず緊張した、光明な空氣が俺には不思議な程ピッタリ來るんだ。何故と云つて俺は此沈默の中でかうしてお前と話をするのが何と云つても一番樂しみなんだからな。それ許りではない。俺は此室にゐるといやに頭がいゝ。此處には平安な活動がある。

「だがお前はどうも俺を少し見縊り過ぎてゐるよ。法律家は偉大で、氣高い目的を持つてはならないのかね？俺にはその資格も力もないと云ふのかね？無論俺は聖人とは隨分緣遠い男だが、しかし俺の仕事だつてさう下らないものぢやないぜ。ソロモンや、ソクラテスや、孔子は皆んな偉い法律家だつたんだ。今夜は俺の仕事の目的を少しお前に話さう。何故かと云へば俺は云ひ忘れてゐたが、俺は今後どんな女と結婚しやうとも、そしてその爲めにお前への貞節の一部を破る事があらうとも、俺の生涯の仕事の全部はお前に捧げやう、お前の靈前に、お前への永久の感謝として捧げやうと云ふ事に俺は歸りの船の中で考えついたからだ。それ

は何時かお前にも話した事があると思ふが、さつと云へばつまり俺は未來の法律を形造る一人にならうと云ふのだ。勿論俺が考へてゐるやうな萬國法律なるものが國家と兩立し得るか否かと云ふ消極的な疑問は誰にでも起つて來るのが當然だが、假令それの存在がまだ〳〵當分の間は不可能であるにせよ、何かさう云ふものゝ出現の必要は各民族の深い意志の間に漸次に認められ、俟たれてゐることは疑へない事實だ。あらゆる國民の間の深い意志は、表面の意志の衝突から例へば戰爭のやうな不幸な出來事がある度毎に次第に疏通して行く。そしてそれが疏通すればする程意志は生長するものだ。人類の數千年と云ふ比較的短かい過去のうちに於て不可能であつた事が今後永久に不可能であると云ふ理由はない。人々はこの文明と進化とのうちに於て現存の國家的法律以外に、更に一般の安寧秩序や今少し「調和的な利益」の標準の爲めに公けに必要と認められ、善しと認められる處の「幸福と平和との契約」が萬國民の間に存在しない事を不自然に思ふ時代が來るだらう。其樣な「廣い幸福と平和との契約」は最早法律ではない、それは



道德の領分であると人人は云ふけれど、人々を各自の道德に任せておいていい理想的な時代が來る前に、その楷梯として一般生活の標準を萬國法律の名に依つて形造つておく必要のある事は凡ての實際家の認める處だ。勿論此事が馬鹿々々しく見える程六ケしい事は云ふ迄もない。どうしたら今少し合理的で、調和的な利益の道を彼等に知らせる事が出來るか。併し俺は先づ具體的な仕事の手始めとして理想的な完全な法律を出來る丈け精しく、大膽に考案して見るのだ。そしてそれが出來たら俺は既成の國家的法律を否定せずに、其他に萬國法律（それは素より今の國際公法とは全く違ふ）なるものを世界各國民の間に常識的に押し廣めやうと云ふのだ。そして更にそれと現在の國家的法律との實際的な融和を、あらゆる世間の輕蔑と嘲笑の中に徐ろに熱心に、氣長に劃る事に努力しやうと云ふのだ。無論之は百年計劃だが、色々の方面に現はれやうとする人類の意志を最も實際的な方面から實現する事が任務である法律家としての俺は歐羅巴へ行つて獲て來た三つの大きな儲け物によつて此困難な百年計劃に對する自分の使命をしみ〴〵と

感じたのだ。その三つの儲け物とは何だと思ふね。無論第一のはお前と運命の關係を結んだ事だが、第二のは俺が外國へ行つたお蔭げで外國人と云ふものに對する本當になまなましい友情と、親密な愛情を骨の髓に迄深く感じた事だ。俺は到る處で此驚くべき感銘に打たれたのだ。これは平凡なものゝやうだが、しかし死なないものだ。之から益々俺の内に生きて行くだらう。又行かなければならない。第三のは前の二つに比べると下らないもので、即はちあらゆる知識の啓發だ。此第二のものが俺の仕事に對する信仰を鞏固にしたのだ。面白くもない事を長たらしく喋舌つたが、俺は歸りの船の中で殆んどお前達の事と此事許りを考えてゐたのだよ。俺は一方醜い、我儘な男だが、しかしどうかして俺の一生の仕事をして世界中の各國民の手を互に握り合はしめやうと云ふ吾々の理想の萬分の一に役立し度いと願ふ俺の眞心丈はお前に信じてゐて貰ひ度いのだ。概念を持つてゐる人間はざらにあるが、「本當の意志」を持つてゐる者は稀だ。とに角俺にはその意志があるんだ。そして此意志はお前に對して忠實であることを欲するんだ。」



## 九

かうして彼は彼女の幻影を追つ拂ふ。そして新しい生活に對する希望に充ちて元氣よく床に入る。が、夜中に眼がさめると氣分はがらりと變つてゐて、いろ〳〵の忘想が頭に浮んで來る。すると飛んでもない性慾が起つて來る。「俺が今落ちつかずに少し位不身持ちをしたつて誰も無理ならぬ事と思ふだらう。遊ぶなら皆の同情が未だ消えずにゐる今のうちだ。もう直き終る處の獨身生活のうちだ。」こんな心がいつの間にか起つてゐる。するとあらゆる猥らな幻影が後から〳〵と。

或る晩彼は役所の歸りに友達とある料理屋で酒を飲んだ。藝妓が來てゐた。彼はむつつりして碌に口も利かなかつたが、友と別れて一人になると彼の寂しい心の中にふと惡魔が動き出した。夜の九時頃であつた。「俺は自由な體だ。」と彼は秋の生溫い風に吹かれ乍ら思つた。突然彼の心臓が高く鼓動し始めた。彼は何かの力に牽き寄せられるものゝやうに自家とは違つた方面へふら〳〵歩き出した。

何か其處に惡運の使はしたキツカケでもあつたのか。そんなものは別になかつた。彼は醉つてゐたが、意識ははつきりしてゐた。「それは少しひど過ぎる」と人は云ふかも知れない。併しその人は彼を買ひ被つてゐるのだ。彼もそれは惡いと思つてゐる。そんな事をするが否や、「折角自分があれ程大事に守護して築き上げて來た生命の塔を取り返へしのつかない泥濘の中にむざ〳〵蹴倒す事になつて了ふ」事を知らないではない。そして彼がその罪を思ひ立つた瞬間に「あらゆる光明と、希望と、生活の據り處とは辱しめられて、彼の顏を見るのも可厭がり、彼から永久に逃げ失せて了ふであらう」事も、且つ、もしそんな事を敢へてすれば自分は救ひやうのない僞善者であり、たちの惡い贋せ者であり、慘めな無賴漢であると云ふ意識から堪らなく絕望しなければならない事も——滿更考え得ないではないのだ。だから彼はカナリ苦しい不安の爲めに見るかげもない程蒼褪めて、悄氣てゐた。

併し「悔い」に至る盲目的な迷路に一旦踏み込んで了つた弱い人間の常として、



彼はその欲望を遂げて了ふ迄ははつきり前後を考えたり、慾情を抑えつけたりすることは出來なかつた。幾度か彼は立ち停つて何か自分を立ち還らせてくれる者を期待するかのやうに躊躇した。しかしそんな者は彼を「見離した」かの如く現はれては來なかつた。で、彼は又却つてそれをいゝ事にして歩き出した。頭は次第に混沌として來る許りであつた。「かまはない。やつてやれ。」と云ふ氣になる。「たつた一度の事だ。これつきりだ。もう決してしない。」

「これは耻しい事だ。」と彼は思つてゐた。しかしその耻ずべき行爲は、寧ろ耻ずべき行爲であるが故に彼を牽きつけたのである。惡いと知りつゝその惡い事がして見たかつたのだ。それ程此時の彼は淺間しさに充ち、破廉恥な欲望に囚はれてゐた。——そして結局彼は負けた。

當然さうなる事が分つてゐた後悔と絕望とは彼が思つてゐた程度よりもずつとひどかつた。私は玆に彼がそれから後二日間カナリひどく弱つて苦しめられてゐた事をくだ〳〵しく書くまい。とに角彼は未だ本當ぢやなかつたのだ。そして或

る時にはカナリ強く本能的に道德的要求を感じたり、或は後悔に惱まされても、それは要するに「其時はさう感じた。」と云ふに過ぎなかつた。彼には道德的な耻と云ふ事が嚴密には感じられなかつたのだ。そして餘り「ルーズ」にその耻を娛しみ過ぎた結果もう幾分その感じに麻痺してゐたのである。そしてその事は彼自身も誇張して認めてゐた。「俺には自尊心はあるが、良心といふものはないらしい。それでもあれに對して貞潔であつた間は未だいくらかそれがあつたのだつたが。否、俺はあれに對しても決して貞潔であつた事はない。素よりこれはあれに對する貞潔不貞潔丈けの問題ぢやない。もつと大きな事だ。俺は耻知らずだ。見下げ果てた獸だ。」

併しあんまり自分を責めると少しわざとらしいやうな氣がして却つて氣が引けた。「これも嘘だ。この調子に乘つた苛責は本當に俺の良心がしてゐる實感の苦悶ぢやない。本當に苦悶する良心をもつてゐる者が初めからあんな馬鹿をするものか。俺はもつとよく〳〵呑氣な放縱な人間なんだ。これは唯コンヱンショナルな



意識がしてゐる嘘の苛責だ。本當に自分を責められない位ならいつそ俺らしく呑氣にしてゐる方が本當だ。だがこれも嘘か？矢張り誇張なのか？」

彼はじれつたくなつた。そしてこんな事に何時迄も「くよ〳〵してゐる」事に腹が立つて來た。「始まらない話だ。そして大人氣ない話だ。どうせ直ぐ忘れて了ふ事だ。自分を肯定して行く事が必要だ。これは只呑氣のする馬鹿だ。馬鹿と云ふ事はいゝ事ぢやないが少しは許されてゐる事だ。だが結婚したら俺の生活は屹度又變るに違ひないし、又變らなければならない。俺の年齡で獨身でゐると云ふ事がいけないんだ。あの時だつてあれが姙娠して、あれを俺の妻だとはつきり意識してから俺は急に善くなり出したんだ。俺は自分で思つてゐるよりは確かに善い素質を持つてゐるのだ。少ししつこいが、要するに潔白な人間なんだ。今度も亦結婚したら俺は今の自分に意識されずに潜んでゐる善い素質を現はすだらう。兎に角此假りの生活はいけない。人間は自分の身を落ちつける棲家がなくて本當に生活する事は出來ないんだ。凡てこれからだ。元氣を持たう。そして勉強しやう。」

# 一〇

「昨夜あれは大さう歸りが遲かつたぢやないか。あれは近頃遊ぶのぢないかね。」と父が云つた。

「さうかも知れませんわ。二日許りあれの氣六ケしい事と云つたらありませんでしたよ。此間迄はあんな顏を些しも見せませんでしたからね。」

「自分の氣に咎めてゐる時は人に六ケしい顏を見せるもんだよ。」

「でもまあ仕方がありませんわ。今のあれには少し位遊ぶ事は却つて藥かも知れませんわ。」

「遊ぶのが藥ぢや困る。大分寫眞が溜まつてゐるぢやないか。少し見せてやつたらいゝだらう。」

「もう怒らないでせうか？」

「怒るもんか。顏つき丈けだ。あれは嫁をほしがつてゐるんだよ。」



「えゝ、あの机の上に此間迄飾つてあつたあの女の寫眞はもう机の抽斗に入れてありますよ。遊んでゐちやまさか飾るわけにも行きませんわね。だけど今日坂本さんから來たあの寫眞なら氣に入るかも知れませんわ。」

兩親はこんな話をした。そしてある日曜の午食の後で母親が彼の室に五枚ばかり候補者の寫眞を持つて來て見せた。

「お前怒つちやいけないよ。妾は何もお前に嫁をとつて呉れと云ふのぢやないんだからね。只近頃はあんまり方々から寫眞を貰ふもんでお前に見せて見る丈けなんだよ。まあ、見る丈け見て御覽な。」

母はかう云つて彼の前に寫眞を出した。

「ふむ。」彼はかう云つて顏を赭くした。

「お前怒つちやいやだよ。」と母親が又云つた。

「何を怒るんです。」と彼は苦笑した。「何だつて僕なんぞの處に……。どうも親父の「男爵」に對して寄來すんだから有り難い。」かう彼は既に其中の一枚に眼をつ

け乍ら云つた。

「お前の氣に入るやうなのはとてもないと思ふけれど。」母親は失望したやうに云つた。

彼はそれを机の上に放つて何とも云はなかつた。そして母が氣を利かして出て行つた後で今度は充分に一枚々々穴のあく程檢べて見た。

一枚を拔かしては皆んな醜くかつた。「どの面下げてこんな物を人に見せられるんだ。」と彼は云つた。そして「此奴だつて大した事はない。性質は善さ相だが、鼻が低く過ぎる。そして外つ齒だ。」と後の一枚を批評した。そして自分の妻になるべき女は大抵皆こんなものなのか、これと五十歩百歩の間のものなのかと思ふと急に落膽して「矢つ張りいゝ玄人でも買つて濟ましてゐる方がいゝかな。想へば此間のあの女はわるくなかつたな。」と云ふやうな氣にさへなつた。

併し三日の後に母の手許に又一枚の寫眞が入つた。

「まあ綺麗だこと。これならあれだつていやとは云ふまい。」と夫人は思はず云つて、彼が役所からの歸りを待ちわびてゐたが夜の十時頃彼が歸つて來ると早速彼の室へ行つてその寫眞を見せた。



直次郎はそれを見た時一寸顏を赭くしたが自分でもそれが何の爲めかは覺らないやうであつた。そして默つてそれを手にとつて一眼見た後でそれを机の上において「綺麗ですね」と云つた。

實の處彼は自分の妻として快活な、愛嬌に富んだ大きい眼を持つた、圓顏の、福々しい、二重顎の何方かと云へばやゝ肥り氣味な娘を何となく期待してゐるのであつた。その娘は全身に幸福な微笑みがあふれ、彼女が入つて來ると室中のものが急に明るくなり、陰氣であつたものも俄かに愉快氣になつて微笑み出すやうで、一言にして云へば「淑しさ」と云ふものを全く知らない、喜びの象徴とも云ふべきものでなければならなかつた。そして彼はさう云ふ風な娘を當てにする事が自分の天性として最も相應はしいと考えてゐた。從つてその期待に全く反してゐると云つてよい此娘を今見た時彼は直ちに「これだ。」とは思へなかつたのであ

る。この空想（イリュジョン）の娘と實際に「遣はされた」令孃との間に共通點を求めたら只上品と云ふ事と、色が白いらしいと云ふ點のみに思はれた。「之は俺の趣味に合はない」と彼は思つた。が、その「當てはづれ」にも拘はらず、彼の心の中の何處かで「俺は此娘と結婚するだらう。」とさゝやくものがあつた爲めに彼は最初に赤面をしたのである。

「お前これを綺麗だとは思はないのかい？」と母は露骨に失望した恨むやうな調子を含ませて云つた。

「一寸向ふへ行つてゐて下さい。後で返事しますから。」と彼は答へた。どうして自分がそんな答へをしたのか自分にも分らなかつた。

「ねえ、お前こんなのはもう決して二度と來る筈はないからね。偶まには孝行と云ふ事も少しは考えておくれ。妾はお前の望まない者をお前に押しつけるわけでは決してないけれど、お前がもし「うむ」と一言云つて呉れたら阿父さんも妾もどんなに喜んで安神するか知れないのだから。」



母は歎願するやうにかう云つて出て行つた。彼は今度もう一度其寫眞を見たら屹度自分は其時から急に此令孃を好くやうになるであらうと云ふ氣が何となく急にして來たので、母が出て行くのを焦れつた氣に待つてゐたが、母が出て行くのを見ると慌てゝ其寫眞をとつて貪るやうにそれを凝視め始めた。すると其娘は不思議にも俄にある皮が剝がれたやうに異常な美しさを彼に見せて來た。「おゝ、これはいゝ。大變なもんだ。」と彼は何かにドンと胸を打たれたやうに顏を赭らめて云つた。と、それは見てゐれば見てゐる程益々加速度にその「驚くべき」美しさを彼に露はして來て、何處迄行つたら其魅力が盡きるのか計り知れなく思はれた。

「俺はこれを貰へるのか？これは矢張り俺のより高尚な趣味に合つてゐるんだ。だが何だつて此娘はこんなに美しいのだらう！」と彼は餘りの幸福さを感じる一種の壓迫に思はず笑ひ出し乍ら、獨り言つた。

「これが俺の妻になる。それは善過ぎる。さうなる事は信じられない。こんな人がこの世にゐると云ふ事はまるで嘘のやうだ。全く不思議だ。勿體ない。」

彼は頭を振つて身顫ひした。そして胸の中で血が異樣に蠢めくのを感じ乍ら母親の處に小走りして行つた。

「もしあの娘が僕の處に來る事が出來るなら貰ひませう。實際あの寫眞のやうなんでせうね？」

「あゝ云ふ顏のたちは本物の方がきつと寫眞よりいゝものだよ。そして此人はきつと横顏が素破らしくいゝよ。」と母は言つた。「それにお前、寫眞を吳れる位だもの、來る事が出來るのは無論だよ。」

「しかし僕に逢つて見た上でなくちや何と云ふか無論分りませんよ。」彼は顏を赭くして云つた。

彼には此のやうな娘が自分のやうな男の妻になる事を承諾する筈はない、自分にはそんな勿體ない資格は微塵もない、それは此娘の神聖を瀆がす事だ、自分は卑しまれるであらう、又甘んじて卑しまるべき者であると云ふ氣がしてゐたのである。併しさうは口に出さなかつた。



それは或る子爵の次女と云ふ名になつてゐる妾腹に出來た十八になる令嬢であつた。その名は——美奈子と云つた。(水無月に生れたと云ふ事から此名が來てゐるのであつた。)早速ある人を通じて向ふの家に求婚の申し込みが傳へられた。そしてある家の結婚の披露會に其娘がその兩親と共に出席するので其處で其娘と見知り合ふ事が出來ると云ふ話になつた。

直次郎の心は混沌としてゐた。「いよ〳〵俺はA——を裏切る事になつた。而もこんなに早く。」と思ふと自分が如何にも浮ほ氣な者に感じられた。又自分の見合ひの爲に他の祝ひの席をそらぐ〳〵しく利用すると云ふ事も快からず思つたけれどそれでも其日を樂しみにして待つた。そして其夕華やかな席で彼女を見た時の印象は母親の言葉にたがはず、一層忘れ難い驚くべきものであつた。娘は當夜の主人公たる花嫁にも氣の毒な程「水際立つて」滿堂の光りを一身に吸收してゐたが、何處が美しいの、何處がどうだと云ふやうな事は云ふべくもなかつた。「これは生粹の日本の花だ。かぐや姫だ。」と人々は云つた。要するにどのやうに女性を輕蔑

する人間でも此娘を一眼見たら「女にもこんな人がゐるのか」と驚いて、自分の説が偏頗なものであつた事を認めないわけには行かないであらうと思はれた程彼女は滿堂の人々に畏敬と悅びの感を起こさせてゐた。で、「こんな人のためには命を捧げても惜しくはない。こんな人が一人でもゐると思へばそれ丈けでも生き甲斐はある。」と云ふやうな感じを起した者は此集りの中でも直次郎の他に必ず一人位はゐたらうと思はれた。

勿論直次郎は其夜一睡もしなかつたので、彼が如何に此娘に氣に入つたかと云ふ事は容易く家中の誰にでも分つた。間もなく婚約が整つた。そして此新しい運命の贈り物は彼のあらゆる過去を消し去つたやうに見えた。否、彼の凡ての過去は畢竟此「光明な朝」に彼を導くやうに豫定されてゐた處の廻りくどい夜の前提であつたやうに思はれた。只現在と、未來丈けが太陽のやうに眩ばゆく彼の前に輝いて、凡てのわびしい影、他愛ない幻は此太陽に場所を讓り、只歡びと、幸福に微笑むもの許りが彼の生活を充たした。かくて結婚の日は來た。



「要するに君位恵まれてゐる運のいゝ人間は珍らしいんだよ。ねえ、生きてゐてよかつたと思ふだらう。」と、その婚姻の夜紅葉館と云ふ家で披露の宴が開かれた時ある友が一室で彼に云つた。

「これで君は一番不幸なのは不幸がゐると云ふ事ぢやない事を知つたらう。隨分大きな不幸にも逢ふが、併しもつと大きな幸福も授つてゐると云ふ人間がつまり一番幸福なのさ。僕の運命なぞは實に泰平無事だが、併し君の運命の方がずつと羨ましいよ。」

「なあに僕の樣な呑氣な人間は、運がいゝ故もあらうが、一度だつて生きてゐるのが本當に可厭だと思つた事はないね。何時だつて生きてる事は好きなんだ。よしんばあの時に僕が一思ひに船べりを蹴つて了つたとしたにしろ夫は僕が厭世家になつたからぢやないね。只大打撃を蒙つた僕の内の愛生欲が其時哀しみの餘りに氣が狂ひ出してそんな事でもするより外に我身の始末がつかなくなつたからに過ぎない。其くせ僕は泣き蟲だ。つまり「呑氣な泣き蟲」さ。そして又泣く事も

好きなんだ。涙は僕にはシャンパンよりも甘い生の雫なんだからね。だがなんぼ樂天家の僕でもまさかこんなうまい事が先きに起つて來るとは考えられなかつたね。何だか今でも未だ少し信じられないよ。此宴會が畢ると同時にあれが君達と一緒に自分の古巣へ歸つて行つて了ふやうな氣がする。僕はあれが怖はいよ。何だか寄りつけないやうな氣がする。」

「あれとは前の女の人のことかい。」

「いや、前の女ぢやない。此花嫁が怖いんだよ。前の女も怖はくない事はないが、怖はさがちがふ。前の女は未だ僕を許すと云ふ事があるが、此娘は僕を宥すまいと云ふ氣がするんだ。しかしたとへ此幸福が今夜限りものであつたにしろ、僕は矢つ張り厭世家にはなるまいよ。矢張り運命に感謝するだらうよ。何故と云ふに此一晩、いや、此一時間丈けでも僕のやうなやくざ男には本當に勿體なさ過ぎるもんだと云ふ事を僕はよく知つてゐるからね。勿論、さう云つてゐても一時的には僕だつて自棄は起すだらう。併し一分間のものでも幸福は矢張り幸福だからね。



幸福は死なないからね。」直次郎はかう云つた。

彼の微笑むでゐる目に涙があつた。

# 下篇

## 一

直次郎は二十八になつてゐた。困難な、併し希望の見える仕事と、幸福な家庭とが彼にあつた。彼は餘り健康ではなかつたが、元來が活潑な性分なので元氣であつた。彼は役所には出なかつたが、自由な時間のたつぷりある學校が見つかつたので其處の教師になつた。そして重もに新しく目黑に構へられた自家にゐて仕事の研究をした。

彼は幸福で、子供らしい遊び好きで、氣分のいゝ時は隨分冗談も云ひ、よく笑ひもしたが、それは彼が氣を許してゐる時と場所とに限るらしく、一般からはむ

しろ謹厳な、口数の少い、六ケしい人間に思はれてゐた。

「利口な者と、馬鹿な者とは笑ひ方一つでも違ふ」と彼は云つてゐた。

美奈子を新しい戀人に持つた時一時消え去つたやうに思はれた過去の「彼女――A――」は再び其閉ぢられた扉を開けて、彼の心の中の自分の席を取り戻したけれど、それは彼等の平安を傷けはしなかつた。彼等の明るい幸福には寂しい影があつたけれど、彼はその寂しさを「人生の附きもの」として愛してゐた。夫婦は愛し合つてゐた。

勿論彼等も多くの新まいな若い夫婦がするやうに時々は仲のいゝ餘りに喧嘩をする事もあつた。そして始めは罪のない、幸福な冗談であつたその喧嘩もふとしたリズムからヘンに感情がもつれて、思ひがけないあくどい喧嘩に迄なるやうな事もあつた。或る日細君は彼が不用意に机の抽斗にしまつておいたA――の寫眞を見つけ出した。それで騒ぎが持ち上つた。細君は彼からA――の事を勿論殘らず打ちあけられてはゐたけれど、此發見はなま〳〵しく彼女の感情を刺戟した。「まあ、



此女の何處がそんなにいゝんでせう。此頸つきの下品さと云つたらないぢやありませんか。貴方は西洋好きだからこんな女迄が好く見えたんだわ。そして此女の肥つてゐる處が氣に入つたんでせう。貴方は肥つた女が好きだから。只それ丈けよ。」

彼が此寫眞を自分に「隠してゐた」と云ふ事にひどく感情を害ねられた彼女は、仕舞にこんな事迄を云つて了つた程デリケシーの境を越えたのである。若い彼女はたとへ夫婦の間にもある境がある事、そして互にそれを越えてはならない事を知らなかつた。却つてそのやうな境をつくる事を絶對に否定した。「それは二人の愛の間に溝をつくる事だ。そしてもし二人の間に溝があつたら其愛は必ず偽だ。眞の相愛にはそのやうな溝は一分もあり得ない筈だ。」と云ふ説を彼女は固守した。彼もそれには不服はなかつた。しかし「神經を重んじ合はなければいけない。」と云つた。が、若い彼女にはそれさへ不服であつた。そしてどのやうに境を超え合つても二人は益々愛を深める許りで、決して侵されないものでなければならないと云つた。

夫はそれに對する自分の不機嫌を自分の後ろ暗い處から來るものである。自分に比して遙かに純潔である天使のやうな心の彼女から考えればその要求は尤もな事であると思つた。そして彼女の此しつこい駄々に癇癪を起しつゝもそれをいじらしく思ひ、痛々しく感じ、心苦しく感じた。

「俺の可愛い雲雀。お前は理想家だな。だが男と云ふものは女のやうに簡單には行かないものだよ。いろんな事を考えるからね。」と彼は生れ來る子の爲めに帽子を編みつゝある彼女を見乍ら云つた。

「えゝ、此處にかうして坐つて編み物をしてゐる妾が「あの人」でないと云ふ事やなんかをね。もしこれが妾の代りにあの異人さんだつたらどんなにいゝだらうともね。」

これ位なら彼は笑つてゐられた。併し今Aの寫眞を見て、彼女が毒吐いた時には彼は怒つた。そして彼の顏に現はれた何とも云へない憤懣が又彼女を一層の悲しみと憤慨に驅り立てた。彼女は彼が自分を愛してゐないと云ふ事を誇張して感じた。そして仕舞にその寫眞を引き裂いた。



「何をするんだい！」彼はかう呶鳴つたが、其時思はず彼女の髪の毛を鷲掴みにして引張つた。それで彼女は聲を立てゝ泣き出した。「もう妾は出て了ふ。」と彼女は云つた。彼はその言葉の中に彼女のヒステリックな決心を認めた。そして自分の亂暴を後悔した。然し「勝手にしろ」と云つた。

女中達は心配した。そして玄關迄出かけて行つた彼女を抱いて引きとめた。それは夜の十時頃であつた。彼は苦しむでゐたが、彼女の實家から彼女について來た忠義な女中が彼女を抑える事を知つてゐたので、おのゝき乍ら自分では出るのを怯らへてゐた。そして女中に迄此馬鹿々々しい騒ぎを知られた事の爲めに腹を立てゝもゐた。

喧嘩は二日つゞいた。そして二人は此喧嘩の爲めに苦しむだ。後悔した。そしてかゝる喧嘩の時程彼等が互の心理を察し合ひ、牽かれ合つてゐる時はなかつた。二人は相手がいかに仲直りをし度がつてゐるか、そしてそれが出來ない爲めにい

かに苦しむでゐるかをよく知り乍ら最初の和解の口を切る事が出來なかつた。が、結局彼の方から口を切つた。そして自分の方から先きに和解を求めたと云ふ憤慨の爲めに彼は二時間許りもたてつゞけに高飛車な調子で喋舌つた。人間の感情の性質がどんなものであるかと云ふ事や、過去は現在とどんな關係を持つてゐるものか、そして一旦生きたものは死ぬ事は出來ないが、自分のやうな運命の場合にはそれは決して現在や未來に害をなす事はないものだとか、二つの感情は兩立し得るものだとか、長たらしく說明した。しかも彼の此高飛車な熱心な說敎ぶりが彼女には嬉しかつた。二人は眞劍であつた。そして解決をつけずにはゐられない程若かつた。

「俺は呑氣だが潔白な人間なんだ。だから胡麻化しはしない。お前を胡麻化した處で俺は幸福にはならないんだからね。併し俺達はもつと二人の深い愛に信仰を持たなくちやいけないよ。そしてその深い愛の爲めにもつと利口でなくちやいけない。俺も惡かつたが、お前も惡かつたんだ。」



彼女は謝まつた。そして和解の印しに、彼れには少し迷惑である接吻をする。が、又此和解の後程彼等が互に懷しむ時もないのである。

「お前は今つはりだもんだからヒステリックになつてゐるんだよ。大事にしなくちやいけない。來年の春に生れて來る天使の運命の爲めにだ。お前の爲めにも。俺達の幸福の爲めにも。」

二人はよく散步をした。そしてそんな時彼女はよく彼がA――を想ひ出して寂しがつてゐる事を氣取つてゐたが、我慢して默つてゐた。其中に彼はもう全で他の事を考えてゐる。すると細君はもう默つてゐられなくなつて何かを彼に話しかける。「うるさい！」と彼が呶鳴る。で、細君は又彼が自分を嫌つてゐるやうに思ひ、彼は矢張りA――を愛してゐるので、彼が怒つたのは彼が「彼女」の事を考えてゐた時に自分が口を出したのが氣に障つたからだと思ひ込んで了ふ。

妻の此心理狀態は彼にはすつかり分つてゐるのであるが相手にする事の面倒を避ける爲めに默つてゐる。併し和解は既に出來てゐたのである。高下駄を穿いて

ゐた彼女が何かに躓いた時彼が思はず右手で彼女を支へた時に。で、床に入ると彼は又笑ひ乍らかう云つて聞かせる。「考える人間と云ふものは餘り執拗く話をしかけられると腹が立つものなんだよ。」と。

彼女は彼が先刻何を考えてゐたのかを彼から云つて聞かされるとすつかり安心して、「成る程さう云ふものかな」と思ふ。男には「仕事」があるのだと云ふ事を彼女は知つてゐる。併し彼が考えてゐると何を考えてゐるのかゞ知り度くなつて、つい、それを訊かずにはゐられなくなるのである。處で彼には又此やうに自分の一言で簡單に慰められたり、悲觀したり、幸福になつたり、不幸になつたりする彼女がいじらしく哀れに思はれて、急に

「おい、明日芝居に行つて見やうか。」なぞと云ふ。

「だつて見共なくていけないわ。こんなおなかをして。」

「おしやれ。未だ眼立ちやしないよ。構ふもんか。」

「ぢや行きませう。本當に妾は馬鹿ね。でも妾は幸福だわ。」



## 二

二人は子供の名を考え合つたりした。そして翌年の春女の子が生れた。女の子の名は彼女が考える事になつてゐたので其子は彼女の命名通り「櫻子」とつけた。子供は二人の間を一層安定にし、生活を充實せしめ、愛を更に深い具體的なものになした。

子供が少し生長したので夫婦は乳母車を彼の月給の中から買つて櫻子をそれに載せ、交る〴〵それを押し乍ら方々へ買ひ物がてら出かけた。既に次の子が彼女の腹に宿つてゐた。

「あんまり歩かない方がいゝ。もう歸らう。」と彼が云つた。彼女は返事をしなかつた。彼は彼女が何か又自分に氣に障つた事があるのだと氣がついてそれは何かと考えた。そして事に依ると自分が先刻公園の茶屋で一人の女中をチョイ〳〵見たのが彼女の氣に障つたのかも知れない。「しかしまさか俺があんなに要心深くデ

リケートに見てゐたのを氣がつく筈もないが。」と思つた。

「何をそんなにふくれてゐるんだい。」彼は笑ひ乍らかう訊いた。

「妾が今度のお產で死ねばいゝと貴方は思つてゐるでせう？ 前の人のやうに。妾何かの小說で讀んだ事があるわ。細君の死を一度も願つた事のない良人と云ふものはない……つて。」

「何たつてそんな事を云ふんだい。馬鹿。」

「えゝ、嘘をお吐きなさい。お互の平和の爲めに。子供の運命の爲めに。」

彼は默つて歩いた。そして彼女は矢張り彼があれ程氣づかれないやうに茶屋の娘を儉み見てゐたのを見てゐたのだと云ふ事を知つた。妻が小說で讀んだとか云ふ言葉は怖ろしく、呪ふべきものだ。

「然し全然嘘ではない。幾分ウガつた處はある。」と彼は思つた。「これは男の中の一夫多妻的な本能から來る惡魔的な現象だ。」（彼は此場合これ以外の解釋をなし得なかつた。）が、勿論彼が妻を愛し、其幸福の長からん事を願つてゐる事は更に



一層嘘ではないのだ。それにも拘はらず彼は彼女が姙娠する度毎にそれを考へる。

「もしこれが死んだなら」と。それは愛する餘りの憂慮から來る一種の心理作用だ。聯想だ。然し變な聯想だ。氣味の惡い聯想だ。何故そんな事を考へるのか？

「俺が何を考えたつてお前は安心してゐればいゝんだ。」と彼は少し壓制的に云つた。「何でも考えるやうに出來てゐる人間の頭が一人手に考えたり、感覺が感じる事を一々拷問にかけられちや堪らない。惡い事があればそれから先きなんだから。何かそんな感じや、氣持ちを意識的に放縱にさせるやうな「意志」があつたらその意志こそ大いに責めらるべきだけれど。とに角お前に不幸があればそれは同時に俺の不幸なんだと云ふ事をお前は知つてればいゝんだ。」

「えゝ、それを知つてれば安心出來ると云ふものならいゝんですけれどね。」

「俺は自分の妻に尊敬される資格も、信賴される力もない事を恥ぢるよ。」

「まあ、貴方は何故そんな毒々しい皮肉を被仰る事が好きなんでせう。」と彼女が泣き聲で云つた。「貴方だつて女が「尊敬」で生きてゐられない事は知つてらつし

やるじやありませんか。」

「そんならお前は「苦勞」のえらい發明家だよ。」

「だから妾も馬鹿な苦勞のお蔭で少しは利口になつたぢやありませんか。妾は今迄貴方の過去を怖れてゐましたけれど、それは本當に馬鹿だつたと云ふ事に氣がついたのよ。それから又人の氣持ちや、「感じ」のやうな、人間が支配出來ないものを氣にするつて事も馬鹿だつて事も知つたのよ。妾の怖はいのはそんなものじやなくつてもつと得體の知れないものよ。つまり貴方の浮は氣——いえ、貴方が今云つた其「意志」その物かも知れませんわ。未來ですわ。之から先きですわ。だけどそんな事もうどうだつていゝのよ。云つたつて仕方がないわ。どうせなるやうにしかならないんですものね。あゝ妾は何故こんなに馬鹿なんでせう。」

夫はチラリと細君の方を見た。そして其憤慨の爲めに赭らむだ頰と情熱的な眼と、白い、美しい頸の線とを見た。彼は妻の此「憤慨の顔」が好きであつた。「本當に綺麗な奴だな。可愛い奴だな。」と彼は自分が其樣に「美しい、可愛い」者を



自分の妻として持つてゐると云ふ「不審な幸運」に擽つたい微笑みを感じながら思つた。併し彼は此「實は嚴肅な」問題を冗談にあしらふ事が出來る程日本人式な自信を持つた夫ではなかつた。それで彼が微笑むだのは妻の云ふ事が可笑しかつたからではなくて、何人も心から笑ふ事の決して出來ない此重大な問題に無意識に惱むでゐる妻がいじらしかつたからであつた。

「さうだ。未來は怖ろしくない事はない。お前が未來を支配する事が出來ないやうに、俺も俺の未來を支配しきる事は出來ないからな。」

「又嘘。貴方は妾にはそれが出來る事をも知つてゐらつしやるくせに。だつて女は男よりも貞節であり易いものなんですからね。それが女の不幸なのよ！」

「馬鹿。お前は又「度」をはづれ出したな。どうして貞節が不幸で、不貞節が幸福なんだ。」

「貴方の云ふのは理窟よ。」

「女の不幸は自分が不幸になる事だ。男の不幸は仲間を不幸にする事だ。それだ

け運命がちがふんだ。」

彼は「仲間」と云ふ言葉の代りに「他人」と云ふ言葉を遣ひ度かつたのだが、さう云ふと又馬鹿々々しい言葉の爭ひが起るので「仲間が……」と云つたのである。

「それも理窟だわ。」

「そんなら勝手にしろ。」彼はかう云つた。二人は十分間許り氣まづい無言のまゝで歩いた。が、「勝手にしろ」で此爭論を畢らせるにしては彼はもう少し癇癪を起してゐた。

「もし俺がお前のやうな「女」に全く理解出來ない「男」の忙しさを持つてゐない者だつたら俺はなる程危ない人間かも知れないよ。だがもしお前のやうに絶對的に完全な貞潔を要求するなら結婚した者は別れるより外はないよ。絶對的にエゴイズムを去らうと思へば生活を止めるより外はないのと同じだ。」

彼は女にとつて其運命の性質から夫婦間の愛や、自分の境遇の問題が何よりも



切實な問題として考えられるのは如何にも當然な事であるとは十分に知り乍ら妻の「無神經」なしつこい追擊に如何に自分が腹を立てゝゐるかを彼女に知らせやうとするかのやうにがみ〳〵かう云つた。

「まあ、貴方は怒つてゐらつしやるの？何故貴方はそんなに此問題には怒り易いのでせう。」

「ヒケ目があるからだ。お前の心配は當つてゐるからだ。」と或る者が彼の心の中で云つた。

「此奴の不安は如何にも尤もなんだ。此奴の意識が感じるのではない。「運命」が不安を感じてゐるんだ。」と彼は思つた。併しさう思ふと猶更感情はこじれて來て、彼は心の奥底では妻に同情し乍ら、表面では此「自分を苦しめ、自分の氣分を搔き亂す者」に對して苛立しい、暴虐な氣分にならずにはゐられなかつた。しかも其事で又自分の心を一層不快にしなければならなかつた程彼は「馬鹿」であつた。

「併し男だつて可哀想だよ。」と彼は「愛する者を虐める」時の痛々しい叫び度い

やうな氣持でステッキを打ち振り乍ら云ふのであつた。「或る自然に責められて、その爲めに自分自身で相當に苦しむでゐる上に思ひやりのない細君に責められるんだからな。餘りうるさく不當な愚痴をうけ過ぎるとそれ丈けでも離緣する權利が男の方にもあると云ひ度くなるよ。其男が本當に妻を愛してゐて、貞節であればある程だ！」

「えゝ、分つてゝよ。」と妻は「云つてならない事をつい云つて了つた愚かな自分」に對する心底からの悔恨と、又その爲めに苦しまされてゐる夫に對する熱烈な同情とに涙ぐみながら慌てゝ云ふのであつた。「男がもし惡い事をすれば半分は女が惡いからなんですよね。馬鹿だからいけないんですよね。許して下さいね。妾が惡かつたわ。もう云ひませんわ。だから貴方もそんな「離緣」なんて怖ろしい言葉を遣ふのは止して下さいよね。妾は只貴方が「捨て」ないでゐて下されば幸福なんですわ。」

結局は此「妾を捨てないで頂戴」と云ふ言葉が凡ての議論の終りに來る。良人は其時胸を苦しくされる。そして考へ込む。しかしやがて忘却と和解とが彼等をその煩らいから解放出來る間は彼等はとに角幸福なのである。

實際彼等は幸福と云はるべきであつた。彼女が高らかに笑ふ時その聲を聞く者は誰でもそれが如何に幸福な人の笑ひ聲かと云ふ事を彼女を見ずして直ちに知るのであつた。そしてその幸福を嫉む代りに一層彼女の幸福を希ひ度くなり、自分迄が幸福になつたやうな氣がして、嬉し相な微笑みが自づとそれ等の人の顏に浮ぶのであつた。そして幸福な「笑ひ」と云ふものが如何に美しいものであり、善いものであるかと云ふ事を誰しも覺らずにはゐられないやうに見えた。



## 三

十五ヶ年が經過した。夢のやうに。

其間には勿論いろ〳〵の波風があつた。父親の死や、四人の子の殆んど絶え間

ない交る〴〵の病氣や、入院や、其他の事に依つて心配や、恐怖や、悲しい事も多くあつたけれども、とに角幸にして子供は一人も死なずに皆美しく生長した。女の子が三人で男の子が一人。櫻子はもう十七になつた。夫婦はもう若い夫婦ではなかつた。「時」はいろ〳〵のことを無常に變へて了ふ。寂しいほど變へて了ふ。細君は今や彼の髪の毛の間に白髪を見出し、彼は妻の一層「落ちついた美しさ」を持つて來た顔の中に小皺を發見するやうになつた。彼はよく働いた。「男も女も大概の禍は忙しさの足りない處から來るものだ」と彼は云つてゐた。そして其生活は積極的に善くはない迄も、過ちのないものであつた。

父は死ぬ時に彼に云つた。

「俺はお前を息子に持つた事を幸に思ふ。益々努力しろよ。慢心するなよ。全力を盡してゐると自分でも信じ、又實際絶大な抱負を持つてゐる人間でも、常に慢心を起す事の全くないと云ふわけには中中行かぬものだ。今度の論文でお前は博士にもなり、大學の教授にもなるだらう。お前はかりそめにもそんな事で慢心するやうな慘めな男ぢやないと自分を思ひ込んでゐるだらう。だが立派な自信を持つてゐる爲めに善い仕事をする人間もつい思ひがけない慢心の爲めにもつと善い仕事が出來る處をせずに了ふ事は隨分有り勝ちな事だ。もしそれさへなかつたら人間は何時でも自分が思つてゐるよりは猶ほ善い仕事をする事が出來るのだ。あらゆる仕事の勝敗が決せられるのはナポレオンが云つた通り「最後の五分間」の心次第にあるのだからな。毎も自分の豫定よりもつといゝ仕事をするに越した事はない。それからもう一つお前の缺點を云つておくが、それは女だ。いろだ。お前は正直な、善い人間だが、その方は餘程注意しないと危ないぞ。平和に、調和的に幸福な生活を送らうと思へば色をつつしむ事が何よりだ。大抵大丈夫だとは俺も思つてゐるがな、俺はお前等が飽く迄も祝福の中に樂しく生活して、仕事の方にも躓きがない事を望む餘りにお前を子供扱ひした事を許して呉れ。之で俺も安心して死ねる。」

父はかう云つて、わが子の頭の上に不安さうに手をおいた。彼は泣いた。

## 四

直次郎は男爵になり、法學博士になり、大學の教授になり、その上に父からの少からぬ遺産をうけ繼いだ。彼は四十五になつてゐた。

健康は勝れなかつた。しかし家庭は相變らず平和で、樂しかつた。そして彼は自分の幸運を考え、人生を考え、「自然」の愛を思ひ、生長して行く子供等の運命を考えてはよく涙ぐむだ。しかし何となく未だ充實してゐないものがあつて、物寂しかつた。彼はよく「死」を考えた。そしてその恐怖の爲めに屢々夢の中でうなされた。

が、そろ〳〵彼の運命に頓挫を來たす時が來始めた。その後彼は胃と腎臟を患つた。それがやゝ癒つた時醫者は彼に暫く轉地をすゝめた。「一つ別莊でもお造りになつたらいゝぢやありませんか。」と云つた。細君がそれに贊成して「さうすれば阿母樣もお喜びになりますわ。あんなに寂しがつてゐらつしやるのですから。」と



云つたので彼も別莊を造る事にした。山か、海かと二人は樂し相に論じたが、彼が「一番いゝのは平原だ。山も海も人の心を壓迫する。しかし平原は人の心を自由にし、安泰にする。」と云ふので那須野の原に別莊を構へる事にした。別莊は氣持ちよく出來て彼の氣に入つた。そして旬年只冬丈けを除いてあらゆる季節に其處へ行くと云ふ事が又一つの樂しみになつた。

が、別莊が出來上ると同時に彼の母は不意な病氣から死んで了つた。その淋しさの深痛が未だ癒やされきらないうちの翌年の秋に彼は大學を辭職した。病氣の爲めではなく、教授と云ふ務めが嫌になつたからであつた。彼は仕事の方に於ては孤獨であつた。そして多くの人に會ふのを嫌かり、一人でゐる事を好んだ。しかし依然として空虛な內面の寂しさ――それは決して女には理解されないものである――が彼れを離れなかつた。彼の行く處にそれは夢魔のやうに附き纏つた。空虛、無爲、病後の慢性的怠惰、平凡な滅亡。彼の內に五十代の人間が持つ頑なゝ自信と、仕事を果さずに死に近づく人間の持つ不安、寂寥、失望が入れ交つた。

「俺はもう駄目？俺はこんなに駄目に畢るべき人間ではない筈だが。若い頃のあの生き生きした空想や、理想に對する熱情や、勇氣や、幸福に對する奮鬪力は何處へ行つて了つたのだ。今では本當にその寂しさを感じる力さへなくなつて了つた。」と思ひながら凡てのものを輕蔑し、自分位頭のいゝ男は少いのだ、此有爲な自分が自分を見下げて、こんなにぶら〳〵してゐるのは勿體ない話だと思つてゐる。そして何かと云ふと彼は皮肉な調子で、「低能共が」とか「馬鹿者共が」とか口癖のやうに云つた。そのくせ實は以前には此樣な暗い寂しさを彼は知らなかつた。彼は一人で、兩手を背ろに廻はして自分の書齋や、畑をしよんぼりした樣子で歩いた。

細君はその姿を見ると心細くなつて娘と二人で「どうしてあんなになつてお了ひになつたのだらう。妾は心細い。」などと眉に皺を寄せて云つた。素より彼女は彼の一切の經過について常に考えてゐた。もしやめかけを持ち度がつてゐらつしやるのではないかしら、などと思つた事もあつたが、自分でその下品な疑ひを恥ぢ



て、素より口には出さなかつた。併し「もしさうだつたらめかけを持たせて上げて此「お氣に入り」の別莊に二人で住はせ、自分は東京に子供等と別居しやうかしら」などと迄考える事もあつたが、「お體がおわるいので、お仕事が渉々しくお出來にならないから鬱ひでゐらしやるのですわ。」と娘が云ふのを聞くと、「妾もさうだと思つてゐるよ。全くさうに違ひないよね。」と云つた。

實際彼はめつきり痩せた。蒼白い頰はこけて、眼や盆の窪は「氣味が惡い」ほど落ち窪んでゐた。そして減多に口を利くのも臆劫らしかつた。細君は彼のそら〳〵しい苦笑に現はれる「怖ろしい」寂しさを見るのを避ける爲めに彼を笑はす勇氣さへなかつた。そして一人で心配した。夫婦はよく一時間も二時間も全く無言で別々な事を考え乍ら一つの室にゐる事もあつた。「あゝつまらない。つまらない。何んて詰らなくなつて了つた事だらう。」と細君はよく子供等の前で嘆息した。

彼は自分一人が弱つて、「墮落」した事の爲めに家中の者が中心の灯りが消えたやうに味氣なく詰らな相にしてゐるのを見ると我身を恥ぢ、責めずにはゐられな

かつた。「全く體がわるいからだ。凡ての原因は只それ丈けだ。俺が今此儘でくたばつて了つたら喜ぶ者はわりに多いゝだらうがな。ふむ、何と云ふ馬鹿々々しい情けない話だ。俺は病氣なんぞしてゐられる體とは少し異ふんだからな。だがまあ氣にしないで呉れ。かう見えてもまだ〳〵俺はねばり強い。もう直きなはるよ。さうしたら又働くさ。」と彼は細君に濟まないと云ふやうな表情をして云つた。

「さうですとも。貴方は未だしつかりしてゐらつしやるわ。けれども貴方はあんまりお仕事をなさり過ぎましたからね。よく分つてますわ。ですからどうぞお醫者に診て貰つて下さいね。早く元氣になつて頂かなくちや全く不幸ですわ。」と細君は云つた。

二人はセンチメンタルな氣持ちになつた。そして寂しい愛を感じ合つた。

「熱も何もありやしないのだ。見せたつて仕方がないが、お前がさう云ふなら診せて見やう。」と彼は云つて、醫者を呼んだ。醫者は彼を診察して慢性の胃腸病から來る神經衰弱性のヒポコンデリーで、心配する事はないが、何もかも衰へてゐる。併しせい〳〵暢氣にして充分養生をし、胃病が全快したら精神も元とのやうになると云つた。そして胃病の藥を與へ、マッサージをすゝめて歸つた。

「何もかも衰へてゐる。だが情慾丈けは相變らず旺盛だ。何もかも臆劫だ。併し情事丈けは臆劫でない。そしてその情慾は妻の體を求めてはゐない。」と直次郎の心の中であるものが云つた。「誰が情慾の對象としてその妻を想ふものがあるか。」又他の聲が云つた。

實際彼が一人で散歩をする時一寸綺麗な女が脛を現はし乍ら川で洗濯をしてゐたりするのを見ると、彼の悄衰した落ち窪んだ眼は異樣に輝くのであつた。

「色慾。お前は又罪を犯すぞ。お前は罪を犯したがつてゐる。」彼はよく此聲を自分の内に聞いた。「怖ろしい事だ。」彼は頭を振つて、自分に恥ぢるのであつた。

## 五

或日彼は廊下の窓から一人の桂庵らしい女が若い美しい女中を勝手口の方に連

れて行くのを見た。「あれが今度仲働きになるのだな。いゝ女だ。定まつて呉れるといゝが。」彼はかう思つた。そして胸の中に不安な動悸を感じて書齋へ引つ込んだ。

「あれが定まる。あれを連れて那須野に行く。そしてあれ(妻)が東京に歸る。」彼は又考えた。「何と云ふ事を俺は考えてゐるのだ。望んでゐるのだ。どうか凡ての運命のためにあれを定めずに返して呉れるといゝが。さもないと怖ろしい。」「それならかりにあれ(妻)があの女中をおくことに定めても俺が「あの女中はいけない。返へして了へ」と云つたらいゝぢやないか。」「しかしそれは見拔かれる事だ。俺としてそんな事は云へない。そして俺はあれが返へつて了ふ事を望まない。それは惜しい。」「一番いけない事はあれ(妻)が俺を信用し過ぎてゐることだ。俺があれと結婚してからとも角も十七年間具體的には貞節を保つて來たからだ。それは全くあれのお蔭だと云つていゝ。然るに俺は今迄よりも一層強くそれを破り度くなつてゐる。それなら俺はあれに打ちあけるべきだ。俺はお前が思つてゐるやうな男ぢやない。吾々の結婚の當初の頃のやうに、嚴しく俺を警戒してゐて呉れ。俺は近頃非常に危ないのだ。と。」「しかしそんな恥はさらしたくない。どうかあの仲働きが定まつてもそんな心配をする必要がなければ一番いゝが。そして精神を只集中すべき處に集中してゐる事が出來ればいゝが。否、俺は心配をし過ぎるのかも知れない。もつと心を自由にしてゐやう。餘り因はれ過ぎる。」

心は少し落ちついた。「とに角あまりその女中を見ないやうにしてゐればいゝ。」

併し晩飯の時彼は其新しい仲働きを見まいとしても見ないわけに行かなかつた。何かにつけて彼は彼女をちよい〳〵見た。「これは呪の眼だ。」と自分で自分の眼を思はうとしても其の意識には何の力もなかつた。却つて内心何の疚しい處もない者の樣に白々しく裝つて圖々しく其女を見たりした。内心疚しい處のある者にはこんな臆面のない眺め方は出來ない者だと、人は思ふであらふと思ひながら。

「貴方、あれが今度來た女中です。あまり感じのいゝ女ぢやありませんがね、さうえり好みをしてゐてもキリがありませんから、とも角も置いて見やうかと思つ

てゐますの。」と細君はその女中が一寸去つた時に彼に云つた。

「さうか。」と彼は無頓着らしく應へた。

彼は賤しい情慾が自分の内に起つてゐて女に對する呪ひの意志を内に持ち乍ら若い娘なぞを見る時、「あゝ、いじらしいものよ。可哀相な花よ。俺はお前を獣物(サティール)の足で踏み躙らうとしてゐたのだ。」と云ふやうな心が起つて、急にガラリと氣持ちが變つて了ふ事が折々あつた。それで今此時も彼は此女中の生ぶな、いたいけな、神聖な美が自分に此羞恥の感を起こさせ、自分を罪(つみ)な意志から救つて呉れるであらうと心に期待してゐたのであるが、不幸にして此時彼が其女から受けた感じはさう云ふのとは異つてゐた。却つて「此女は男を知つてゐる。そして罪を愛してゐる。俺は此女に對して自分に咎め、自分を怖ろしいものと思ふ必要はない。」こんな氣がした。彼の内で小さな良心がかすかにおのゝいた。しかし彼は安心した。そして其女がさう云ふ羞恥心と、我身に對する氣がねを自分に起こさせない事の爲めに喜んだ。「しかも此女は美しい。俺はかう云ふたちの美しさが好きなんだ。かう云ふ美しさは情慾の對手には相應はしいからな。」



彼は僅かな食事が濟むと直ぐ自分の書齋に引込んだ。そして縮こまるやうに自分の椅子に腰をおろした。何と云ふ善人許りがゐる事た。然るに俺一人は……。」

かう呟いて溜息を吐き、頭を振つて起ち上つたとき、奥で子供達が蓄音機をやつてゐるのが聞こえた。

「よし、斷じてそんな事はしまひ。わけはない事だ。斷じてしないと云ふ事にして了へば只それ丈けの事だ。」彼はかう獨り言つた。そしてこんな時に神を信じてゐる人間は祈るんだがなと思つた。

と、彼は妻子に自分の笑顔を見せてやり、無邪氣な明るい氣持ちで皆と快活に樂しみたくなつた。「さうだ。それがいゝ。さうして久しぶりに「バッハ」でも聴くか。さうすれば心が洗はれる。」然し妻や子供等の前へ何喰はぬ體で出ると云ふ事は流石に少し氣おくれがしたが、又「何だ、馬鹿々々しい。こんな事は誰でもが感じる事だ。只俺の働き過ぎる意識が毎もの癖で、いやに大袈裟に騒ぐ丈けの事だ。

何もさう氣六ヶしく自分を苛む程の事ぢやない之は悪い癖だ。」と思つて卷煙草を啣えながら茶の間の方へ出て行つた。

## 六

數ヶ月が經つた。

彼は其間に一方では著作の仕事を渉取らせ、他方では大分安心を得た。今迄殆んど何時でもさうであつたやうに、女中として、召婢として家において見ると、生活の上下の區別や、物言ひやら、勤作の凡てのガサツさ、愚鈍さ、醜くさなぞが眼について來て、それに對して自分が情慾を起すと云ふ事は眼見えの當時に氣づかつた程危險性のあるものぢやない。カナリ其女にある愛を感じても其愛はだんだん情慾を遠去かつて行くものである。そして何時の間にか主人と召婢と云ふ區別感がお互にはつきりして來て、氣持ちが淡白になり、其隔りを渡ると云ふ事は殆んど不可能な事に見えて來る。のみならず始終その女を見てゐると始めには



刺戟された其女の魅力が次第に失はれて來てそれ程「好く」と云ふ事は出來なくなつて了ふ。

かくて彼には此女中――豐と云ふ名であつた――の美しくない處、時にはガツカリするやうな處が見えて來た。その雀斑の多い顔や、ガサツな大きい足や、ぞんざいな方言交りの言葉遣ひなぞが。從つて前よりもずつと自由な氣持ちで此女に接する事が出來た。只此女の丸い黑眼勝ちな眼が彼の氣に入つてゐた。(「俺が妻として期待してゐたのは此女をもつと上品にしてもつと美しくしたやうなたちの女だつたのかも知れない。」と彼は思つてゐた。)彼は一體召婢に餘り口を利かないたちであつた。叱つた事も殆んどなかつた。それで「いゝ旦那さんだ。」と召婢等から思はれてゐる事も自分で知つてゐた。只口で云ふ代りに眼つきで時々自分の氣に入つた女中に厚意を見せてやる。愛を湛えた微笑みの眼をそれとなく向けてやる。或はいたはつてやる。彼は此自分の眼の魅力に内心自信を持つてゐた。その愛の眼つきは時には至つてよくないたちのものである事を自分で知つてゐる

が、それ位は許されていゝ事だと思つてゐる。

時々彼の眼と豐の眼とがかち合ふ事があつた。その場合に豐は眼をそらさなかつた。そして顔も赭らめずに彼を一瞬の間ボカンと見入るのであつた。「中々圖々しい奴だ。」と彼は思つた。しかしその圖々しい處が彼の氣に入つた。「ふむ」彼は一人で微笑んだ。「圖々しいあばずれ奴、此奴はこのキョトンとした丸い眼付きに自信があるのだ。」「妾の此眼はいゝでしよ。よく見て下さい。妾はこれで幾人も男を引つかけてやつたのです。さうして妾は少々貴方に惚れてゐるんです。」さう云つてゐる。だが全く可愛い眼だ。」

彼はかう思つた。さうして自分は餘り此お豐に氣を許し過ぎてはいけない。自分の方からはまあ大丈夫だが、女の方から少しアクティーヴに出て來られたら少し危いと思つた。その癖豐が小さい子の伽をしてゐる時其處へ行つて何氣なく子供に冗談を云ひ乍ら豐を笑はせて見たりしてゐる。

或晩彼は食事の時に妻に云つた。



「どうも俺は物を食ふと胃にしみる。何だか食ひ物が何かにこすれるやうな氣がする。酒を飲むと殊にいけない。」と云つた。

「お酒は葡萄酒を少し丈けになさらないと本當にいけませんわ。」と細君が云つた。

「事によると俺は癌ぢやないかしら。」と主人が突然に云つた。彼はかう云ふと同時にサッと顔を赭くした。

「まさか。そんな事が……」と細君は云つた。しかし細君の顔にも一寸赭味がさした。

「何故お前は今顔を赭くしたんだ。お前もさう思つてゐるのだらう。」と夫が云つた。其聲は鋭かつた。

「そんな事思ふもんですか。」

「何故思はないんだ。」

「だつてまさかそんな事……」

「おい。俺はきつと癌だよ。だつて癌でなくてこんなに胃がしみたり、食ひ物がこすれたりする氣遣ひはないぢやないか。」

「だつて癌は血統でしよ？阿父樣は癌ではありませんでしたわ。お氣の故ですよ。」

「だが親父の實父は食道癌で死んだ相だよ。四十二で。もし癌だつたら……俺は百が百迄も助からないんだぞ。」

「そんな事被仰るもんぢやありませんわ。緣起でもない。」

彼は書齋に入つた。「屹度癌だ。」「屹度癌だ。」彼はさう思ふ事が自分の例の心配し過ぎる意識の癖であると自分に思はせやうと努め乍ら一人でかう云つた。「十中八九迄はさうぢやあるまい。」かう思つて胃のあたりをおづ〳〵し乍らそうつと撫で廻はして見た。それからだん〴〵安心を得て少し力を入れて押して見た。グリ〳〵がありはしないかと。「まだグリ〳〵はないな。しかし素人の俺が外から觸つて見てそんなものがあるやうぢや大變だ。」併し心はおびへて來てたまらない圖が



胸の中におひ廣がつて來た。「矢張りさうかも知れないぞ。丁度俺は癌にかゝる齡頃だ。もう案外進んでゐるのかも知れない。俺があの病後の神經衰弱だと云つて元氣がなくなり出した頃から始まつてゐたのかも知れない。どうも只の神經衰弱ぢやなかつた。」彼は妻を呼んだ。

「何故お前は來ないんだ。俺が癌かも知れないと云つたのに。」

「だつてそんな事はないと思つてゐるのですもの。あつちや大變ですけれど、なにに定まつてゐますわ。妾は今子供に御飯をやつてゐたのです。」

「お前は此處へ來たくなかつたんだらう。俺が怖わいもんで。」

「どうして貴方がこわいの？」

「とぼけるなよ。何故お前は先刻「そんならお醫者に診てお貰ひになつたら……」と毎もの調子で云はなかつたんだ。醫者の診斷を聞くのが怖わいからだらう。」

「まあ、そんなら診てお貰ひなさいな。御自分で神經を起してゐらつしやるもんで妾迄がそんな心配をしてゐるものにしてを了ひになるのね。」

「俺は怖わいよ。俺が死ぬと云ふ事には俺以外の人間のやうに冷淡にはなれないからな。」

「まあ、貴方は……」細君は涙ぐんで云つた。

「あゝあ。俺は死ぬのかな。死ぬのかなあ。」彼はかう云つて頭を抑へた。そして無精に延びた頤の鬚を引つ張つて、うめいた。

## 七

又一ヶ月經つた。彼は醫者に診て貰はなかつた。體には元氣がなかつたけれど、胃には痛みを感じなかつた。食慾は餘りなかつたが、それでも食慾がないと思ふ事が怖ろしいので強いて一杯づゝは餘計に食べた。しかし食事は怖ろしかつた。胃がこすれはしないか、こすれはしないかと絶えず氣になつた。さうして時々こすれるやうな氣がした。又段々食慾が衰へるのを感じた。それで粥を食べる事にした。普通の飯だとどうしても二杯しか替へられないのを粥だと三杯は食べられるのでいくらか氣が安まるのであつた。



彼は毎朝湯殿の鏡に顔を映した。「一晩の中に死相が現はれはしないか」と云ふ懸念の爲めにそれは恐ろしかつた。それで薄暗い處にかけてあつた鏡を明るい處に移した。それから又病人らしく陰氣くさい感じを追ひ拂ふ爲めに床屋を呼んで髪をかり、髭を剃らせた。さうして充分光線に當つた顔を見るとさう病人らしくも見えないのだ。「うむ、俺の眼には未だ生命がある。力がある。光りがある。之がある間は大丈夫だ。」と彼は思ふ。しかし傍の眼にはどうかすると彼は急に影が薄くなつたやうに見える事があつた。

「俺は此頃影が薄く見えはしないか。」と彼は或る時妻に云つた。

「何を云つてらつしやるのよ、貴方は。本當にどうかしてゐらつしやるやうに見える事はありますわ。」と細君が云つた。

「はゝゝ。馬鹿だな、俺は。まさか、夫に向つて「えゝ、影が薄く見えますわ」と云ふ女房もあるまいぢやないかな。鬼婆でゞもなければ。」かう云つて彼は細君

を睨んだ。心の中ではこんな無理を云ひ度がる自分の因業を許して呉れと思つてゐる。しかしどうも云ひ度くなるのである。

しかし或時彼が少し下痢をしたのでそれをキツカケに細君は怖る〳〵醫者を呼ぶ事に決した。彼女は醫者が來ると玄關の處で凡ての心配を打ちあけた。「醫者はさうですか。中々神經質でゐらつしやるから。」と云つた。しかしそれは細君には空々しく聞こえた。「始めから其兆候は見えてゐたのだ。」と醫者が云つてゐるやうに思はれた。

醫者は彼の前では笑つた。そして肝臓が腫れてゐる。胃も惡い。と云つた。

「癌の兆候はありませんかね。」直次郎は苦笑し乍ら鋭く醫者の方を見て訊いた。

「はゝ、それやまあどんな經過で癌になる事が絶對にないとも云へませんがな。今の處ではそんな樣子はありませんな。」と醫者ば云つた。

しかし玄關の處で細君に注意した。「癌になるかも知れないと云ふ位の覺悟は持つてゐらつしやる必要はありますよ。」



「でも今現に癌だと云ふ容態ではないのでせうか。」細君は胸に高い動悸を打たせ乍ら訊いた。

「私は胃潰瘍のなりかけかと思ふんですよ。未だ判然とは分りませんがね。何しろ輕い御容態ぢやありませんから餘程貴女はしつかりした覺悟を以て御養生の世話をなさらないと。」

さうして醫者は去つた。

陰鬱と、心細さが一家を充たした。夫は何かと云ふと細君を呼んで自分の傍を離れさせまいとしたけれど、細君はそれが苦し過ぎるので何かにかこつけては良人のわきをはずした。直次郎は何もかも知つてゐた。併し疑つてゐた。彼は妻に對しても誰に對しても、恰かも重病人である自分には當然その權利があるとでも思つてゐるかのやうに氣六ケしく、怒り易くなり、エゴイストになり、皮肉屋になり、さうして意地の惡い嫌味許りを云ひ度がつた。

「此處にゐるのは閉口だらう。さあ早く向ふへ行つてそつと泣いて來い。そして

眼を赤くして笑ひ乍ら又此處へ來い。」こんな事も云つた。

彼は苦しむでゐた。拂つても拂つても自分にやつて來る闇と、その闇の爲めに來るあらゆる此世の生活や、仕事や、生存物に對する執着や、未練や、愛や、嫉妬や、疑ひや、絶望や、憎惡等の爲めに。殊に仕事と、不幸になるべき妻子とからの永の別離を考える爲に。そして彼にはあらゆる健康なもの、血色のいゝ顏をして、よく物を食べ、喋舌り、安眠し、活動する一切のものが馬鹿々々しく、愚劣に思はれた。そして自分が段々惡人になつて行く事の爲めに當然人々の愛と同情とを失ひつゝあるにも拘はらず、彼等が根氣よく自分に看護をしたり、見舞に來たりするのを見ると彼は毒々しいやうな駄々をこねたい氣持ちになつて、彼等のする事爲す事を如何にもそらぞらしい表面的な虚僞に思ひ「嘘を云つてゐる。嘘を云つてゐる。皆んな腹の中では俺が死ぬ事を望んでゐるくせに。」なぞと思つた。そしてたまに見舞に來る弟や甥にあくどい嫌がらせを云つてはその困る顏を見て苦しむだ。併し妻子やある人々の疑ふ事の出來ない辛棒强い眞心からの盡し



方を見ると彼等が何故こんな「何の價値もない惡人」である自分に善くしてくれるのかゞ不思議に思はれて、急にたまらなく悲しくなり、そして一人で泣くのであつた。

處が大學から來た博士の診察によつて彼の病氣は癌ではなくて、胃潰瘍だと云ふ事が確められた。彼はそれをも疑つたけれど、それは喜びの爲めに疑つたので、實は信じる事が出來たのであつた。

「胃潰瘍なら癒り得る。」と云ふ希望が再び家の中に光明を甦へらせた。そして此希望と共に幸にも彼の病狀は次第にいゝ方に向つた。そして秋の始めに彼は博士のすゝめで修善寺に轉地する事になつた。

「俺は情けない體になつて了つたな。」と直次郎は汽車の中で細君に云つた。勿論彼がかう云つたのは餘りに嬉しかつたからで、その子供らしい喜びを見せ過ぎるのを氣まり惡がつた結果、此反語が出たのである。

「でもまあ、本當によござんしたわね。今思つても怖ろしくなりますわ。よくま

ああの怖ろしい暗闇に自分が堪えて來られたものだと不思議な氣がしますわ。」と細君が云つた。

「分らぬもんだ。」と彼は外の景色を見て微笑み乍ら云つた。そして妻の方を氣まり悪相に見た。「俺はお前に濟まない事を度々した。許して呉れ。しかし俺は又善良になつた。もうあんな意地悪はしないからな。」とその眼は云つてゐた。「本當によく助かつて下すつたわね。妾は何に感謝したらいゝでせう。」と細君の眼は云つてゐた。彼は永い苦勞の爲に窶れた眼立たない小皺の多くなつた妻の美しい顏や、ほつれた髪を見ると涙ぐみ度いやうな感謝と、自己悔恨と、愛と、幸福とを感じるのであつた。

二人は無言であつた。今更に互の存在の有り難味を感じ、互に無限な愛を感じてゐる事を感じ合ひ、運命や、又しても和らいだ喜びの風光を自分等に見せて慰めて呉れる美しい自然の愛や、永い苦勞と艱難の間に益々深い愛を結ばれて行く人生の寂し味を思ふが故に二人は無言であつた。彼女は彼の眼に溜つてゐる涙の



意味を了解しきつてゐるが故に自分も涙ぐみ、彼は又、彼女の美しい眼に溜つてゐる涙の心を理解しきつてゐるが故に更に涙を湧かすのであつた。

「が、之は要するに猫に見込まれた鼠が猫の一時的な嗜(たしな)みを喜ぶのと同じ類かも知れない。之が結局幸福になるかどうかどうして分るものか。喜ぶのは早過ぎる。」と彼は意識的に思つた。しかしそれも口には出さずに、「修善寺の湯が効いて呉れるといゝが。」と云つた。

「一ヶ月もゐらしつたらキット全快なさいますよ。」

「さう簡單には行くまい。が、とに角つゝしまうな。つゝしむ事が大事だ。つゝしみさへすれや人間の生命と云ふものは弱さうでも案外ねばり強いもんだ。」

## 八

修善寺では彼は食慾も眼に見えてすゝみ、體の目方も一週間毎位に百匁以上增して行つた。彼は再び元氣になつて、散歩をしたり、仕事の計劃をしたり、本を

讀んだりした。

併し十五日目に細君は一寸東京に歸らなければならなくなつた。一番末の子が風邪をひいたからであつた。

「もう俺の方は安心だから早く歸つてやれ。そして今度來る時はあれも一緒に連れて來い。子供がゐないとどうも寂しい。ふむ、可愛い奴等だ。」と彼は云つた。

「さうしますわ。でも貴方も未だお一人ではお湯の時や何か御不自由ですから歸つたら直ぐ代りに誰か女中を寄來しますわ。」と細君が云つた。

「それには及ばない。」と云ふ言葉が彼の口許迄出たが彼はそれを云はなかつた。そして「お前のいゝやうにするがいゝ。人手が足りなければ態々寄來すにも及ばないが。」と低い聲で云つた。

「いゝえ、誰か寄來しますわ。氣がゝりになりますから。」と細君は彼が待ち設けてゐた通りの事を云つた。

そして細君は東京に去つた。



「誰が來るか。」と彼は思つた。「豐か、春か、二人の中の何方かに違ひない。あれは春の方に氣に入つてゐる。しかし豐の方が役には立つ。豐が來ればいゝが。」

「春が來れば安全だ。しかしもし豐が來れば少し危險だ。溫泉、怠惰、淫蕩の三つは一致する。入湯は情慾を昂進させるものだ。俺は此處に來てからつゝしむ處ではなく、却つて又少しだらけ出してゐる。それにあの女があの女だ。來てくれるのは嬉しいが、少し怖ろしい。怖ろしいが、來てほしい。」

「何を又俺は考へてゐるのだ。」彼はかう思つて烏打帽を冠り、ステッキを取つて近所迄歩きに出かけた。快い闇夜であつた。「否、矢張り來ない方がいゝ。どうかあれが夢か何かの會圖をうけて豐を寄來さないやうにして呉れゝばいゝが。」併し闇の中を歩く彼は何時となく公浴場のわきを歩いてゐた。その公浴場の中は外からも見えるのであつた。

「何處迄俺は見共ない下等な色魔なんだ。こんな處を人が見たら何と云ふだらう。嚴肅が堪へられないんでも何でもない。全で俺には性慾以外に何物もなくな

つてゐるやうだ。」

彼は本當に恥しくなつた。そして旅館の室に歸つた。それから濃い茶を一杯飲んで本を擴げた。「此生活はいけない。どうにかしなければ俺は破滅だ。」しかし其處に現はれるものは文字ではなくして豐の顏であつた。キョトンとした眼であつた。足であつた。

凡ての肉慾はその嗜慾を充たす處迄行かなくては滿足しないものである。とは云へ此樣に「妻以外の女によつて」その嗜慾を滿足させ度がつてゐた彼には其方法として何も女中に手を延ばす必要は素よりないのである。彼にはいくらも他に道があつた。が、病人と認められ、且つ謹嚴な人物として認められて來た彼にはそんなにして遊び度いと云ふ程の積極的な望みも勇氣もなかつた。彼は此豐との秘密な關係に依つて滿足しやうと思つてゐた。又滿足してゐたのである。

「第三者から見たら俺は矢張り癌であつた方がよかつたかも知れない。こんなにして生きてゐれば俺は碌な事はし相もない。罪を作る事ばか出來相もない。」併し



かう思ひ乍ら一方では萬一豐と關係した曉には、そして彼女の腹に子でも出來た時はどうしたらよいかと考えてゐた。家庭の幸福、平和、凡ての事は破滅になつて了ふ。そして恐ろしい運命は更により恐ろしい運命を產むであらう。——しかしふと、內藤と云ふ執事の事が頭に浮んだ。「もし分つたらあの執事の過ちに歸せて了ふか。あれは俺に困つてゐる親を助けられたと云ふ恩を感じてゐる。が、彼奴は含獨身でゐる。そして欲には眼のない奴らしい。もし豐の方から引つかけたと云ふ事にすれば彼奴にそんな過ちがあらうと云ふ事は誰にも考え得ない事ぢやない。奉公人共の間には隨分有り勝ちな事だから。「成る程さう云はれて見れば、あの豐なら其位の事はやり兼ねない。」と人は思ふだらう。俺は事に依つたらあれに打ちあけて金をやり、責めの名を負つて貰ふ事も出來ない事はあるまい。「お易い御用だ。」位に彼奴は云つて簡單に引きうけ相な氣もする。蟲のよ過ぎる話だ。しかしさうすれば男の方は濟む。然し女の方は？どうして口止めをしたらよいか？……」が、此處迄考えて來ると流石に彼は自分の惡魔的な考えを續けるのがい

やになつて、それを打擲らうとするやうに頭を振つて「あゝあ」と云つた。

「否、女の方からアクティーヴに出ると云ふ事は決してない事だ。」と彼は思つた。「女が心を弛めるのは男の方で意識的にか、或は無意識にか、それを誘惑し、そゝのかした場合に限るので、男が全くそれを歡迎せず、牽きつけない時猶ほアクティーヴに出るやうな破廉恥な勇氣が大抵の女にあるものぢやない。たとへ先きに情慾を起すものが女である場合にも罪は大抵男の意志次第のものだ。女にその咎を被せるのは間違つてゐる。」

翌日になつても不安は去らなかつた。そして落ちついて讀書も出來ない程不安を感じると云ふ事の爲めに彼は一層不安であつた。豐が來るか春が來るかに依つて自分と自分の一家族の運命が決せられるやうな氣がした。併しその爲めに豐の運命や、或は又それによつて出來るかも知れない不幸な私生兒や、その他のものの運命も亦決せられるかも知れないと云ふ事については餘り考えなかつた。彼は怖るべきものは自分であると思つてゐた。併し實際は彼にとつて一番怖ろしかつ



た者は妻であつた。もし此犯罪が知れた時、妻がそれに依つて感じるであらうこの上ない屈辱の怒りであつた。悲しみであつた。そしてそれによつて凡ての信用と、その上に礎かれてゐる一切の幸福と平和とが「蹴殺」されて了ふ事であつた。かうして一人離れてゐて見ると彼には自分の持つてゐる幸福が如何に自分の身には過ぎて大きなものであり、獲難い寶であるかゞ本當に分つたやうに思はれて、それを自分の過ちによつて失ふと云ふことは考えた丈けでも怖ろしい事であり、愚劣な事でもあり、「罰當り」な事であるといふ事も彼は感じないではなかつた。そして此恐怖の故に彼は自分が怖ろしかつたのである。豐に逢ふ事が怖ろしかつたのである。自分として此可能な犯罪それ自身の爲めに自分が怖ろしいと云ふよりも、犯罪の結果を怖れる爲めに自分が怖ろしかつた。豐が來る時が怖ろしかつた。そのくせその怖ろしい豐か來てくれる事を望んでゐるのである。望んでゐるからこそ氣味が惡くて落ちつかないのである。來るものが豐でなくて春であつたら自分が如何に失望するかと云ふ事も知つてゐるのである。

「なに、これも亦例の邪意識だ。自惰落な邪意識が閑に任せてする忘想だ。」彼はかう思はうとしても思ふ事が出來なかつた。

「しかしもし豐が來た場合には案外な結果が見えざる秩序によつて其處に起るであらう。」又こんな氣がした。「之は皆豐がゐないから考える事で、豐が來て了つたらその瞬間の自然の印象でそんな事が到底不可能な事である事が直ちに俺に分るであらう。實際其人に會つて見た時の感じは會はずに一人で考へてゐる時の感じとは全く違ふものだ。其時の具體的な感じ、即ち可哀想な感じとか、凡ての人間と云ふものが普ねく自然から與へられてゐる犯すべからざる感じとか、遠慮とか、其他の實際上の感じが自分を此惡意から救つて呉れるであらう。もしさうなら其爲めにも却つて春ではなく、豐自身が來て呉れた方がいゝ。さうしたら俺も安心するだらう。自分乍ら下らない餘計な心配をしてゐたものだと思ふであらう。」——彼はかうも思つた。「多分明日あたり來るだらう。」

しかし翌日の夕方になると彼は又一人でゐる事の爲めに落ちつかなくて表へ出



た。「一人でゐるからいけないのだ。こんな時こそ誰か友達でもゐてくれるといゝのだが。」かう思ひ乍らぶらぐ〜歩いてゐる中に足はおのづと豐が來る筈の道の方に向つた。で、彼は方向を轉じて近所の寺へ行つた。そして其處の薄暗い木蔭けの石に腰をかけて暫く休んだ。靜かな慰めるやうな秋の日光が樹木の間に射し込んで、黄ばんだ枯れ葉が沈默の内にハラ〳〵と落ちてゐた。其處は彼が小さい時に父や母に連れられて來た處であつた。とり止めもないいろ〳〵の寂しい思ひ出が亂雜に彼の頭に浮んだ。子供の時の幸福な生活や、歐羅巴に行く時父が船の上で彼に別れの握手をした時の顔や、A——の事や、獨逸に殘して來た子供の事や、華やかな結婚の夜の有り樣や、子供等の可愛い顔や、父が死ぬ前に何かの暗示で彼に殘した注意の言葉や、病氣の折りの陰慘な心持ちなぞが。

彼は其處にゐる事が寂しかつたが、態と自分を寂しい目に逢はせやうとするかの樣に動かなかつた。急に彼は過去が自分を亡ぼすのだと云ふ氣がした。自分があの遊び仲間と交はらなかつたら自分はA——を知らなかつたらう。A——が死

なゝかつたら自分はあんなに酒を飲み過ぎる癖をつけはしなかつたらう。あんなに不養生をしなかつたら自分は體を惡くしてこんなひどい神經衰弱に罹つた結果慘めになつて了ふ事もなかつたらう。が、そのあらゆる愚かにも拘はらず彼には「過去」は懷しく、捨て難い寶であつた。彼には人生と云ふものは寂しいものではあつたけれど、その寂しさの中に云ふに云はれない甘い味があつた。彼は世間や、或る種の個人に對しては隨分傲慢の譏りをうけたけれど、人生や運命に對しては實に、ハンブルで、自分の身の程をよく知り、「俺は何も知らない運のいゝ寄生蟲だ。併し此居候の俺にも特に下されてゐる自分の仕事はあるんだ。」と毎も云つてゐた。人生が目的を持つたものであると云ふ事は彼には太陽の光りのやうに明白過ぎる事實であつた。そして此事實を彼に敎へたものはいろいろな場合に於ける善良な涙であつた。此優しい涙の力には何者も、知何なる疑ひも抵抗する事が出來なかつた。そして彼は此明白な目的あるが故の人間生活の悲哀や、苦惱や、感謝や、美しい幸福の味を知つてゐた。「死んでもあの味は忘れられないだらう。あの



有り難い幾瞬間の味は。」と彼は云つてゐた。彼は道德家ではなかつたけれど、彼の內には子供の時から「善」に對する本能的な要求があり、正義を愛する情熱があり、「幸福に對する努力」を喜ぶ健全な意志があつた。併し彼れが病氣をしてから其健全な生活力を失ひ、精神の力がメツキリ衰へるが否や、一切の運命と生命とがグレ出して來た。精神が衰へた爲めに肉體が眼立つて來て、人の同情につけ込んでいろ〳〵の蟲のいゝ我儘を云ひ出した。彼は前よりも一層甘いものを食ひ度がり、贅澤をしたがつた。そして凡ての者に素直に幸福を望む事が出來ないエゴイストになり、何に對してもヘンに天探女な、疑ひ深い、僻眼を以て見るやうになつた爲めに彼は自分が次第に幸福や、運命や、他人から見離されて行くやうな孤獨を感じた。生れたと云ふ事はそのいろいろな辛い悲劇や、寂しさにも拘はらず畢竟彼には喜びでもあり、感謝でもあつたのだが、弱い、無能な自分は不幸にもそれを浪費して了まひ、飽氣ないものにして了つた。(以前には無能なのではない、無爲なのだと思つてゐたが、近頃では次第に無爲ではなく、無能力なのだ

と思はれて來た。)他人と萬物は皆生長して、それ〴〵の希望に向ひつゝ仕事をなし、幸福に生き甲斐を感じてゐるのに自分にはそれがなく、懶い退歩がある許りである。「而もその事を本當に淋しがりもしない。信じられないやうな事であるが、元々本當ではなかつたのだから別に不思議はないのだ。」こんな風に彼は思つた。

「誰かゞ俺を思ひきり辱しめて呉れゝばいゝ。そしたら俺は奮起して「なあに、實はそれも嘘なんだ。俺はそんな人間ぢやないんだ。」と叫ぶかも知れない。尤も俺が今死んだら一生懸命に俺の仕事を無視しやうとして、「君が文學をやらないのは惜しいもんだ。」なぞと云つた奴等も内心「惜しい事をした」とは思ふだらう。だがそんな子供らしい痴(たわ)けが何になるんだ。要するに俺は普通の人間なんだ。凡人なのだ。然し俺の子には天才が生れるだらう?そして俺に依つては生きられなかつた俺の志は俺の息子に依つて本當に實現されるかも知れない。それも夢か?が、要するに俺の前に空漠の中に欠呻をして待つてゐる「死」が凡てを解決するだらう。其解決の中に於てはわが子も他人もない。一切が「私」から解放されるだらう。繼ぐべき者が繼げばよい。命ぜられた者が起つであらう。死は凡てを平らかにし、人間の一時的な不細工の上を平等な苔を以て被ふだらう。凡てが畢竟同じ事になる。そして結局進むべき方向へ進む。只進めばよい。が、俺は死ぬ。飽氣ない生涯だ。とも角も親父はよく俺を見拔いてゐた。「彼女」も見拔いてゐた。俺には貞節が不可能だと云ふ事を。が、俺は自墮落に麻痺してゐる。精神がゼロになつてゐるのだから今更何も感じる事もない。何もかも知つてはゐるが、只知つてゐると云ふ丈けで、どうする根氣も、意力もない。全くの痴(たわ)け。覺めながら鼾をかき、死に乍ら存らへてゐる。しかも俺は未だ生きて行くのだ。」

しかし自分の血の氣のない指の爪を見、茫々と髭の生へた頬を撫でると急にたまらく寂しくなつて泣き度いやうな氣持ちになつた。「だが今日は殊にひどいのだ。全く疲れ切つて馬鹿になつてゐるのだ。俺はこんなぢやない筈だ。餘り考えまい。――」かう思つて彼は起ち上つた。

## 九

歸つて來て見ると豐は廊下に微笑むでゐた。そして片手で樟子につかまり乍ら膝を突いてお辭儀をした。

「來たね。」彼は何氣ない體でかう云つて、水仙の香ひが漾つてゐる室に上り乍ら自分が存外平氣なのに自ら驚いた。そして自分が如何にその簡單な挨拶の中に彼女に媚びた懇ろらしい調子を含ませてゐたかに氣がついた。併し彼女がお辭儀をした時その脊中の圓るみを見て「此奴は肥つてゐるな」と思つた事は忘れて了つた。そして帽子を放つて、いきなり其處へ倒れて横になつた。

「お加減がお悪くはムいませんか。」と豐は云つた。

「眼が淫んでゐるだらう。歩き過ぎたので疲れた。藥を持つて來てくれ。」と彼は云つた。

「俺は今どう云ふ印象を此女からうけたつけ？それを吟味するのだつたに。」と



彼は思つた。「否、別に新しい感じはなかつた。俺はもうそんな新鮮な感じを何物からも受ける事は出來ないんだ。之から俺は此奴をどうにでもする事が出來るんだな。

かう思ふと彼は少し氣味が悪くなつて眉を顰めたが、その不安な意識には何處か快い處があつた。「悪魔奴が喜んでゐる。だがあれは疑ひ深いくせに何だつて一體俺をこんなに信用してゐるのだらう。」と彼は又妻の事を思つて、その信用に對して我身を恥ぢずにはゐられなかつた。「勿體ない話だ。此俺にそんな貴い信用なぞを。あれは天使だ。」

夕食の時彼はしかし自分が未だ何人に對してもある表面上の嚴格を維持してゐられると云ふ自分の癖を自覺したので、自分を試めすかのやうに豐にいろ〳〵質問した。子供等はどうしてゐるかとか、妻は何時來ると云つてゐたかとか、言附けはなかつたかとかと。そして實際その質問の調子が嚴格であることを意識していくらか安心した。「此表面の嚴格と云ふ殻を破ると云ふ事は俺には存外六ケしい

事だ。此殼が、此假面が、俺を惰性的に救つてくれるかも知れない」と彼は思つた。

彼は大分頭がよくなつて來た。そして自分にも自分を或る程度迄抑制する事は出來る、抑制と云ふ事は意識の持ち方一つでさう六ケしいものぢやないと思つた。「が、さうは云つてゐてもこれとかうして幾日か一緒にゐる中にはどんなむら氣が俺に起つて來るかそれは分らない。何でも早く豐を東京に歸して妻を呼び寄せる事が必要だ。情けない惡戯つ子の自分には妻の監督が必要である」事を思つて手紙を妻に宛てゝ書いた。今夕豐が着いた事、自分の容態の渉々しくない事、子供はどうだと云ふ事、それから學校の方は二週間や其處ら休ませてもよいから一日も早く彼女が末の子を連れて此方に來るのがよいと云ふ事なぞを書いた。「此生活は怖ろしく、いけない。お前がゐて呉れないと困る。」彼は終りにかう書いたが勿論消して了つた。

何でも出來る丈け要心して豐に近づかないやうに、彼女を自分から遠去けておくよりない。そして危險な機會を作らない事だ。そして用事以外には口もきかない事だ。——彼は自分にかう云つた。

しかし彼女が彼の床を敷き、そして彼が床に就いた時、彼は彼女が次の室に寢てゐる事を意識せずにはゐられなかつた。「何故俺はこんな意識に許り囚はれるのだ。意識するのは止めやう。拘泥し過ぎる事は却つて誘惑をより強くする丈けの事だ。」と思つた。

彼はかう云ふ時の方便として意識の轉換を試みた。此「意識の轉換」は彼には情慾を追ひのける手段として無理押しつけな克己よりも常に有效であつたのである。が、彼は何時でも此方法によつて一旦情慾を遠去け、「もう大丈夫だ」と安心した瞬間によく無造作にその敵によつてだし拔かれて了ふのであつた。で、此時も彼は漸く彼女の事は忘れたと思つた後から直ぐ「あれはもう俺の心を見拔いてゐるに違ひない。」とか「あれが先刻始めて俺に挨拶した時微笑んだのは何の心算りだつたのか。」とか、なぞと考えてゐた。彼は咳をするのも氣になつた。咳が彼女

に「俺は未だ起きてゐるのだぞ。お前を待つ爲めに眠れないのだ。」と云ふ會圖に聞こえはしないかと氣遣ふ爲めに。咳によつて見拔かれ相な氣がする爲めに。しかもさう思ひつゝも彼は切りに咳をした。彼女に「見拔かせる」と云ふ事を却つて樂しむでゐるかのやうに。

彼は手紙を妻に出して了つた事は餘計な事だつたと思つた後悔した。「併しもう仕方がない。せめてあれが來る迄の間に樂しめる丈け樂しむでおかう。」彼の中で或る者がかう囁いてゐた。彼は床の中で寢返りをうつた。

## 一〇

彼は彼女に近寄るまい、危險な機會を作るまいと自分に云つておき乍ら事實では出來る丈け彼女に近寄る事を求めてゐた。何か彼女を呼ぶ事はないかと思つて、煙草盆の火を幾度も替へさせたり、藥を持つて來させたり、手紙は來てゐないか帳場へ行つて訊いて來させたり、爪を切るから鋏を持つて來て呉れと賴んだり、風



呂の加減を見て來てくれと云つたりした。「あいつはたしかに此處へ來てから自家にゐた時よりはずつとめかしてゐる。あの白粉の濃くなつた事はどうだ。あのえもんの拔き出し方はどうだ。いや、實際あいつは綺麗になつた。とに角女中にしては珍らしく好い女だ。」かう云ふ風に彼は自分の全意識が益々彼女に集中しつゝある事、囚はれまいとすればする程囚はれて了ふ事を感じた。そして又も怖るべき「悔ひの闇」に到る旨目な迷路にずるゞ〳〵踏み込んで了ふ程だらしのない自分は其慾望を遂げて了ふ迄は本當に事の是非を分別したり、怖れたり、自分を抑えたりする事は出來ないであらうと云ふ事を感じた。「分別はあるんだ。併しそんなものが此慾望の前に何になるんだ。世間一般の男を見ろ。俺丈けに有德な男がどれ丈けゐる？。」こんな事もわざ〳〵考えて見た。

或る時彼は机に向つてゐると自分の背ろに來て着物を疊んでゐる彼女が氣になつてならなくなつた。そして「オイ」と我れ知らず呼んで、彼女の方を向ひた。「どうせもう何もかも分つて了つてゐるんだ。」と彼は思つた。彼の顏は其瞬間

赭かつたが、直ぐ蒼くなつた。そして其眼は餌を覗ふ獸の眼のやうに光つてゐた。

彼女が此方を振り返へつた時そのキョトンとした丸い眼には驚愕と不安とが見えた。「此奴は驚いてゐるな。怖わがつてゐるな。俺と同じ事を考えてゐるから。」と彼は思つて「まあ落ちつかう」と思つた。併し豐が何の用かと訊いた時彼は「風呂へ行く。加減を見て來て呉れ。」と思ひもかけない返事をして了つた。「又逃がして了つた」と云ふ惜しさと、「まあよかつた、」と云ふ安心とが衝突する波のやうに彼の心の中にもつれて動悸が音のやうに胸に響くのを彼は感じた。併し「よかつた」と云ふ安心の方が遂に克つて彼は風呂から上るとやがて自分を倒すやうに床に入つた。「全く獸物の生活だ。」彼は横になり乍らかう呟いた。「かうして結局俺は罪を犯して了ふだらう。俺には此盲目なリズムを轉換する力はない。意志もない。」そして苦し相に溜息を吐いた。

翌日の午後彼はふと豐が「今風呂に入つてゐるのだな。」と考えると又飛んでもないむら氣に打ち克たれて、我れとも知らず引つたくるやうにタホルを取つてそ



の湯殿へ行つた。その湯殿は彼等の專有になつてゐたのである。早鐘のやうな動悸が彼の頭と胸の中に轟いて、一切が昏くなるやうな眩暈を感じながら。

「オ、、お前は未だ入つてゐたのか。」と彼は云つて慌てゝ戸を締めた。そして其ピシャンと云ふ高い音によつて彼は自分が何をして了つたかを意識すると穴にもぐり度いやうな悔恨に充たされて何時どうして自分の室に戻つて來たのかを知らなかつた。

彼は眞蒼な顔をして室に歸つて來るといきなり机の上にあつた鐵のケサンを取つて小さな瘤が出來た程自分の頭を打つた。そして我身の處置に窮し切つたやうに其處へぶつ倒れて唸いた。

「全くの低能だ。本物の白痴だ。」と彼は云つた。

實際の處彼はもう道德的に苦しむやうな力や良心なぞは持つてゐないやうに見えた。むしろやり方が如何にも馬鹿馬鹿しかつた。マヅかつたと思ふ意識と「恐ろしい」事をする時に凡ての人間が本能的に感じる惑亂した不安との爲に一番苦

しむでゐた。しかしそれも數分間の事で、やがて「もうこれで萬事は畢りだ。何もかも露骨になつて了つた。」と思ふとその自棄――それは異樣な、恥を忘れた、捨て鉢な處から來る一種の快味を持つたものであつた。――からこんな氣が更に起つて來た。「よし、い體今夜俺が脊中を流させにあれを呼んだ時に。何と云ふ美しだ。髪の毛だ。甘つたるい眉だ。」

最後の一歩を踏み越えて了つた彼の中に殘忍な興味が湧いてゐた。そして「思ひを遂げずには止まぬ」闇を抑えやうとはせずに、却つてその闇に自分を任せ、我身を支配させる事に快感を感じてゐた。「破れかぶれだ。やつて了へ。」彼はかう思ひ乍ら胸を打ち顫はせて再び手拭を取つて起ち上つた。そして廊下迄行きかけた時豐が階下から上つて來るのに氣がついた。と、彼は我れ知らずふと傍の便所へ入つて了つた。そして「何の事だ。」と思つた。

「おい、俺の見かけはどうだ。東京にゐた時と。」と彼は夜食の後で云つた。



「何ですか少しお窶れになつたやうでムいますね。」と彼女は云つた。

「もう直き死に相に見えるかね。」

「まあ。旦那樣。いやな事被仰ります。」

「脊中が痛い。少し擦すつてくれないか。」彼はかう云つて床に入つた。

「豐。」十五分許り苦しい沈默がつゞいた後でかう彼は口を切つた。

「ハイ。」

「お前はいくつだね。」

「――四になります。」

「二十四か。」――いゝ齡頃ナだと思ひながら「お前には御亭主があつたのだつたかナ。」

「一昨年死なれました。」

「で、今は別に約束のある男もないのか。」彼はこんな事を訊いて何になると思ひ乍ら云つた。

「まあ旦那様、どうしてそんな事を……」
「ぢやあるんだナ。」
「いゝえ、ムいません。」
「本當か。——お前は此處へ來る時どんな氣がした。」
「嬉しふムいました。」
「何故。——怖ろしくはなかつたか。」
「何がでムいます?」
かう云つた時彼女の聲は或る顫へを帶び、その手は一時運動を中止した。其事が彼にふと豐に對する同情を起させた。「そんな事をするのは可哀相だ、殘酷だ。」と思つた。彼の内で殺されかゝつてゐる或者が幽かに苦しむで、彼れは闇の中に何者かゞ顔に掌をあてゝ泣いてゐるのを見た。突然彼は痙攣的に擦(さす)られてゐる脚を引込まして「水を持つて來てくれ」と云つた。
併し茶碗を持つて來た彼女が「もう少しおさすり致しませうか」と訊いた時彼



は「うん、ではもう少し」と云つた。
「豐——俺は嬉しかつたよ。」彼は暫くして又云つた。
「ハイ?」
「恐ろしいか。俺はお前が好きなんだよ……。」
かう云つて彼は彼女の熱い大きな手を握つた。
「これで俺の生命は終つたのだ。これが俺の惡魔に見込まれた生命の最後の活動だつたのだ。」
彼は罪を犯した後でふとこんな氣がした。そして自分の壽命のもう短い事を感じた。
「用心しろよ。旅屋の女共は疑い深いからな。」
その翌々日の朝彼は豐にかう云つた。其時彼の眼には冷酷な光りはなかつた。
一方「豐がゐなかつたら、或は豐が來なかつたら」とも思はないではなかつたが、

不思議にもさう思ふ事が却つて彼の内に彼女に對する「いじらしい」と云ふ愛慾——それは幾分複雜な形をとつた情慾を伴つてはゐるけれど、情慾から愛に移る微妙な徑程の中に生れるもの——を起させてゐた。

こんな夢を見た。家中の者が一つ室に集つてゐる。と一同は申し合はせたやうに彼と豐とを其處に殘して一人々々室を出て行つた。「分つて了つたな。」と彼は思ひ乍らあはてゝ自分も室を出た。すると豐が彼を抑えて泣き乍ら其後について來た。二人は那須野の附近のやうな原へ出た。豐は彼に死をすゝめた。彼は默つて歩いた。疲れたので、ある石に凭りかゝつて休んだ。すると其大きな石がズルッと辷つて轉がり始めた。ふと見ると其處は高い崖淵で遙か下の方に妻と子供等とが遊んでゐた。石が其上に轉がり落ちて行く。彼が驚き慌てゝ叫ばうとすると豐がいきなり彼の口を抑えて了つた。それは非常な力で、彼には振り離す事が出來なかつた。石が妻と子供等の頭上に次第に接近して行く處で眼がさめた。



彼には妻の來る事が恐怖であつたが、それから三日の後に妻が末の女の子を連れて笑ひ乍ら前の中庭を歩いて來た時彼は案外自分が平氣でゐられる事、怖ろしく感じない事、豐との關係は妻に氣取られない樣に元との儘で自然に振舞へるであらうと云ふ事を感じた。そしてわりに安心した。そして自分が其樣に罪があばかれない限り平氣でゐられる事の圖々しさと無良心の爲めに少し自分に驚いた。

實際自分の犯して了つた行爲其物についての後悔は其時は不思議な程來なかつた。しかし何時かもしそれが現はれたらと云ふ恐怖が時々彼を眞蒼にする程戰慄せしめるのであつた。そして彼にもし後悔があつたならばその第一の原因は此恐怖であつた。

## 一一

彼等は東京に歸つた。一切の事は秘密のまゝでつゞいた。「まあ、有り難い事だ。

どうか永久にあの事があれ丈けの事で濟んで了つて呉れゝばいゝが。」と彼は思つてゐた。

ある晩客が歸つた後で豐が茶盆を片付けに彼の室に來た時彼は「體はどうだ」と後ろを向き乍ら低い聲で訊いた。

「旦那樣出來て了ひました。」と豐は云つた。其聲はおど〳〵と顫へてゐた。

「何出來た？」彼は思はずかう云つて彼女の方をふり向いた。「此奴俺に嘘をついてゆすする氣なのか」と一寸思つたのだ。併し彼女の眼に現はれてゐる不安と、此事の爲めに彼が急に彼女を憎み出しはしないかと云ふ恐怖と、憂慮とを認めた時、急に後悔と、恐怖と、豐に對する憐憫とが彼の内に起つた。彼の顔色は變つた。

「確かにさうか。」と彼は訊いた。

「先月も今月も月經がムいません。」

しかし其時子供が彼に「御機嫌よう」を云ひに來たので豐は去つた。

「どんな事があつても之丈けには絶對に秘密にしなくてはならない。」と彼は思つた。「どうも本當らしい。」



「まあ、貴方はどうしてそんなに默つて許りゐらつしやるのでせう。」と或時夫人が彼に云つた。

「工合が渉々しくないからだよ。頭がヘンに重いのでロを利くのが臆劫なのだ。」と彼は云つた。

それでも子供がどうかすると彼を笑はせたけれど、妻子の前にゐると云ふ事が彼にとつては一種の苦痛であり、彼等が一緒にゐる時があればそれは彼が努めて其處にゐるのだと云ふ事は妻には何となく分つてゐた。で、それが何の爲めであらうと彼女は考えてゐた。

「あれは俺を少し疑つてゐるらしい。併し遠慮してゐるのだ。丁度動物が自分に危害を加へるものゝ接近を本能的に直覺するのと同樣に女には怖ろしい感覺があつて、自分の運命の不安を直ぐ感づくんだ。」かう彼は思つた。

尤も元來が、(彼のある友が彼を評した處に依ると)「快樂に對して敏感であるわ

りに苦痛に對しては鈍感であつた呑氣者」の彼は道德的な事でさう苦しむ人間ぢやなかつた。而もそれは彼が正しい生活をしてゐるからと云ふ理由には些しもならなかつたのであるが、彼自身はよくかう云つてゐた。「皆苦勞の發明ばかりして得意になつてゐる。樂しみの發明をする者は一人もない。」と。併し此樣な「非道な」事をして了つた今の場合、矢張り時偶まにしか心の痛みを感ぜず、多くの時間は殆んど全で其事を忘れてゐられる自分の呑氣さには流石に「樂天家」の彼も內心少し恥しくて自分に愛想をつかすべき義務を感ぜずにはゐられなかつた。

併し氣持はいろ〳〵であつた。自分一人でゐる時は自分の罪を何でもない事のやうに思つて、「姦淫、それが何だ、」と云ふやうな洒々とした顏をしてゐられるが、ふとした氣持ちの時に、妻や子供を見ると、此の地上に住むには適しない程彼等が淨潔で、可哀相な程美しくて、神々しく思はれ、彼等の前へ出るとその淸い光りによつて自分の醜い罪が照らし出され、彼等と自分との反照によつて自分の姿が如何にもどす黑く、不潔で、穢なく感ぜられて、只自分の罪のあばかれる事の



みを怖れてゐる事が餘りの「恥知らず」に思はれないわけには行かなかつた。豐を見れば彼女は急に虐げられたやうな姿に變つてゐる。その表情は每も恐れと、憂ひとに充ちてゐる。そして彼女は何故か近頃殊の外屢々妻から小言を喰つてゐる。その姿を見たりすると自分が善き主人であり、善き良人であり、善き父であるやうな何喰はぬ顏をして厚かましく彼等の間に生活し、其幸福の中心として一同から信賴され、尊重されてゐると云ふ事がじり〳〵と彼の胸に苦痛を喰ひ込ませずには濟まなかつた。

なるべくならば妻と寢床を並べると云ふ事も彼はしたくなかつた。妻が寂しさの爲めに彼に抱擁を求め、接吻を求める時、そしてそれを却けて妻の疑ひを增す事を怖れて白々しくそれを應諾する時、「もしこれが本當の事を知つたらどうであらう。」と思ふと流石に彼も「裏切られたる幸福」の重荷、否「生存してゐる事」の重荷に胸を押し潰ぶされるやうな罰を感じて、泣き度いやうな、穴にもぐり度いやうな氣持ちになるのであつた。「せめて妻と同衾する事は止めやう。體の爲めと

云ふ名義で。俺はあれ迄を穢かし度くない。」と彼は思つた。そして何かの口實を設けては二階に一人で寢るやうにした。

「否。彼等は幸福ぢやない。彼等は無意識に感づいてゐるのだ。自分等の幸福がくずされた事を。」と彼は思つた。「彼等はそれを俺が病氣の故だと思つてゐる。しかしあれ等は悲しむでゐる。俺があれ等を凡て不幸にして了つた事をあれ等の運命は感づいてゐるのだ。」

彼は毎夜のやうに惡夢におそはれた。その一つにこんなのがあつた。

――妻が豐に水を一杯持つて來てくれと云つた。豐がそれを持つて來ると妻はそれを彼に飲ませる眞似をして「いゝかい？」と豐に訊いた。そしてヒステリカルに笑ひ乍らその水を窓から捨てゝ了つて自分で新しくそれに水を注いで飲まうとする處へ上の娘が飛んで來て彼女を抑えた。そして「阿母樣、それは毒よ！毒よ！」と叫び乍ら矢庭にそのコップをとつていやと云ふ程豐の顏にたゝきつけた。豐は怖ろしい血みどろな顏になつてそこへ泣き伏した。と、その哀れな樣を見て



妻も娘も泣き出した。他の子供達も其處へ來て一緒に泣き出した。すると凡ての者が號哭するやうな響きが、音響と云ふ共通點によつて彼を鳴動しつゝある山の麓に移した。恐ろしく大きな兀山が前に聳えて鳴つてゐる。彼は仲間と一列になつて麓を歩いてゐる。一番前にはA――が歩いてゐる。其次ぎには彼の父が。それから母。四番目に彼が、彼の後には妻が、それから順々に子供等が。「死ぬる順番に歩いてゐるのだナ」と彼は思つた。ふと氣がつくと四邊の一切の草木が皆雪のやうに眞白になつてゐる。枝も白く、葉も白い。どうしたのだと彼が訊くと、地球が齡をとつて了つたので地球の毛が皆白くなつたのだと父が答へた。山の頂きには筒のやうなものが立つてゐる。それは地球に最後の瞬間が來た時上げるべき赤い烽火の筒である。あの赤い烽火が上つたら大變だと彼等はめい〳〵に思ひ乍ら戰々兢々として無言のまゝ歩いてゐる。すると俄かに山鳴りがはげしくなつて、その赤い烽火はあげられた。「あゝ！」と皆は叫んだ。「赤だ！赤だ！」と、山は非常な大音響と共に全世界が滅亡すべき最後の大噴火を始め出した。破裂である。

空は見る〳〵黑煙の爲めに暗憺とかき曇つて天地は昏くなつた。そして全世界の人類とあらゆる生物とが絶望しきつた悲鳴、今迄人類が嘗て聞いた事もなければ、想像した事もない恐ろしい、情けない泣き號びが一齊に天の果て迄も屆くかのやうに空間に轟き渡つた。「もう之れ迄だ」と彼は思ひ乍ら氣違ひのやうに妻と子供との方に駈け寄らうとした。妻と子供が遠くで彼を呼んでゐる。しかし其方に全力を出して近寄らうとした時彼は足を踏み外して谷底へ落ちた。そして動く事が出來なかつた。「俺は一人で此處で死ぬのかな、あれ等はどうしたかな」と思ふと彼は腹の底から情けなくなつて泣き出した。此時彼の内に起つた願ひは只出來る丈け多くの人と一緒に集つて死に度い。それが出來なければせめて一人の人間でも自分の傍にゐて、自分と抱き合つて死を伴にして呉れる事であつた。よしそれが自分の敵でも。しかし來る者は誰もなかつた。只一匹の犬が通りかゝつた。見るとそれは彼の飼犬のレオであつた。――レオとは昔ミユンヘンでA――が飼つてゐた犬の名である。レオはよく彼と彼女との散歩の伴をした彼等の「融解者」であつた。其想ひ出に因んで彼は此名を附けたのである。彼は一生懸命になつてレオを呼んだ。しかし犬も絶望と、恐怖と、悲しみとに一杯になつてゐるらしく、おびへ切つて、尾を縮込め、氣違ひのやうにワン〳〵吠へ狂ひ乍ら他の主人を探すやうに何處かへ行つて了つた。彼の胸と頭と全身の上には次第に白い灰が降り積もつて行く。聲を出す事も、身動きも出來ない。――

汗をビッショリかいて彼は眼を覺ました。それ以來彼は又妻や子供等と一室に寢る事にした。



## 二

或る夜おそく彼の室に再び豐が來た。

「旦那樣、妾はお暇を頂かうと思つて居ります。」と彼女が云つた。

「何故だ。まあ待て。」と彼が云つた。

「でも　はもう置いて頂くわけには參りません。」

「――だがお前は何故そんなにおど〳〵してゐるのだ。そんなにおびへるのは却つてよくない。」彼は「出て行かなくてもよい」と云はうとしたのだが、その代りにかう云つた。

其時誰かゞ來る氣配がしたので豐は退いた。彼が急いで本に眼を移すと其處へ妻が來た。

「貴方、今此處へ誰が來てゐましたの？」と妻が訊いた。

「豐だ。」と彼は云つて、此妻の異樣な質問によつて自分の胸がドシンと突かれた事を現はさないやうに全力を盡し乍らわざと妻の顏を見た。そして彼女の顏に恐ろしい疑惑の暗雲があるのを認めて危ふく取り亂しさうになつたが辛じて卷煙草をとつて火をつけた。

「貴方。」

「何だ。」

「妾はね、どうしてこんなに馬鹿なんでせう。」



「何がだ。」

「だつて妾はね、不幸許りを强ゐて漁つてゐなくちや生活出來ない人間なんですもの。何の爲めかつて云へば疑ひの爲めなのよ。自分でもその疑ひが口に出しても云へない程馬鹿々々しいものだつて事はよく知つてゐるのよ。そのくせどうしてもその疑ひを追ひ拂ふ事が出來ないのよ。」

「うむ。――」彼は煙を口から吐き出してふと横を向き乍ら云つた。「何をそんなに疑ふんだ。」

「妾が疑ふつて云へばどうせ貴方の愛ですわ。自分が本當に幸福かつて云ふ事ですわ。――」

「お前はそれを疑つてゐやしないぢやないか。」

「えゝ、疑つてゐやしませんわ。自分が幸福だつて事も、貴方の愛も。――」

「それならそれでいゝぢやないか。」

「えゝ、それでいゝわけなのね。しかしそれだから妾は馬鹿だつて云ふのよ。本

當は信じてゐるくせに矢つ張り妾には疑ひが起つて來るのですもの。」

「ふむ――」

「許して下さいよ。こんないゝ齡をしてゐて未だこんな子供らしい馬鹿な事を云ふ妾をね。ほんとに妾は何時迄こんな馬鹿な子供なのでせう。自分でも苦しむほど齒痒ゆいのですよ。それでゐて矢張り妾は何時も貴方にその疑ひの雲を晴らしゐて頂かないと不滿なのよ。だつてその疑ひの雲を晴らして呉れる事の出來る人は貴方丈けなんですもの。――」

「それやさうだ。」

「妾は男と云ふものに對して理想家である時代は通り越したつもりでゐたのです。けれど矢つ張り此事許りはね、妾の性分としてどうしても通り越す事は出來ないのですよ。」

「それは當り前だ。」

「どうして貴方はそんな素つ氣ない返事許りをなさるの？御免なさいよ。妾は自



分でも自分が餘り幸福に甘やかされ過ぎて增長して、分らずやの駄々つ子につなて了つた事はよく知つてゐるんです。そして未だにそんな子供らしい駄々を捏ねてゐられるのが自分の仕幸せなんだと云ふ事も充分知つてゐるのですよ。本當に妾はまあ何處まで幸福と云ふものに貪欲な人間なのでせう。妾はその貪欲の爲めに折角の自分の幸福迄を嬲り殺しにしてゐるのだと云ふ事も知つてゐるのです。

「何と云ふ妾は不幸な馬鹿者なんだらう」と妾は自分に愛想をつかしてゐるのです。それでゐて妾は矢つ張り甘へたいのですわ。駄々をこねてゐ度いのですわ。」

「それ丈けお前が知つてゐればそれでもう何も云ふ事はないぢやないか。つまりお前は幸福な身の上だからそんな事を思ふんだ。」

「貴方、怒らないで頂戴。妾は本當にこんな事は云ひ度くないんです。又云つてはならないんです。だから妾は隨分永い間怺らへて自分を抑えて來たんですわ。でも妾は――」

「どうしたんだ。」

「貴方、ヘンな事を云ふやうですけれどあの豐が身持ちになつてゐるんですよ。——」

「何、豐が？」と彼は「それがどうした」と云ふやうな顔をして云つた。「それは本當か。」

「えゝ、不幸な事にそれは本當らしいんです。妾はちやんと見てゐます。あれの人相の變り方までを。」

彼は意味あり氣に唸つた。顏から火が出相な氣がした。

「もしお前が云ふ通りなら……まあ、奉公人共の間には有り勝ちな事は有り勝ちな事だがな。」

「いくら有り勝ちな事だからつて濟ましてはおかれませんわ。——」

「それや無論小さな事ぢやないさ。それでお前は……」

「妾は始からあれの眼つきが氣に入らなかつたのですよ。あの男たらしのやうな、ふてぐしい眼つきのいやさと云つたらないのですものね。でも男はあゝ云ふ下



品な女を好くものですわ。——それで貴方はその對手を誰だとお思ひになつて？」

「さあ。——お前は感づいてゐるのか。」

「何しろ家には男と云へば貴方と直文（息子）の外にはあの執事の内藤丈ですからね。どうしても内藤だと思はなくちやなりませんわ。」

「内藤？そんなことはあるまい。彼奴がそんな事をし相には思へないがな。」

「本當に内藤らしくはありませんね。しかし内藤の外にはない筈ですわ。」

「しかし豐に夫があるならあれが一寸暇を貰つた時にでもいくらもそんな事は有り得るぢやないか。何も家にゐる者に限られたわけぢやない。或は情夫があるのかも知れない。」

「あれには夫はないんです。それに珍しくあれは此處の家に來てから未だ一度も暇をとつた事がないのですよ。」

「さうか。」

「妾の見當だとあれは今四月目位のお腹をしてゐますよ。」

「さうかね。えらいよく分るな。」

「だからつまり貴方が修善寺に行つてゐらしつた頃から孕み出したと云ふ見當になるのですよ。」

「ふーむ。それで俺を疑つてゐると云ふ譯なんだな、お前は。」彼は大膽で露骨である事が此場合最も有效であると考えたので、からかふやうな冷笑を口許に浮べながら、わざとかう云つた。

「まさか、そんな事思ひはしませんわ。」細君は顏を赭くして云つた。その赤面の中に彼はあり〳〵と彼女の自分に對する疑ひを認めた。併し「疑ひ」の爲めに却つて彼女はヒケ目になり、自分は强味を獲た事を自覺すると彼は少し安心した。

「もし貴方を疑つてゐたら豐なんぞを修善寺にやりはしませんわ。――」と細君は媚びるやうな併しその奥では眞劍に物を凝視する眼付きをして云つた。「きつと妾達が子供達丈けを家に置いて留守にした間の出來事ですよ。」

「もし本當なら困つたものだな。子供でも出來たらどうするのだらう。」と は



云つた。

「無論あれ等は夫婦にならなくちやなりませんわ。丁度内藤は獨身でゐるのですし。豐は働き手ですからさぞ役に立つ女房になるでせう。しかしあんなあばずれを女房に持つた男は禍ですわね。自業自得ですけれど。」

「しかしそれを干渉する譯には行かないだろう。自分等でなり度ければ夫婦にさせてやる迄で。」

「干渉しますわ。もしそれが事實なら、そんなだらしのない、無責任な事をさせておけるもんですか。いくら他人事でも子供が可哀相ぢやありませんか。妾はそんなふしだらは大嫌ひです。放つて見てはゐられませんわ。妾は内藤を呼んで檢べて見るつもりです。」細君はヒステリックにかう云つた。

「干渉は止せ！お前の干渉には惡意がある。」と夫が云つた。「どうしてその爲にあれ等や子供が幸福になる事が保證出來るんだ。」

「妾は只檢べて見るんですよ。無論其上でなくちやそんな事が出來るもんです

か。しかし之は只だらしなく成り行きに任せておいていゝ事ぢやありませんわ。主人として。」

彼は默つた。そして暫くして二人は別々に寢室へ行つた。細君は興奮してゐた。彼女は云はうと思つてゐた事を云はずに了つたのである。彼女は豐を修善寺にやつた晩怖ろしい惡夢を見た事や、夫が豐を氣に入つてゐるらしい事や、彼が修善寺から歸つて後彼等の間に豐がゐる場合には彼の話の調子に何處かこだわつてゐるやうな窮屈さが見えるやうな氣がする事や、自分で此「人格の高い」良人に對する賤しい疑ひに羞ぢてわざと豐を修善寺にやろうかとも思ひ、其實際の折には何かの忙しさにそんな事を忘れて氣輕にさつさと彼女を修善寺に立たせて了つた後で急に又「羞しい」心配が起つて來て後悔した事や、それらの凡てを何もかも良人にぶちまけ、そうして夫の膝に寄り伏して自分の賤しい疑ひの罪を泣いて謝まり、良人から叱られ乍ら安心させられ度かつたのである。彼女は良人の「浮氣」を疑つてゐた。然しその人〻爲りを信じてゐた。それで今此「怖ろしい」疑ひをわざ



と打ちあけて見る事に依つて彼に對する信賴を一層鞏固にしたかつたのである。」

しかし良人に會つて話してゐる中に其處迄粗野になる事が出來なくなつた事を覺つた時彼女は其押しつけられた無念を八ッ當りのやうに執事の内藤と豐とに向けたのである。事實彼女は豐の對手として内藤を疑ることが出來なかつたのであるが、ヒステリカルな不快から此二人を苛めて、態と彼等の意志に反して迄も二人を夫婦にすべく干渉してやらうと云ふ氣が起つたのである。良人は確かにその「犯人」である程賤しい人間ではない筈だが、とに角自分に疑ひがある以上さうして意地を張らし、良人に「空想的な復讐」をして見たかつたのである。如何にそれが馬鹿〳〵しい的を外れたものであつたにせよ、何となく蟲の好かない豐に對しては少くともさうせずにはゐられなかつたのである。彼女にはかう云ふ場合の我慢とか、抑制とかと云ふ事がどうしても出來なかつたのである。

一三

それでも彼女は此審問を實際に開始する事は延ばしてゐた。いゝ機會がなかつた故もある。直次郎はその翌々日那須野に行く事になつた。

「それがよござんすわ。貴方は此頃本當にお見かけが悪くつてよ。妾氣になりますわ。ゆつくり保養をしてゐらしつて下さい。」と細君が云つた。

「お前一緒に來てくれ」と彼は内藤に云つた。「地所の整理でお前に少し頼み度い用があるから。」

「貴方、内藤にあの事を貴方からそれとなく訊いて御覽なさいな。謎をかけるやうにして。」と細君が彼を玄關の方に送り乍ら云つた。

「あの事？あゝ、あの事か。うむ、いゝ折があつたら少し訊いて見てもいゝ。俺なら脅さないやうに柔かく話す事が出來るかも知れないからな。」

彼は内藤をつれて立つた。内藤は汽車の中で彼の顔に現はれてゐる「死相」を見て心配したが、併し默つてゐた。主人と下僕は殆んど口を利かなかつた。



「内藤、一寸來てくれ。」

翌日の朝彼は早く起きてかう云つて内藤を呼んだ。「圃へ行かう。」

それは四月の半ばで、一雨毎に一切の生物の芽を伸ばし、蕾をふくらませる春雨が降つた後の土は内からもり上る波のやうにもく〳〵として、なま〳〵しい力に充ち、新鮮な、甘い空氣には、蝶の樣に凡ての生命に祝福の接吻を與へ乍ら樂し氣に飛び廻る優しい「愛」が翻々と漾つてゐる樣に思はれて、只其快い空氣を呼吸した丈けで「生は讃美すべき哉。生きてゐる事は有り難い運命だ。働け！生きよ！吾々は此世に泣きに生れて來た者ではない。强く、幸に生きる爲に働きに生れたのである。」と云ふ感じを誰にでも起させるやうに見えた。

然し直次郎の落ち窪んだ小さい眼にはそれを見るからに忽ち涙がたまつた。自分丈けは「除け者」だと云ふ氣がするのに自然は何者をも除け者にしないと云ふ限りない慈愛が感ぜられる爲めであつた。彼は出來る丈け多く自分の體を此大氣に觸れさせやうとするかのやうに帽子を脱いで、然し天を仰ぐ事が氣が引けるや

うに下を向いてそろ〳〵と歩いた。彼は連夜の不眠と病氣との爲めに窶れてゐた。

「内藤。」と彼は二十分許り默つて歩いてゐた後で突然口を切り出した。それは何か容易ならぬ事を彼は云はうとしてゐると云ふ豫感を執事に與へた。

「内藤。俺は今日お前に意外な、飛んでもない事を云はなければならないのだ。實はお前に今度此處へ一緒に來て貰つたのはその爲めだつたのだ。」

「ハイ。左樣で。」執事は何の事か分らないので只おづ〳〵とかう答へた。

「まあ、心を落ちつけて聞いてゐて吳れ。俺はもう頭も體も疲れきつてゐる上に腐つて了つて、どうしたらよいのかさつぱり分らないのだ。どうせ俺の壽命ももう長い事はないに定まつてゐるがな。空空しい慰め事は云はないで吳れ。要事を話さう。」かう云つて彼は少し間をおいたが、やがて少し聲を高くして「俺はな、飛んでもない馬鹿な事をして了つたのだよ。怖ろしい事を。」と附け加へた。

「且那樣。それはまあどのやうな事で……」

「俺は一體生れつき自分を抑える力の到つて足りない男だつたのだが、病氣をして頭を腐らさせて了つてから一層自墮落なくせがついて、しだらのない人間になつて了つてな。——俺は自家の幸福や平和を蹂み躙るやうな事迄も、——そして取り返しのつかぬ愚な、いや、愚と云ふよりももつと惡い過ちだ、その過ち迄もうか〳〵犯して了ふやうな……いや、犯して了つたのだ。——」

「——。」

「何故愚と云ふよりもつと惡いかと云へば俺はそれを犯せばどう云ふ怖ろしい結果が起るかと云ふ事を豫め承知してゐ乍らずる〳〵それをして了つたからだ。」又間をおいて「かう云つてもお前には未だよく分るまいが、俺はそれをお前に打ちあけ度いのだ。お前は迷惑かも知れないが。」

「私の迷惑なんぞ構ひは致しませんが……」

「それでは云ふ。他でもない、俺はあの女中のお豐な、あの女が修善寺に來た時に、——あれに手をつけて了つたのだ。」かう云つて彼は「とう〳〵云つて了つた」と思ふ爲めに顔を赤くした。

「――」

勿論執事は主人の此思ひがけない急變した態度と、言葉とに一方ならず驚かされた。直次郎自身自分の此思ひ切つた態度の急變には驚いてゐた。あの傲慢な自分にどうしてこんな自己卑下が出來たのか不思議な氣がしてゐた。内藤を連れて汽車に乘り込んだ時、その間抜けな樣子や、下僕らしいコセコセした調子を見てゐるとどうしても輕蔑する心が起つてこんな者の前に自分の恥を洒らして、己れを卑しくすると云ふ事は到底自分には出來相もなく思はれたのであるが、今朝彼を連れて此原を歩いてゐる中に何となく彼と自分との間の差別感が除かれて來て彼が自分と同じく人間である事、「人間」としての權利に於て平等である事、自分の僕と云ふよりも同胞であると云ふやうな氣がして來た。そして實際の行ひに於て自分よりも優つてゐる彼を自分の下僕として只因襲的に卑しむでゐる事が如何にも恥かしい事に思はれて來た。自分より半歩許り後からついて歩く内藤と云ふものゝ「存在」は彼には一つの尊重すべき實在と感ぜられ、其「實在」と云ふ感じが或る力を以て彼の全身に感じられて來た。そして彼には此自然な、平等な力の前にハムブルである事が却つて氣持ちよく感じられて來たのであつた。それでも未だどうかすると「こんな奴に……」と云ふ氣がして來る。それでその氣持に打ち克たうとわざと自分を裏切るやうに此同胞の前に自分の恥を洒らす事が彼には異樣な道德的愉快と、興奮とを感じさせるのであつた。直次郎は續けた。



「お前には此事は意外に思はれるかも知れない。一寸信じ難い事かも知れない。併しそれはお前が俺を買ひ被つてゐる――否、買ひ被つてゐない迄も傷を見てゐるからなんだ。むしろ見せられてゐたと云つた方がいゝかも知れない。とに角思つてゐた通りの怖ろしい結果が來たのだ。いや、俺は多少承知はしてゐたものゝ、こんな大した事にはならずに、案外簡單に濟ます事が出來さうな氣がしてゐたんだ。さう思つてゐた事が猶ほ悪いには違ひない。むしろ當然かうなつた方が俺の爲めにはよかつたのだらう。何れにせよ、事實は俺が思つてゐたよりももつと怖ろしいものになつて來たのだ。」

「奥様が御承知になつたのでムいますか。――」

「否、未だ知つたわけぢやないが、俺を疑つてゐるのだ。併し俺を疑り切る事はあれにとつては餘りに怖ろし過ぎる事だ。だからあれはたとへいくら俺を疑つても俺をその犯人と定める事は能うしないのだ。――」

「併しどうして奥様に其お疑ひが起つたのでムいます。」

「豐が孕んでゐる事をあれは見たからだ。お前はそれを知つてゐるか。」

「はい、さう伺へば女共が何かそんな噂をしてゐるのを小耳に挾んだ事がムいます。さう云はれて見て成る程さうかな位ゐには思ひましたが、當てにはならないと思つて居りました。」

「呑氣な奴だな。」と直次郎は思つた。「もし女中の中の誰かにそんな事があれば其對手としては先づ内藤が最初の嫌疑をうけなければならないのに。そんな事は考えないんだ。」

「女中共はその對手を誰だと云つてゐる。」彼はかう訊いた。



「其處迄は聞きませんでした。しかしもしそれが本當なら私が先づ嫌疑をうけなくちやなるまいかと思つてをりました。」

「矢つ張り考えてゐるんだな。考えないやうでも。自分の運命の事は。」と彼は思ひ乍ら内藤を簡單に解釋してゐた自分に耻ぢた。そして内藤が自分の身の事を考えてゐると云ふ事が此時直次郎には不思議に愛を起こさせた。「可愛らしいもんだ。」と彼は思つた。「皆はそれ〴〵自分の身の事を考える淋しい自愛を持つてゐる。いじらしいもんだ。」

「さうだ、お前が疑はれてゐるんだよ。内藤。美奈子もお前を疑つてゐるのだ。」と彼は云つた。

「私を？」

「いや、實はお前をぢやないのだ。しかし今云つたやうなわけで俺を疑る事の怖ろしさからあれは强ゐて自分の心を欺いてお前を疑る事にして了つたのだ。實はあれはお前の堅氣を信じてゐるのだが。」

「私にはまるでお話しが信じられません。嘘のやうでなりません。」

「實際餘りだしぬけな話だからお前が驚くのは無理はない。だが事實は事實だ。紛らす事は出來ない。俺はどうしたらいゝのだらう。俺は美奈子にこれを白狀するのが本當だらうか。本當だと云ふ氣もする。併しそれは出來ない。どうしても之れ許りは俺には出來ないのだ。」

「御無理はムいません。それは餘り怖ろしい事でムいます。」と執事が云つた。

「それにそんな事を被仰つても今更何のお役にも立ちますまい。却つて只御一家を不幸になさる丈けの事で。之はかたく秘密になさつておゝきになる方が宜しからうと私は思ひます。」

「俺もさう思ふのだ。無論それは卑劣と云ふよりももつと恥づべき事だらう。實際俺は今になつて恥ちてゐる。こんなに賤しい意味で妻を怖れなければならない自分に恥じてゐる。だが白狀は馬鹿氣てゐる。俺は妻の前にその屈辱を厭ふのではない。だが俺が白狀した處で善くなる事は何一つとしてない氣がする。否、それは怖ろしい事だ。もし本當の事を知つたらあれは絶望するだらう。悲しみ拔くだらう。どの位俺を恨み、俺を憎み、賤しむだらう。二十年間ひたすら自分の眞心と生命をこめて愛して來た俺にまんまと瞞まかされてゐた、一切は僞瞞であつたと思つてどの位人生に愛想をつかす事だらう。そして苦しむ事だらう。内藤。俺は自分が輕蔑されたり、憎まれたり、恨まれたりする事はいくらでも我慢出來る。あれが俺に愛想をつかすと云ふ事も未だ堪え得る。しかし俺があれを瞞まかしてゐたと思つて二十年間の相愛の家庭生活が凡て嘘であつた、詐僞であつたと思つて、――あれはヒステリー的な絶望や、悲しみや、辱しめられた怒りから強るてさう思ひ込んで了ふに定まつてゐる。――そしてその爲めに人生に愛想をつかすと云ふ事は堪えられないのだ。俺を苦しめるのはいくらでも構はない。しかしあれ自身が苦しむのはたまらない。俺に愛想を盡かすのは構はないが、あれが人生に愛想をつかすのは怖ろし過ぎる。それはあれを殺す事だ。辱しめて殺す事だ。そして神のやうな子供等を半殺しにすることだ。俺はそれを見る事は出來ない。

……」彼はポタリ〳〵と土の上に涙を落し乍らかう云つた。「あゝ、何と云ふ俺は馬鹿だ。それは凡て當然さうなるべき筈のことだつたのだ。併しまさかこれ程には……と思つてゐた。それが馬鹿だつたのだ。もし俺に出來るならば俺はあれの前に跪いて、洗い洒し胸中の一切をぶちまけて、そして思ひきり泣いて見度いのだ。そして其儘逝つて了へば一番本望だ。だが壽命が來ない中は自分で首をつるわけにも行かない。――」

「そんな事被仰る迄もムいません。併し旦那樣は餘り御苦勞をなさり過ぎはしませんでせうか。私には何ですか旦那樣の爲さつた事それ自身がそんなに惡い事とは思はれません。隨分よくわけの分つた善い方でもふとした機會にはあり勝ちな事でムいます。人間でムいますもの。何も惡い心があつてするわけではムいませんが、只弱い爲についして了ふのでムいます。それに奥樣は旦那樣がどれ程御自分を愛してゐらつしやるかをよく御存じなのですから……。何もこれを隱した處で罪が大きくなるわけではムいますまい。」



「弱いとか、ついとか云ふ事は辯解にはならない。それに俺の場合なぞには惡い心も全然なかつたとは云へないのだ、だが無論あれは俺が愛してゐる事を知つてゐる。俺は時にはあれを本當に愛してゐるのではないと思つた事がある。此間中殊にそんな氣がした。併しさうぢやない。俺はあれの不安通り、いや、自分の不安通り、果して不埒な事をしたが、そんな事をした爲めに俺は却つて只あれに對する自分の愛だけが本當なものだと云ふ事を知つたんだ。しかしそれならば俺は豐を愛してゐないのか。俺は愛しもしない女を辱しめたのか。さうだ。俺があれを辱しめた時俺はあれを愛してゐたとは云へない。それを愛と云ふ事は「愛」を辱しめる事だ。俺は只自分の肉慾に囚はれてゐたに過ぎない。しかしあれが孕んで、俺の室に來て、俺があれを急に憎み出しはしないかと疑つて、俺を怖れきつて不安相な、訴へるやうな、哀れな樣子をしておづ〳〵俺を見た時俺は涙が出る程心からあれを可哀相に思つた。そして其時から俺はあれを愛し出した。俺はあの美奈子を愛するに値しない者だ。俺が美奈子より劣つてゐる、ゐない、なぞは

問題ぢやない。しかし美奈子は美し過ぎる。少くも俺には過ぎてゐる。俺のあれに對する愛はむしろ尊敬だ。だが俺は貞節を破つた。俺は事實に於て妻を愛してゐる。しかし俺に豐を捨てる權利がないやうに、俺は良人としてあれと共に生活する權利は失つてゐるのだ。かと云つて俺はどうすればよいのか。内藤、お前の思ふ事を云つてくれ。」

「旦那樣は矢張り社會の爲めに何處迄も生きていらつしやらなければいけません。お家の爲めにも。私にはさうとほか申せません。」

「さうだ。俺は自殺するやうな煮え切つたムキな男ぢやない。もつとなまくらな人間だ。でなければあんなふしだらはしない。しかし俺は自分のして了つた事の咎は俺一人で背負ふ事は出來ないものかと思つてゐる。俺はさうし度いのだ。現に俺は罰をうけてゐる。嘘ばかり吐いてゐなくちや生きて行けない事も一つの罰だ。確かに俺は罰をうけてゐる。そしてもし俺がそれを受けなかつたら俺は却つて此世を呪ふだらう。不正な者は苛責をうけなければならない。正しい者は悅



びを得なければならない。それが自然の法律だ。そして俺は此法律の嚴存する人生を有り難く思ふ者だ。うけるべきものはうけなければならない。俺は自分の內心の法廷でいくらでも苛責を受ける事を甘んじる。しかしその爲めにあれ等の平和を亡ぼす必要はない。又權利もない。勿論俺はあれ等の平和を破る權利がないからと云つて全く此事に關係のない他人の運命を不幸にする權利は猶更ない事を知つてゐる。だが何かいゝ道はないものかしらと俺は未だ思つてゐる。とに角俺は今のまゝで生活をつゞけて行く事は出來ないだらうと思ふのだ。」

かう云つて彼は內藤の言葉を待ち設けるやうに默つた。

「奧樣の旦那樣に對するお疑は未だとける望みはあるのでムいませうね。」と執事が突然云つた。

「ある。勿論ある。あれはそれを望んでゐるんだ。」

「では私がお引きうけ致しませう。」

「何、お前が？それはいけない。」

直次郎は顔を赤くして驚いたやうに執事の方を振り向いた。

「何でいけない事がムいませう。私は獨り者でムいます。そして私も内々あの女に心を牽かれた事のない者ではムいません。私へのお疑ひは決して不當なものではムいません。私がその名をお引きうけして了へばそれで濟む事でムいます。誰も迷惑する者はないのでムいます。私があれによく話を致しませう。あれはあばずれではムいますが決して悪い心のある女ぢやムいません。お家の御幸福を崩す事を望んでゐる氣遣ひはムいません。」

「正直を云ふと、俺はお前にさう云つて貰ひたかつたのだ。」と主人が云つた。「内藤、俺がお前に對してこれ程に卑劣な要求を持つてゐた事に對しては許して呉れと云ふのも厚ましいが。實は俺はそれを當てにしてゐなくはなかつたのだ。お前は呆れたらう。……」

「何を呆れる事がムいませう。身の輕いものは重い者の荷を分擔するのが當前でムいます。それに他の方とは違ひます。こんな時に御恩を返へす事が出來ませばむしろ私の仕幸せでムいます。」



「俺はそれを知つてゐて利用したのだ。内藤、その事も知つてゐてくれ。」

かう云つて了ふと彼は眉の間に皺を寄せて、頭を振つた。彼はチラリと執事の方を見た。すると内藤の姿が如何にも不愍な者と云ふ感じを彼の胸に惹き起した。「これはいけない。餘りひどい。そんな事をするのは可哀相だ。つみだ。」と彼は思つた。さうして執事が「そんな事はどうでも宜しい事でムいます」と云つた言葉も聞かなかつた。

「いや、矢張りそれはいけない。今のは取り消しだ。」と彼は云つた。「實は俺はお前を詰らぬ奴だと思つてゐた。そして此處に金を持つて來た。(事實彼は三百圓の紙束を懐に入れてゐた。)俺は此金で少くも名義上の責任をお前に讓り渡す事が出來るだらう位に東京では考えてゐたのだ。だが俺はもう何者にも宥しは乞はない。俺は只自分の胸をいくらかすかせるためにお前に此事を喋舌つた事にする。俺は只此事を誰にも秘めておく事が苦しかつたのだ。だがお前は只耳であつて呉

れゝばよい。お前には何の關係もない事だ。俺が直接にあれに何とかする。お前は口は出さないでくれ。いゝか。」

内藤は口答へを控へた。そして二人の會話は畢つた。

家に着いた後で直次郎は又迷つた。一方内藤が存外善い人間である事を知つた事を喜んで安心するかと思へば、あんな事を云はなくともよかつた。寧そ惡者で通して了ふ方がよかつた。「俺は張つてゐない心算で矢張り調子に乘つて見榮を張つてゐたのだ」とも思ひ、又全で反對な自分の身を抛げ出したいやうな眞面目な氣持ちにもなつた。彼は頭も體も疲れてゐたが、感激の爲めに眠られないで戸外へ出た。銀色に霞むだ高い雲の上に春の月がうゐんだ睜つてゐる眼のやうに輝いてゐた。そして其光りに反照する露を帶びた濕つぽい草や、黑い木には生ける者の魂が闇と沈默の中で活動してゐるのが感じられた。直次郎の心には此時後悔も、惱みも、淋しささへもなかつた。却つてすがゝしい愛し度い心持ちと、祈りの心とが一杯になつてゐた。ふと亡き母親を想ひ出した。その優しい笑顔を想ひ出した。そして懷しさのために甘へ度いやうな、泣き度いやうな……又何者か快いものに吸ひ込まれて行くやうな恍惚とした氣持ちになつた。彼はそんなにして夜露に打たれ乍ら何時迄も外にゐる事の害を知つてはゐたけれど、家へ歸つて溫い孤獨な床に入る氣がしないで、いろ〳〵と考へ乍ら曉方近く迄原の上にゐた。



## 一四

併し運命が一層絕對的な事件によつて此難關に一先づ埒をあけた。豐は彼等が留守の間に一寸暇をほしいと云つて下つたぎり歸つて來なかつた。其事が彼等の間に一層疑惑を募らせ、事件は一時險惡になつたが、内藤は其主婦に自分も暇をほしい。自分は飛んだそゝうをした者である。と申し出た。併し丁度其晩から直次郎が再び病氣の爲めに苦しみ出して床についた。

其夕内藤が國から送つて來たと云つて鳴の粕漬を奥に「差し上げ」たのが運の

盡きであつた。直次郎は食物を嚴しく制限されてゐたけれど此小鳥の粕漬抔を食べたい氣は更になかつた。併し不可思議な衝動から彼はそれに牽きつけられた。そして妻が一寸座をはづした暇に其一片を慌てゝ喰べた。上の娘が驚いて「アラ、阿父様！」と叫んだのを彼は叱りつけた。其晩彼は胃の激痛を感じて、血を吐いた。

凡ての事が彼の看病の爲に其方のけにされた。細君は何もかも忘れて夜も眠らずに看護に盡した。彼を失ふと云ふ大きな不幸に比べれば一切のいざこざや、小さな感情の波瀾なぞは問題にもならない呑氣な「戯れ」に思はれた。「石にかぶりついても彼の命丈けは取り止めなくてはならない。」と彼女は思つた。

直次郎の病苦は怖しかつた。彼の低い唸り聲は彼の屋敷が大きかつたにも拘らず隣りの家迄も聞へた。勿論其の間にも心痛は彼から離れなかつた。彼は豐の安否を糺し、彼女に秘密な金を送る爲に他人を退けて、内藤を一人枕許に呼び度がつてゐたがそれが出來なかつた。彼の心は未だ生死の間に迷つてゐた。そして其



本當な感情に於ては死に度がちなかつた。

苦しみは一ヶ月續いた。或る日一同の者が葡萄酒を割つた水を筆に浸して彼の乾いてゐる口中を潤ほした。半分開いてゐる彼の暗い口腔は無限の洞穴のやうに見えた。もう意識はなくなつてゐると人人は思つた。然し妻が涙を拭き乍らその口をひたした時彼の口は閉ぢてその筆を噛んだなり離さなかつた。其翌日彼は靜しむ丈け苦しむで了つたやうに、眠る如くして死んだ。四十八であつた。

内藤は彼の家に居殘つた。直次郎は内藤が妻に義俠の告白をした事を察してゐた。併し豐が其後田舍で七ヶ月の死兒を分娩する運命にゐた事も、又凡ての豫言に先つて彼が生れた時に伯母が既に占者から聞いた彼についての豫言が偶然にもそつくり彼の生涯に當つてゐた事も全で知らずに死んだ。然し美奈子にはもうあんな「忌はしい」馬鹿氣た疑惑なぞは考へる氣にもなれなかつた。又思ひ出しもしなかつた。そんな事を想ひ出す事は夫の神聖を瀆がす事として恥ぢた。彼女の寂しい、悲しい心の中には夫は彌が上にも神聖で高潔な人間として「神のやうに」

輝いて行くばかりであつた。

一九一八年五月作

（完）

ダビデとバテシバ

ダビデは毎夜のやうに多くの大臣、大將、祭司の長達、並びにその寵妃等に給はる華かな陪食が濟むと、早く一人になり度い爲めに席を起つた。早くも彼の心の近頃不興氣なのを見て取つてゐた三人の妃が彼を其房に迄送らうとしたがダビデは「來なくてもよい。」と云つてそれを却けた。尤も其中の一人は來てもいゝと思つてゐたが、他の二人に遠慮して唯一人奥の房に退いた。

彼は少し醉つてゐた。然し机にのつてゐる戰場からの報告書を全部眼を通した。それはどれもこれも捷ち戰の知らせであつたが、彼はそんな報告からは何の感じをも受けなかつた。只待ち設けてゐた一通の書面が彼の顏色を少し變へた。彼の眼は輝いた。それは元帥ヨアブから來た、彼の秘密な命令に對する返書であつた。

其書面には彼の欲した如く、丁度勇猛なフィリスタイン族がある城に立て籠つて頑強に抵抗してゐる事、そしてもし王が間に合ふやうに援兵を寄來すならば、其城を陷れる爲めにベテ人ウリアを其處に當らせる事は恐らく王の命令を遂行する最も適當な手段であらうと思ふと書いてあつた。

ダビデは之を讀んだ時いゝ氣持ちはしなかつた。「ヨアブは俺の心を見拔いたか？然し彼に俺の理由が分らう筈はない。」彼はかう思つたが落ちつかないで、一人房の中を歩き廻つた。そして不安を追ひ拂ふ爲めにウリアの妻バテシバを迎へる事の幸福を考へた。

それはむし〳〵したある晩の事であつた。ダビデは屋根の上に涼みに出た。エルサレムの街はまばゆい星月夜の下に靜かに休んでゐた。直ぐ城廓の下にある民家はその窓から室の中の樣子がうかゞはれた。彼は民家の家の中を覗く事が好きであつた。

彼の眼の屆く處にベテ人ウリアの家があつた。彼はウリアの妻バテシバと云ふ

者が非常に美しい女である事を何時となく聞いてゐた。そしてバテシバを見度いものと思つてゐた。

彼は毎も此屋上に出る度毎にウリアの家をそれとなく見た。彼は一方嚴格な、道德を愛する人間であつた。然し彼は多情な男であつた。自分でもそれを知つてゐた。そして謹まうとも思つてゐた。しかし一夫多妻を許す當時の習慣を彼は喜んで保存してゐた。「人類は榮える前に神に仕へる人數を增やす必要がある。——生めよ。增殖えよ。地に充てよ。そは神の意志である。」彼はかう云つた。そして其子を神を畏れる善き人間に育てよと人民に布告した。人民は、併し神よりも彼を畏れた。

かくて彼は十六人の妃を持つてゐた。その中の四人は病氣と產との爲めに死んだ。彼はそれ等の誰をも迎へる時には少からぬ幸福を以てした。しかし、わが物にするが否やそは前の魅力を失つた。そして特別な寵愛は二た月とは續かなかつた。彼はその物足りなさを更に他の女を迎へる事によつて癒ほさうとした。かくて彼にはその方の節操や、節操の中の幸福と云ふ事は解らなかつた。



處で彼は今又ウリアの家を眺めた。彼が思つた通りウリアの家の窓はむし暑い爲めに明け放たれてゐた。彼の胸に動悸が打つた。しかも彼の眼にある物が映つた。そは彼が數年來心祕かに見度いと欲してゐた處のものであつた。

室の中は明るかつた。暗紅色の窓懸けは揭げられてゐた。そして其中である女が——彼はその美しさに驚き、打たれた——化粧をしてゐた。一人の侍女がその女の髮を梳り、膏をぬり、他の女はその女の輝ける足を洗つてゐた。それがバテシバであると云ふ事はもちろんであつた。

ダビデは幻影を見てゐるのではないかと思つた。そして唾を飲んだ。彼の全身がわなないた。

彼は素より金剛石に戀をする事が出來た。しかし眞珠にも戀をする事が出來、紅玉にも戀をする事が出來る男であつた。そして幾人でも妃を持つ事の出來た彼が今迄見そめてわがものにした妃は何れも眞珠か、紅玉であつた。彼は今始めて

金剛石を見た事によつて其事を知つた。

然し彼の今迄迎へた妃は皆人妻ではなく、處女であつた。それを獲る爲めに縱令何人かの幸福を傷ける事はあつたにせよ、何人の運命をも虐げずにすんだ。彼はそれを皆容易に得た。彼は女から愛される事に自信があつた。そして人民が自分をユダヤ最大の征服者として尊敬し、サウルよりも偉大な明主であるとして崇め、且つ愛してゐる事を知つてゐた。彼は其女の家族が女を彼の宮室に入れる事に此上ない名譽と誇りとを感ずる事をも知つてゐた。かく自惚を持つ事を許されてゐた彼は自分の要求によつて何人をも恐ろしく不幸にする事が出來ると云ふ事が本當には信じられなかつた。凡ての者は自分の寵に與る事の幸福の爲めには他の幸福を抛つ事を左程惜しむ筈はない。――こんな氣が何となくしてゐた。

彼はわが快樂の爲めに進んで暴虐な事をしやうとするには餘りに明君であつた。殊に彼は他人の暴虐を嫌つた。そして彼は時を待つてゐた。が、彼は我儘であつた。彼が一般の人倫に對して嚴格であつた事も其賢い我儘から來る事であつ



た。然かし彼は自分の我儘を抑へられなかつた。そして今バテシバを見た時彼女を其夫から奪はうと云ふ決心がむら〳〵と彼の内に勃發した。此決心は冷水のやうに彼ををののかせた。併しバテシバを獲る爲めに其夫ウリアをフィリスタインとの戰に於て最も危險な地位に立せたる事によつて亡き者にしやうと云ふ考を彼は打ち拂ふ事が出來なかつた。

彼は二日苦しむだ。之は不正な、恐ろしい事である、殘虐な事であると彼は思つた。彼はウリアが功勞の多い、善い人間である事を知つてゐた。それでどうかしてウリアを善くない人間であると思ひ、其咎を探す事に苦心したがどうしてもそれは出來なかつた。彼は迷ひと不安との爲めに頭痛に冒された。そして彼がメツキリ食物を口にしなくなつた事は誰にも眼立つ程であつた。が、丁度戰場に赴く使者が彼に元帥ヨアブに傳へる何か言附けはないかと聞きに來た時、彼はつい「ある」と答へた。

彼はウリアの勇敢である事、頑强なフィリスタインを征討するにはウリアを指

揮官に抜擢して難局に當らしめるべき事を書いた。彼はウリアを褒め、ウリアが其名譽の爲めに困難な偉勳を完うしたならば彼を大將に取り立てるべき事を書いた。實際彼はさうしやうと思つてゐた。が、彼は元帥ヨアブが嫉妬深い人間である事、そして彼の前にウリアを非常に褒め立てる事は卽ちウリアの身を危險にする事である事を知つて居た。そして何日の何時頃迄に援兵を送ると附け加へた。

「之から先きの運は神に任せやう。併し事に依つたら援兵を時間に遲れるやうに遣はす事は俺の心一つだ」と思つたのである。

しかし彼は此の手紙を書き乍ら心に咎めた。そして何遍となくそれを引き裂いた。しかし彼がもう少し罪の隱れた書き方をしやうとすればする程彼はつい終りの方でより露骨に本心を現はしてゐた。彼はクサクサして來た。そして五遍目に書いた亂雜な手紙を使者に渡した。

そして今此の返書がヨアブから來たのである。

ダビデは溜息を吐いた。再び屋上で見た美しい幻影は現はれた。否、それは再



びではなかつた。何かにつけて間斷なく彼の前に現はれた。彼の見る書面の中に、彼の食卓に運ばれる皿の中に、彼の見る妃等の顏の中に。——彼は妃の一人を呼んだ。そして酒を持つて來させた。

「王よ、お顏色がお惡うムいますが。御氣分がお惡いのではムいませんか。」と妃の一人がきいた。

王は其女の顏を見た。そして醜いと思つた。どうして俺はこんな者を妃にしたのかと思つた。彼は此の女を嫌ひ、此の女の傍にゐるのを恐ろしく不快に忌はしく思つた。

「酒を注げ」と王は云つた。女は淋しい顏をした。

「王よ、妾がお氣に召さないのでムいますか。」と寵妃は又云つて王の顏を偸み見た。

「さうだ。氣に入らない。」王はかう云ひ度かつた。しかし只苦々しく笑つた。そして此女はもう感づいてゐるなと思つた。此女は最近に彼の寵妃になつた女で

あつた。彼は此女に最初氣を奪はれた當時の事、そして自分の現在の心を思つてわが身を意識的に淺間しく感じた。彼は新たにバテシバを迎へる事によつて此等の女を更に淋しくさせる事を愉快に思ふ程若くはなかつた。却つて其眼を見てゐるといくらか可哀想な氣もして來た。

「哀れな女よ。お前の幸福はもう死んだ。お前は俺にとつてもう存在してゐない。」彼はかう思ひながら其女に次の室で竪琴を彈く事を命じた。彼は其女を見てゐたくなかつたのである。が、竪琴は却つて彼の心を哀傷的にした。彼は其音を聞くと直ぐ昔を想ひ出すくせがついてゐた。彼はサウルとの關係を思ひ、ヨナタンの愛を思つた。そして自分を幾度となく執念深く殺さうとしたサウルを宥した自分を思ひ、正義と民衆とに對する愛に燃えてゐた若い自分の姿を想つた。彼にはそれは誇りであつた。然し今彼は自分が齢を取り、事業をしたと云ふ意識の中に知らず〳〵心の弦が弛み、閑散を嗜むやうになつた事につれて墮落しつゝあるやうに感じた。サウルも若い時は正しかつた。晩年になつて彼は嫉妬の罪に墮ち



た。さう云ふ滅亡の時代が自分にも情慾と慢心との爲めに來たのではないかと彼は思つた。彼は神が恐ろしくなつた。

彼は不快になつて琴を止めさせ、そして他の妃を連れて寢室に入つた。彼は夜中に眼を覺ました、ふとバテシバの事を考へると早くわが物にし度いと云ふ熱望を抑へられなくなつた。暗い閨房の中での彼は日光の下に政務を執つてゐる時の彼とは屢々別人であつた。「此處にゐる女が此女の代りにあのバテシバであつたら……あゝ何の爲めに俺はあの手紙をヨアブに送つた事を後悔したんだ。もつと露骨に書けばよかつたに、」彼は矢も楯も耐らないやうな氣持ちになつて又屋上に出た。

と、そこでナタンに逢つた。老人ナタンは人の寢沈つた頃星を見乍ら瞑想する事が好きであつた。

「王よ。どうして今頃此處へ……」とナタンは云つた。

ダビデは此人の心を見拔く眼のあるナタンの心を一寸疑つた。

「暑いので寢苦しい。それに戰爭の事が氣になる。」と王は云つた。そして素早くウリアの家の方を見たが灯りは消えてゐた。「あの中にバテシバは眠つてゐるのだな。」と彼は思つた。

「かう云ふ靜かな晩に星の空を見てをりますとその下で人間が惡い心を起したり、憎み合つたり、殺し合つたりすると云ふ事が何だか在り得ない不自然な事のやうに思はれて來るではムいませんか。」とナタンが云つた。

「さうだ。さながら皆平和で幸福であるやうに思はれるな。」王が答へた。

「さうして又平和で幸福でなければ嘘だと思はれて參ります。人類が、いえ、此宮殿から見渡される狹い區域に住む者丈けでももし本當に愛し合つて、一家族のやうに互に助け合ふ事に幸福を感じてをりましたら、どのやうに善いでありませう。どのやうに美しい事でありませう。」

「勿論。併し人類は吾々イスラエル族が蠻賊に亡ぼされる事を欲しないのでな。」王は冷淡に云つた。



「吾々はフィリスタインを怖れ過ぎてをります。フィリスタインも亦吾々を怖れ過ぎてをります。貴には戰ひ、夜には眠り、朝起きては又殺し合ひに出掛ける……全で子供の遊びのやうでムいますね。」

「さうだ、人類は未だ惡戯盛りの腕白小僧だからな。もう少し大きくなると段々大袈裟に惡辣な喧嘩をするやうになるだらう。吾々の夢が實現されるには未だ二三百萬年はかゝるのだ。」

王はし度くない話をナタンとして、氣を變へられなければならなかつた事を不快に思つた。そして自分の閨に退いた。

翌晩も王は屋上に出た。しかし二人の妃が一緒に踉いて來た。王はいら〳〵した。

バテシバの房は明るかつた。二人の子供が其中で遊んでゐた。其處へバテシバは金色の衣物を着て菓子を持つてあらはれた。子供等は母にとり縋つた。母は二人の子の頰に接吻して菓子を與へた。子供は菓子をより多く奪ひ合つた。それを

見てバテシバは叱りながら幸福相に笑つた。そして何かを云つた。二人の子供は仲直りをして共に東の方を向いた。そして跪いて小さい掌を組み合はせた。

「彼等は戰場の方を向いてゐる。父親の平和と祝福を祈つてゐるのだな。」とダビデは思つた。そして顔を顰めた。

子供等は何か云はれて今度は此方を向いて同じやうに祈つた。

「俺の爲めに祈つてゐるのだ。」王は思つた。そしてある煩悶が來た。かゝる氣持をダビデは今迄味はつた事がなかつた。王は額に手を當てゝ椅子に凭れた。

「何を御覽になつていらつしやいますの？」と妃の一人が云つた。

「子供はいぢらしい者だな。」

王は口の中で只かう云つた。そして彼は自分にも解らないもの、自分の知らないものが世にはあるかも知れないと云ふ氣がして來た。「俺はあの女を俺が思ふ樣に幸福にする事が出來るか？　俺はあの女を子供と共に引き取つてやらう。そしてあれ等があの家にあつたと同じやうに暮らさせてやらう。だがあの花が俺のものになる時あの花は萎む事はないだらうか。」こんな疑問が彼に起つた。併し王は自分には一夫一婦の家庭の幸福とか、愛とか、喜びとか云ふ味は自分が多くの妃を持ち過ぎた放肆の爲めに解らない祕密であるとは察しなかつた。

王は房に退いてから祈禱をして見た。心の平和を獲る爲めに。そしてあてのない事を考へた。しかしバテシバを思ひ切る事はどうしても出來なかつた。そして不安は癒らなかつた。



彼は不眠の爲めにやつれた。そして氣は荒くなつた。二日經つて戰場からヨアブの使ひが來た。王は胸が轟かしながら廣間で其使者を迎へた。晝間は王は大抵一人でゐる時はなかつた。

使者は玉座の下に多くの高官に侍べられて着いてゐるダビデの前に臆した。そして敗戰の狀を告げた。

「汝等は何んで援兵の來ない中に城邑に近づいたのだ。汝等は彼等が石墻の上

から射る事を知らなかつたのか。死傷者は誰々だ。」ダビデは聲を荒くして云つた。

「王の家來ベテ人ウリアを始めその一隊は全滅致しました。援兵は時間を違へました。」と使者は答へた。

「何、ウリアが死んだ。何と云ふ味方の不幸だ！」王は心から叫んだ。そして暫くして附け加へた。

「しかしヨアブに云へ。刀劍は彼をも此をも同じく殺すものだ。再び城邑を攻めて陷れるがいゝ。と。」

ダビデは興奮した。彼は恐ろしい幸福の手綱が自分の手に握られた事を思つて喜びを禁じ得なかつた。併し彼はわざと六ケしい顔をしてゐた。

彼はバテシバに手紙を書いた。

「全イスラエルの爲めに汝の良人ウリアの戰死を悲む。ウリアの善良と忠勇とは何人も認めてゐる。王は汝を悲しませる事に忍びない。汝の良人ウリアを愛する王をして汝等名譽ある遺族の幸福の爲めに末永く計らしめよ。今晩王は汝を慰



める爲めに城内に迎へ度い。」

バテシバは悲しみの爲めに魂を失つてゐた。その二人の子を見るにつけて彼女は氣も狂ふばかりになつてゐた。そして王の手紙を見た時、王によつて慰められ度いと思つた。彼女は此場合如何なる慰めも甲斐ない事を知つてゐたにも拘はらず慰めに飢ゑてゐた。そして晩になると喪服を着て王城に入つた。

ダビデの房は靜かであつた。ダビデは落ちつかなかつた。彼には自分の爲した事、爲しつゝある事が解らなかつた。それ程ダビデはバテシバに對する愛慾によつてくらまされきつてゐた。彼は室の中を歩き廻り、窓懸を少しかゝげてバテシバが通りはしないかと街を見、バテシバが此房の中に入り來る時の事を思つて胸がむし〳〵した。しかし王の尊大と、イスラエル最大の征服君としての威嚴は保つてゐやうと思つた。

彼はバテシバが案外早く入つて來たのを見て驚いた。

「お前はバテシバか。」王は血走つた眼を輝かしながら云つた。此言葉を發する時を彼はどの位待つてゐたか知れなかつた。そしてかく云ふ自分は久夢を見てゐるのではないかと思つてそつとわが膝を指で押して見た。

「はい、王よ。妾はエリアムの女、ウリアのやもめ、バテシバでムいます。」と女は俯向いて答へた。

王は暫く二の句が繼げなかつた。彼には女の喪服が氣に入らなかつた。彼はあの屋根の上から見た華かなバテシバを想つてゐたからである。子供等の幸福な笑みを湛へてゐたバテシバを待つてゐたからである。彼にはバテシバは幸福其物であつた。其幸福其物がかく涙にうるほつて悲みに曇らされてゐるのを見た時、ダビデは少し失望すると共に解らなく感じた。併し喜びが直ぐ凡てを輝かした。

「ウリアは死んだ。俺は衷心から彼の死を悼むと共にお前等に同情する。併し神はウリアの死を只悪しとは見玉はないであらう。お前に信仰があるならばお前等は只悲しむで許りゐて呉れるな。ウリアはお前等を悲しめるとて死にはしな



い。そして彼は俺がお前等遺族の幸福を助けるであらうと云ひ殘して安心して死んだ相だ。良人の爲めに俺に賴つて呉れ。俺にお前の幸福を助けさせて呉れ。」

「王よ、妾はしかしどんなに彼や妾等の爲めに良人の凱旋を待ちこがれてゐた事でムいませう。妾は良人なしに幸福でゐる事は出來ません。どうして彼によつて生きて來られた妾等が彼といふ幹を斃されて之から幸福でゐる事が出來ませう。彼はもう歸つて來ては呉れません。妾等はもう永久に彼を見る事は出來ません。」バテシバは泣き出した。

「お前が今悲しむのは餘りに尤もだ。心ゆく迄泣くがいゝ。然しお前はお前の子供等とお前自身の爲にやがて又幸福に返らなければならない。死のない家は何處にもない。かと云つて吾々は悲しむ爲めに生れたのではない。幸福にして神をたゝへ、神を悦ばす爲めに生れた。神は吾々が悲しみに暮れてゐる事を悦び玉はない。少しでも幸福にして同胞を喜ばす事をのぞみ玉ふのだ。」とダビデは云つた。

「はい、それは妾等の義務ではムいませう。しかし妾は哀れな女でムいます。

頼る者を失つて幸福である事は出來ません。根が妾に喜びの花を咲かせる水分を供給して呉れました。その根を絶たれて了つたのでムいます。」

「まつたくだ。だが俺に再び其水分を供給させて呉れまいか。」

バテシバはよく王の云ふ意味が分らない氣がしたが驚いて顔を上げた。ダビデはすかさず自信のある同情に富んだ誘惑の眼をその眼に浴びせかけた。彼女はハッと顔を赤くした。ダビデは心の中にほほ笑むだ。彼は自分にとつてバテシバが金剛石であるやうに、彼女にとつても自分は金剛石であるに相違ない。自分に比べればウリアは眞珠以上のものには見えないであらう、と心の内に信じてゐた。

「女よ。ウリアが死んだ事は俺に責任がある。お前は俺を恨むでゐるだらうな。」ダビデは云つた。

「良人が死にましたのは天命でムいます。妾はヨアブを恨みましても王をお恨みは致しません。」

「天命。しかしあの戰ひにウリアを行かせたものは俺だ。ヨアブを元帥にした



者も俺だ。俺はお前に此事を何よりも先きに謝まらなければならなかつたのだ。俺は餘りにウリアを取り立てやうとし過ぎた。女よ、俺を恨むで呉れ。しかし自分の運命を抛つて呉れるな。」

王はかう云つてバテシバの手を執つた。彼は自分が急に恐しい嘘吐きになつた事を意識して羞恥の爲めに赤面した。が、バテシバは下を向いてゐた。

「な、俺には責任がある。しかし俺はそれを望んだのではない。それを信じて呉れ。」

「そんな事は申す迄もムいません。」

「しかし俺は其責任を償ひ度いのだ。俺にそれを償はせて呉れないか。」

「どうしてゞムいます。いかな王にも妾の幸福を取り戻す事丈けはお出來になるとは思へません。」

王は溜息を吐いた。そして今唐突に自分の望みを持ち出してもそれは只此女を驚かす許りで無理な事だ、未だ早過ぎると、思つた。そして自ら竪琴を彈いて女

に聞かせた。彼はギラ〳〵鱗のやうに輝く重い袖を翻して竪琴を彈く自分には魅力があると信じてゐた。女はうつとりとした。

王はそれからバテシバを連れて宏大な王宮の中を案内し、美事な晩餐を與へた。そして王としての、又ダビデとしてのあらゆる魅力を見せた後で玄關迄彼女を送つた。そして廊下でバテシバが涙を拭ふ爲めの手巾を落した時王らしい態度でそれを拾つて彼女に與へた。

一ヶ月が經つた。其間にバテシバは三度王に呼ばれて二度出掛けた。

「お前は俺を愛しないか。」と王は云つた。其顏は嚴肅であつた。彼は自分には嚴肅がふさはしく、自分が嚴肅な容子である時に最も自分に魅力があると思つてゐた。

「王としてお愛し申してをります。」

「うん、お前は自分には幸福が再び來る事は出來ないと云つた。今でもさう思



ふか。」

「はい、あの樣には幸福になれません。又なり度いとも思ひません。」

「今お前がさう言ふ氣持ちはよくわかる。だがー」

「妾は此境遇に慣れる事は出來ませう。今でも一と月前よりはいくらか慣れて參りました。しかし幸福にはなれません。又ならうとも思ひません。只諦めて生きて行く丈でムいます。」

「お前は本當にさう思ふか。女よ、俺の顏を御覽。お前は何故さう俯向いてゐるのだ。」

女はふと顏を上げた。ダビデの凝としてゐる、遁げ場も與へないやうな眼が彼女の視線に當つた。その眼は彼女には「意外な」眼ではなかつたに拘らず彼女を愕かし、おびやかした。何故ならそれは恐しい程情慾に燃えてゐることを露骨に現してゐながら不思議に威壓する力に籠もつてゐたからである。彼女の胸に高く速かに動悸が打つた。彼女は魂を抑へられたものゝやうに慌てゝ横を向いた。

「お前の顔は只諦めてゐる者の顔とは見えない。お前の顔には淋しさ以外のものがある。悲しみ以外のものがある。」王は落ちついた微笑を顔に浮べながら云つた。「お前は此處に來る時不安を感じないか。諦めてゐる者の眼はお前の眼のやうにおど〳〵してはゐない。迷つてはゐない。又とぼけてもゐない。今のお前は一ケ月前に此處へ來た時のお前ではない。お前は苦しむでゐるな。」

王は女の手を握つた。

「王よ。被仰ることの意味が妾にはわかりません。どうぞ手を離して……」

女は苦痛に體を少しゆすぶらせてかう云つたが、自分で王の手を振り離さうとはしなかつた。

「恐れることはない。俺はお前を愛してゐるのだ。そしてお前も俺を愛してゐる。」王は顫ひを帶びた重い聲でかう云つた。再び女の驚く眼と王の燃えるやうな眼とがかち合つた。彼女は王の其まなざしを賤しんだ。賤しまうとした。しかし本當に賤しむことは出來なかつた。何故ならば彼女は此時それが賤しいが故にその眼の心を愛してゐたからである。そして王は早くも彼女の内の情慾が自分の眼を歡迎してゐることを見拔いた。



「さうだ。お前は俺を愛してゐる。それでお前は苦しむでゐる。お前は俺を賤しみ度くて、賤しむ事が出來ない爲に苦しむでゐるのだ。」かう云つて王は彼女の體に手を廻はさうとした。

「王よ、貴方は何と云ふ恐ろしい方。妾には分りました。あゝ貴方は何と云ふ方でムいませう。イスラエルの人民は貴方に瞞まされてゐるのです。妾も瞞まされたのです！　貴方は妾の夫ウリアをお殺させになつたのでせう。妾を獲る爲めに。あの惡者のヨアブに云ひつけて態と夫を危險な場所に立たせてお殺させになつたのですね。妾には分りました。あゝ、妾は瞞まされたのです。妾達人民がサウルよりも偉い王としてあの樣に依賴してゐた方から！　あゝ貴方は恐ろしい方、暴君！　人でなしの詐僞師はヨアブではなくて貴方です。あゝ妾はもう貴方を恐れはしません。市街中にさう云つてふれ廻してやります！」

「さわぐな！　もう駄目だ。お前がさうして泣いたりわめいたりすればする程お前は俺の掌に入つて來る事になるんだ。何故ならお前が騒ぐことはお前が迷つてゐることを示すからだ。お前が詈つてゐるのは俺をではない。お前自身をだ！　自棄を起すな。ダビデは惡い王ぢやない。少くも惡い王ぢやなかつた。しかしお前に眼が眩んだ。お前が美し過ぎて生れたのがお前の因果だ。まあ、心を鎭めろ。そして聞け。俺は嘘を吐く必要のない人間だ。お前の云つた事は一面正しい。俺は暴君ではないのだが、暴君になり得る俺の運命が俺の内の暴君をお前に醉はせたのだ！　確に俺は惡かつた。惡い事をした。併し俺は惡い事を愛する人間ぢやなかつたのだ。否、俺は正しかつた。善良な王だつた。ゴリアテを殺し、イスラエルの民と、神の殿堂とを人類の爲めに防いで戰つて神に嘉されたる征服者だつた事は神が知つておゐでだ。併しあゝ、俺はお前を屋根の上で見た。あの寢苦しい晩に。そして俺はお前が可愛くて、お前欲しさに何もかも忘れて了つたのだ。さうだ。俺はお前を獲る爲に神を捨てたのだ。そして俺は神の前に俺が嘗て刑罰したあらゆる罪人に優る大罪を犯した。俺は今それを認める。俺はお前の前に恥ぢる資格さへ失つた。バテシバよ。俺を詈れ。俺の罪を人民に云ひふらすなら云ひふらせ。俺はもう齢をとつてゐる。する丈けの事はした體だ。お前に殺されても、又俺を輕蔑する人民から暴君と云ふ獄門に首を晒らされても俺は悔む事はあるまい。それ程俺は今神の怒りを感じる。しかし俺はお前を愛したのだ。お前は俺が只賤しい心からお前の肉體丈けを愛してゐると思ふだらう。併し俺にもし善い處がある事が本當だつたらそんな事が出來るものかどうか考へて呉れ。俺は執念く俺を刺し殺さうとしたサウルを宥したダビデだ。しかし俺も人間だ。俺はお前を見て、お前に渴える心を抑へる事が出來なかつた。そして俺はお前の體を完全に愛するやうになつた時にお前の凡てを愛した心算だつた。だが俺は過つた。神は俺を罰し玉ふだらう。俺は其罰に甘んじる。しかし俺がお前を愛した事を知つて呉れ。女よ。俺を呪ひ、俺の死罪を街道に叫ぶ前に唯一度俺を抱いて呉れ。接吻して呉れ。おゝわが愛する女よ！」

ダビデは涙にむせびながら全身をわなゝかせてバデシバの前に跪いた。

「王よ。妾は何も申しますまい。只妾をお歸へし下さい。後生です。」バデシバは蒼褪めてかうさゝやいた。

「お前は俺を愛してゐるのだらう。」王は取り縋つてもう一度云つた。

「愛してはをりません。」バデシバは顫へながら、しつかり云つた。「元は王としてお愛し申して居りましたが、今ではもうそれも出來ません。絶對に出來ません。妾には父親を瞞し討ちにされた哀れな子供達がゐます。もう妾には此上關はつて下さいますな。それがせめてものお願ひです。妾達の不幸は王に關係があらうとも妾共の幸福は王に何の關係もないもので御座います。」

ダビデは幻滅の絶望に打ち沈められた。併し女の云ふ事は何處迄本當かは分らないとも思つた。しかし此場合彼女の言葉を否定する事によつて徒らに彼女の反感を招く事を怖れた。

「宜しい。只其處迄お前を送らせて呉れ。裏門まで。表は締つてゐる。」



女はそれを斷らなかつた。ダビデは又も彼女の心を見拔いたやうに思つて喜んだ。そして二人は暗い庭園へ出た。默つて。「俺は諦め度い。諦められない。しかし諦めやう。俺を王と呼ぶのはもう止めてくれ。俺はお前にわびる權利さへ持たない只の大罪人だ。」

王たる彼が口籠るやうに重苦しい調子でかう云つた時、王はそれが「おいたはしい」と云ふ感じを彼女に與へるであらうと云ふ事を自分で知つてゐた。

「お諦め下さい。妾は王をお宥し申すことは出來ません。しかしお忘れ申すことに努めませう。」

「宜しい。」と王は溜息を吐いて云つた。

「しかし只一度接吻を許して呉れ。俺はもう既に罰せられた者だ。」

バデシバは闇の中でをのゝきながら王に接吻を許した。彼女の息は忙しく、その口は熱かつた。燃えてゐる眼にはそれは見えなかつたが——涙があつた。そして彼女は逃げた。しかし最早一度の接吻が彼女に鎖を附けて了つた。

ダビデは、併し、彼女の前に悔恨の爲めに跪いて、自己を苛責した時、口から出任せの嘘を云つたのでは素よりなかつた。彼は凡ての意識的な人のやうに巧妙な役者であつたが、其處迄役者にはなり切れなかつた。勿論彼の言葉には高調して行くリズムが引き出す感情の誇張は多少あつたけれど、それは少くも其刹那の彼にとつては本當であつた。彼は急に神の裁判が怖ろしくなつた。怖ろしい事をして了つたものだ、迷ひと云ふものは怖ろしいものだと彼は思つた。そしてもう取り返しのつかない事を思つた時彼は自分の一切が俄かに消滅し、一切のものから自己が見捨てられたやうな堪らない闇を感じた。彼は絶望した。併し今一つ彼にとつて恐ろしかつたことは彼の罪を見拔いてゐるヨアブが凱旋して來ることであつた。彼は女に「俺の罪を人民に云ひふらせ」と逆上せて叫んだけれど、今では彼女がそれを祕密にするであらう——何故なら彼女も彼れに對して情慾を燃やした事を彼女自身認めてゐるに違ひないからと思つた。唯ヨアブさへゐなければ面



倒は起らずに濟む、——かくて彼には實際に於て、神に對する意識と、ヨアブに對する恐怖とがゴッチャになつた。ヨアブをウリアと同じやうに戰死させるか？そして彼は新しい元帥を選んで、ヨアブに渡すべき恐ろしい命令書の文句を考へながら一人室の中を行つたり來たりした。

「俺はどん〳〵墮落しつゝある。何時の間にかすつかり俺は墮落した。」と彼は思つた。彼は命令書を書かうとして執つた筆を拋げて又立ち上つた。そして溜息を吐いた。「なるやうにならせて了はう。どうせ俺はもう使命を畢つた體だ。俺には餘りに多く人を殺した事によつて神の宮を建てる事業が宥されてゐない。その光榮あるいさをしは俺の後を繼ぐ王によつて成されなければならない。そして俺の體は衰へ、壽命は終りに近づいてゐる。」かくて彼は自分のした若い時からのいろ〳〵の功績を想つた。何人が彼の偉大を認めないものがあらうか。此世以上の正義が彼をして此世の正義を守らしめた。彼は立派にそれを守り、それを發耀した。其事は眞當であつたやうにも思はれ、又虛僞であつたやうにも思はれた。「凡

ては皆偽善だつたのか?」

「否、俺は偉大になり過ぎたのだ。それで神は俺に惡意を持ち出したのだ。」と彼は又思つた。

「何故なら神は人間が完全であることを望まないから。そして人民が人間である王を餘りに信頼し、崇拜する事によつて神たる自分を疎かに思ふ事を望まないから。「彼」は完全なるものが唯り自己のみであつて、いかなる高い人間も必ず過ちをなすものである、不完全なものであると云ふ事を俺によつて示さうとしたのだ。晩年のサウルが其計畫にかゝつた。そして今度は情慾の罪過によつてそれが俺に來た。そして神は俺を罰する事によつて自己の偉大と、恐ろしさを人間に示さうとするのだ。」

彼は心の中で神に反抗した。が、反抗するのは流石に恐ろしい氣がした。そして平和に、謹しみ深い晩年を終る爲めに、生贄を神に捧げて自己の過ちを悔い、彼女を諦めやうかとも思つた。しかしそれが不可能である事は百も承知してる



た。又既にウリアを殺して了つた今になつて諦めた處で追つ付かない事だ、それは虻蜂取らずに過ぎない事だとも思つた。

「否、否、どうして諦めることが出來やう。あれは餘りに好い。俺はあれを我が物に歸したならば其時に自ら自分を死罪に處し、あらゆる名譽を抛つても悔む事はない。」と彼は獨り言つた。「そして事によつたら俺は位を誰かに讓つて彼女と二人でエジプトへでも逃げよう。俺はもう王である事に飽きた。俺は昔のやうに再び自由な牧者に還つて、王の桎梏から遁れるのだ。誰が王にして呉れと神に祈つた事があるか。」

急に彼は自分が囚はれの身であるやうに感じ、誰よりも不幸なものであるやうに感じた。王である故に自分は誰にでも許されてゐる事を爲す事が出來ない。かくて彼は本當に自分のした事が悪い、恐ろしい罪であると云ふ事が感情の誇張されたリズムで自ら告白した程には本當に感じられない事を左程に「墮落」であるとか、無良心だとか、思はなくなつた。第一に彼は征服者であり、王たる自分が此

様に一婦人の爲めに苦しまされ、臆病にされ、卑下されてゐると云ふ意識の爲めに腹が立つた。第二に王たる自分の力を以てして一人の婦人を自由になし得ずにゐると云ふ意識の爲めに腹が立つた。「何で俺がそんなに恐れ、すくむ必要があるか。ウリアはフィリスタインとの今度の戰ひに於いて討死せずとも、次ぎの戰ひに於て討死すべきものであつたかも知れない事を誰が否定出來るか。たとへウリアを危險な地に進ませた事が惡かつたとしても、その罪はフィリスタインを討伐した俺の長い功績によつて償はれてもいゝわけだ。何の爲めに俺は彼女の前にあのやうに頭を下げたのだ。跪いたのだ。そして彼女は俺を只の人民であるかのやうに言つた。彼等一族の運命を彼處迄引き上げて、幸福にしてやつたのは俺の恩であるのに。誰が一度の接吻を以て女を拋げ捨てる事が出來るか。」

彼は何でもいゝから女は獲て了はう。人事界に彼の力を以て出來ない事は一つもない。彼が一旦命令を出せば萬事はそれ迄の事である。それなら何を躊躇するのだ。何を尻込みする必要があるのだ。



彼は只彼女を待つ事の爲めにのみ苦しむだ。最早その事が善いか惡いかの爲めに苦しみはしなかつた。何故なら彼が云つた通り、彼をして彼女に最初の接吻をなさしめた彼の内の火は、接吻ではどうしても終り得ないものだからである。彼は未だ「悔い」に至る旨目的な徑路にあつたので、本當に「悔い得る」時に來てゐなかつたのである。何故なら彼は未だ「思ひを遂げ」てはゐなかつたから。彼には最早神もなければ、人民も、何もなかつた。只バテシバのみが獨り其あらゆる魅力のうちに輝いた。彼の全存在の意義は唯一つの「思ひを遂げる」事にあつた。其結果や、其性質は問ふ處ではないのである。若い時に獅子の口を引裂いた勇氣が今や妖怪の皮を著て老年の彼の内に擡つた。

それにも拘らず彼は躊躇した。時々全く反對な年寄りらしい靜かな氣持ちが彼に訪ねて來るからであつた。彼は女を苦しめることを思ふと餘り手荒な事をするのに氣が臆した。一方涙もろくなつてゐた彼には深夜なぞ何とはなしに靜かな涙

がこみ上げて來る時があつた。そんな時彼はこんな嚴肅な寂しさは王の晩年にはふさはしいものとも思つた。ヨアブをウリアと同じ筆法で殺す事もまあ見合せやうと彼は思つた。それで新しい元帥アビメレクを只ウリアの代りとして戰地に遣はした。それはヨアブの競爭者で、敵であつたのである。事によつたらヨアブは死ぬだらう。だが死んでもそれは俺の責任ではないと云へる。だが死ななかつたらそれでよい——と彼は思つた。併し其事は直ぐに忘れて了つた。そして二日許り靜かに待つた。あらゆる妃は彼から全く退けられ、彼は朝夕の禮拜にも病氣と稱して姿を現はさなかつた。彼れは一人の時屢々祈らうとして努力したが、どうしてもそれが出來なくなつたのである。

ある晩彼は又一人で屋上に出た。彼女が見えるかしらと思つたのだ。見る事は恐ろしくもあつた。暗い梯子段を昇る時彼は息切れの爲めに自分の老年を感じたが、胸には若い頃の動悸が打つてゐた。

彼女は見えた。彼は彼女が黑い裝束をして床に跪いてゐるのを見た。



「彼奴は俺を愛してゐる。それで彼奴は俺の誘惑から救はれる爲めに神に援けを求めてゐるのだ。」

彼が急いで室に戻つた時彼は机の上にある書面が載つてゐるのを認めた。それは戰地にある新任された元帥アビメレクから來たもので、ヨアブが流れ矢の爲めに思ひがけない戰死を遂げた事の報じであつた。ダビデは手を打つて喜んだ。そして直ぐバテシバに手紙を書いた。

「汝に見せ度いものがある。それは不幸なる汝の良人ウリアの遺物である。今戰地から屈いた。即刻使ひの者と共にそれを見に參内する事をすゝめる。」と書いた。

彼女が來るか來ないか、それが問題であつた。彼女は斷る事が出來るのである。併し彼女は來た。

「これでお前は氣が濟むだらう。」と王は元帥からの書面を見てゐる彼女に云つた。

「あゝ、貴方は妾達の黑い運命を何處迄黑くお塗すりになるのです。妾をお呼び寄せになる爲めにわざ〳〵又そんな酷たらしい事をなさるにも及びませんでしたのに。」と彼女は異樣な力を以て云つた。「今度は新しい元帥が殺される番ですね。」

「ヨアブは俺が殺したのではない。偶然に死んだのだ。俺はお前を呼ぶ爲にヨアブを殺す必要はない。だがそんな事はどうでもいゝ。バテシバよ。お前は「妾達」と云つたな。はあ。よく云つてくれた。よく來て呉れたな。お前が今夜來てくれたと云ふ事が俺には凡てだ。あゝ俺はもう死んでもよい。」王は涙を眼に溜めてから云ひながら彼女の手をとつた。

「妾は來たくはありませんでした。それは良人の遺物を見たくなかつたからではありません。だつてそれが嘘であると云ふ事は分り過ぎてゐましたから。本當です。妾は來たくはありませんでした。妾はもう私の感情を持つてはゐません。妾は貴方を憎みました。何故なら妾は貴方を愛したからです。そして貴方がいかにも妾が當然貴方を戀するものと見込んで自惚れていらしつたからです。そして貴方が妾の良人を殺したにも拘はらず、妾はそれを本當には悲しめなくなり、貴方を憎めなくなつたからです。貴方の自惚れは當つてゐる事を認めないわけに行かなかつたからです。そして其事を皆貴方が見拔いていらしつたのが憎くかつたからです。妾は死んだ良人と子供との爲めにどうしても貴方を賤しみ、憎み、貴方から逃げるべき義務を感じました。併しあの接吻は妾を俘にしました。併し妾が晩く自家に歸つて來た時、一人の子はすや〳〵眠つてゐましたが、もう一人の子は妾がゐなくなつたので泣いて妾を呼んでゐました。其筈です。兩親がゐないのですもの！妾は其時打ち碎かれたやうに子供の前に跪いたまゝ泣いて了ひました。そして神にお宥しを願ふやうに、子供に自分の道ならぬ罪をあやまりました。おゝ何と云ふ淺間しい母でせう。妾は心底から自分の罪を悔いると共に自分が母である事、そしてこれが妾の家で、妾のゐる處だとつく〴〵思ひました、妾は王を裏切らうとは思ひませんでした。何故ならもし王に罪があるなら妾も亦罰

せられなければならないからです。妾は悔い改めて淨い贖罪の生涯を送る事を神に誓ひました。そして妾は――本當です――貴方を恨む事なしに、貴方と罪深い自分とから自由になりつゝあつたのです。

處が妾はどうしたのでせう。此三晩と云ふものつゞけ樣に毎晩同じ夢を見るでせはありませんか。妾は祈つて交り氣のない氣持ちになつて、床に入ります。すると夢にウリアが現はれます。良人は怖ろしいと云ふよりは嚴肅な顏をして妾に云ふのです。「俺は不正な犧牲となつた。ダビデは俺を殺した。併しその爲めに亡びる者は俺ではなくしてダビデだ。彼は罰せられる。それが彼の最後の罪にして、且つ最後の仕事だ。しかしその罰によつて善き子が汝の腹から獲られる。その子は父の罪を賠ひ、「智慧」の殿堂の礎を建てる最初の者となるであらう。彼は人類が今迄に產むだ最も賢明なる治者となり且つ最大の榮華を極むる王となるであらう。彼が名は最も賢き裁判者の名として後世に迄祝福されるであらう。わが妻よ、俺は汝が俺を裏切る事を知つてゐる。俺はそれを喜ばないが、汝をもダビデをも



裏切る一般の不幸の爲めに俺はそれを忍ぶ。汝の名は汝等の罪の子の名によつて淨くされるであらう。」

かう云ふのです。何と云ふ不思議な夢でせう。處が又不思議な事には妾の上の子が毎晩妾が皇后になつた夢を見ると云ふではありませんか。今晩、妾はお使ひが來る事を前以て何となしに感じました。そして何かに曳きずられるやうに此處へ來て了ひました。妾は亡びるのでせう。しかし妾にはわかりません。抵抗する力はありません。妾はもう任せてゐます。」

彼女がかう物語つた時其顏は不思議な興奮の爲めに輝いてゐたが、云ひ畢ると彼女は力が盡きたやうに王の膝に倒れかゝつた。

「汝をも、ダビデをも裏切る「不幸」の爲めに。さうだ、裏切られたものはウリア計りではない。吾々は皆犧牲者だ。」王は溜息を吐いて云つた。

「宜しい。俺は罰せられやう。俺は俺の咎を知つてゐる。しかし俺が亡びる前に俺をしてわが幸福な生涯を讃美せしめよ！　此犧牲を祝福せしめよ！その幸福が

罪であるか否か、俺は今問ふ心を持たない。俺をしてこの幸福に醉ひ、此不幸なる幸福を讃美する事によつて神を讃へしめよ。俺は俺の運命を此不幸なる幸福によつて亡ぼし玉ふ神に感謝せずにゐられない！」

彼は喜びの爲めにセンチメンタルになつた。彼は涙を流し乍らバテシバと共に酒を飲み、琴を彈いた。バテシバは其晩彼の許にとゞまつた。

幸福の酒はより苦がい血によつて混ぜられた。バテシバが彼によつてソロモンを孕んだ時、ダビデは自分を裏切る最愛の兒アブサロムの血を流さなければならなかつた。しかし間もなく終つた彼の晩年に於て不幸が果してどれ丈けその幸福を征服したるか――そんな事は誰にも分らない事である。

（一九一七年九月作――一九一八、三月訂正改作）


大正七年八月廿五日印刷
大正七年八月廿八日發行

定價金五十錢
送料金六錢

斷腸文藝叢書第十二編
著作者　陸奥直次郎
發行人　長與善郎
印刷人　和田利彦
印刷所　高橋郁
東京市日本橋區通四丁目五番地
東京市京橋區弓町二十五番地
三協印刷株式會社
東京市京橋區弓町二十五番地
發行所　東京市日本橋區通四丁目
春陽堂
振替一六一七　電話本局五一

著作者印


■圖書目錄贈呈……往復葉書申込次第……春陽堂

# 新興文藝叢書

各冊五十錢・送料各六錢

(1) ■ 一握の藁　田山花袋著

内容　一握の藁　歸國　山の烏小屋　出水

(2) ■ 波の上　正宗白鳥著

内容　波の上

(3) ■ 秋の歌　長田幹彦著

内容　小里　殘雪　石蕗の花　母なき子　鰊ころし


# 新興文藝叢書

錢六各料送・錢十五冊各


(4) ■ 蒼き夜と空　谷崎精二著

内容　暴風雨のあと　妹　淋しけれども　小田切老人　小さき獸　蒼き夜と空

(5) ■ 小作人の死　小川未明著

内容　小作人の死　心臓　魯鈍な猫　密告漢

(6) ■ 初戀　森田草平著

内容　初戀　岡崎日記　女の一生　女の良人

# 新興文藝叢書

各冊五十錢・送料各六錢

(7) ■ 或る朝　志賀直哉著

内容　或る朝　速夫の妹　荒絹　ある一頁　剃刀　濁つた頭　祖母の爲に　或る親子　鵠沼行

(8) ■ 鼻　芥川龍之介著

内容　鼻　羅生門　猿　孤獨地獄　運　手巾　尾了齋覺え書　虱　酒虫　貉　忠義　芋粥　西鄕隆盛

(9) ■ 不幸な偶然　里見弴著

内容　不幸な偶然　大火　母と子　同情　銀二郎の片腕　不良少年　姉の死と弟の生


# 新興文藝叢書

各冊五十錢・送料各六錢


(10) ■ 葡萄園の中　有島生馬著

内容　葡萄園の中　蝙蝠の如く

(11) ■ 恩を返す話　菊池寛著

内容　恩を返す話　ゼラール中尉　ある敵打の話　身投げ救助業　勳章を貰ふ話　盜みをしたN　死者を嗤ふ　惡魔の弟子　病人と健康者　道を訊く女

(12) ■ 陸奥直次郎　長與善郎著

内容　陸奥直次郎　ダビデとバテシバ

# 自然と人生叢書

島崎藤村氏
徳田秋聲氏
田山花袋氏
編修

自然に抱愛せらるゝ人間の囁を聞き、人間に抱愛さるゝ自然の美を味はんとせば當代有數の詩人的文章家が深き感激の所產たる散文につかざるべからず本叢書は當代文章家の作品より優秀なるもののみを選び、紅玉の如き手ごろの列冊として刊行せんとす。その内容の豐潤清麗なる、その裝幀の高雅なる、必ずや諸君を陶醉せしむる新酒にして、また世の藝術を愛好し藝術に志す人々の爲めに好伴侶たることを信ず。

(1)▼草笛　長田幹彦
(2)▼青白む都會　小川未明
(3)▼河霧　吉井勇
(4)▼赤い桃　田山花袋
(5)▼螢の指輪　北原白秋
(6)▼樹かげ　相馬御風
(7)▼手鏡　小山内薫

各冊五十錢・送料各四錢

露西亞現代作家選集

# 零落者の群

昇曙夢氏新譯

■現代露西亞十大作家の代表的作品の選譯集■

生の充てる藝術は、活力の横溢せる生活から生れて來る。半迷半醒の未開狀態より脱して、近年漸く西歐文明の中心に近づき來りし現代露西亞生活は、實に旺盛なる生活の頂上に立つものと云はねばならない。本書は、實に斯くの如き國土のかくの如き生活より生れたる偉大なる藝術的作品の叢集であつて**現代露西亞十大作家の代表的作品**を網羅し譯出したるものである。若しそれ卷頭の長篇「零落者の群」に至りては、名戯曲「夜の宿」の姉妹小説としてゴーリキイ傑作の双璧と稱せらるゝもの、露西亞デモクラットの結晶的名什である。生の底に徹する藝術を求むる新人の將た熟讀玩味すべきものは本書である。譯者昇氏の露西亞文學に於ける造詣とその譯筆の正鵠圖熟とは、既に世の知悉せるところ、今更玆に鄭々するを要しない。

縮刷特製本
定價九十五錢
送料八錢

□夏目漱石氏作□

■合本 鶉籠、虞美人草 一圓七十錢 送料八錢

■合本 三四郎、それから、門 一圓七十錢 送料八錢

■合本 彼岸過迄、四篇 一圓七十錢 送料八錢

■刷縮 文學評論 一圓五十錢 送料八錢

■刷縮 虞美人草 一圓廿錢 送料八錢

三部小說

■刷縮 三四郎 一圓十錢 送料八錢

■刷縮 それから 一圓十錢 送料八錢

■刷縮 門 一圓十錢 送料八錢

■刷縮 鶉籠 一圓廿錢 送料八錢

■刷縮 彼岸過迄 一圓廿錢 送料八錢

■夢十夜 四十錢 送料四錢

■滿韓處々 四十錢 送料四錢

■思出す事など 四十五錢 送料四錢

■草枕 四十五錢 送料四錢

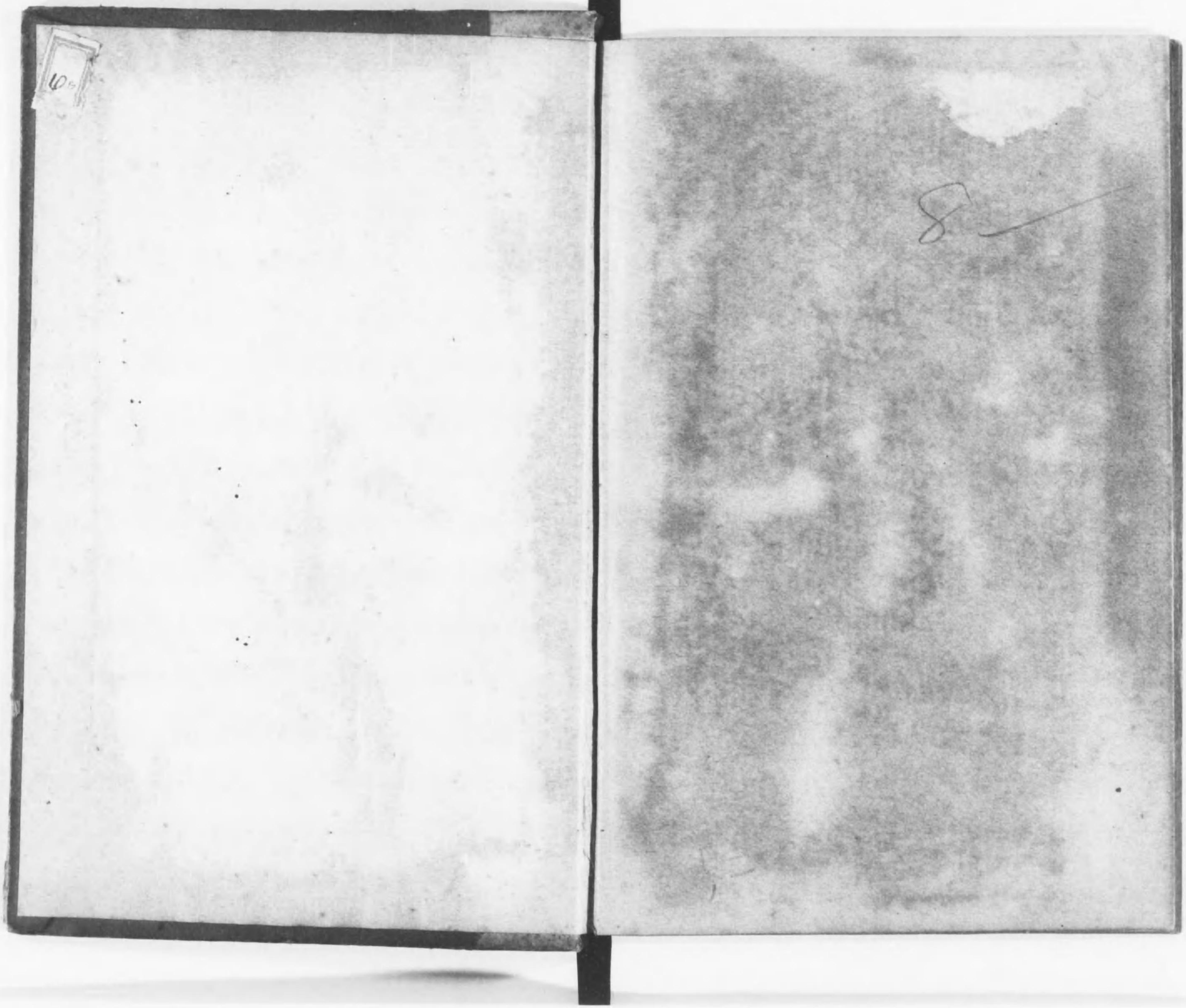
■坊ちやん 四十錢 送料四錢

■切拔帖より 八十錢 送料六錢

■倫敦塔外二篇 六十錢 送料六錢

# 合本 漱石全集

一圓三十錢
送料八錢



終